聖剣使いの禁呪詠唱

15

聖剣使いの禁呪詠唱（ルーラー・ディクト）

あわむら赤光
ill.:refeia

The Swordbringer comes back.

GA文庫

聖剣使いの禁呪詠唱

15

The Swordbringer comes back.

気遣いは無用だわ？
諸葉に付きあってもらえるこの時間を無為にはできないもの

静乃だからこそ成る諸葉との特訓……
冥府の魔女はさらに強くなっていく。

ランクAへの挑戦当日――。
諸葉の教えが勇気をくれる。

特に何をするでもない。
芝生の日陰に寝転んで、
下草を靡かせる
風を受けて、
試合の時間が来るのを
静かに待つ。

で？要件って
何かしら？

僕はこのまま
灰村君と刃を交えに行くよ
黒雷を纏う不審な石動。
静乃たちに立ちふさがる目的とは?

CHARACTERS

キャラクター紹介

2つの前世をもつ少年

灰村諸葉

はいむらもろは

イラスト／refeia

サツキの前世
聖剣の巫女
善なる心の妹姫
嵐城サツキ
らんじょうサツキ
才能を隠す優等生
漆原静乃
うるしばらしずの
静乃の前世
王佐の魔女

聖剣使いの禁呪詠唱（ワールドブレイク）１５

あわむら赤光

本書に掲載されているコンテンツの著作権等の知的財産権およびその他すべての権利は、SBクリエイティブ株式会社または正当な権利を有する第三者に帰属します。
本書の内容を権利者の許諾なく複製・複写・翻案・放送・出版・データ配信（送信可能化を含む）などすることはできません。

カバー・口絵　本文イラスト
refeia

CONTENTS

第一章　新たなる試み
第二章　新年度の実戦部隊
第三章　石動迅のもたらすもの
第四章　尸解行
第五章　ランクAになりたい！
第六章　いと眩きプラーナ　-Challenge 1-
第七章　石動迅の求めるもの　-Challenge 2-
第八章　刹那、埒の外へ　-Challenge 3-
エピローグ

挑戦と成長は、競技ダンスのペアである。
片やリードで片やフォロー。
観客にはとってはただひたすら美しく、踊り手は陰で滝の汗を流す。

四月上旬。ニューヨークの風は冷え冷えとしていた。
まるで、余所者の彼を歓迎せぬように。
雪すら降る中、石動迅は息を白くさせながら郊外の街を歩く。
大都会のすぐ北にあるとは思えない、緑豊かで閑静な土地だ。
平日の真昼間、道行く人も少ない。
一歩、一歩、アスファルトを踏む感触が不快なほどおぼつかないのは、寒さで末端が麻痺しているからだけではない。
緊張している。ひどく。
「お疲れ、ジン！　到着デース」
対照的に、同行者のソフィア・メルテザッカーが、底抜けに明るい声で告げた。
仕事と卒業式で来日していた彼女の、帰国に合わせて石動は同道と案内を求めていたのだ。
（ここか……）
寒さ以上の緊張で身を強張らせながら、石動はソフィアが指す一軒家を睨んだ。
常日頃からの沈殺な物腰をより重く、より堅くして、窺う。
ごく変哲のない白い家。
これが白騎士機関アメリカ支部の、本局だという。
超近代的なビルを想像していたのに肩透かしだ。
それでも気は緩まなかったし、口の中は乾いたままだったが。
春休みを利用し、石動がここまで来た理由は一つ。
本来ならば、校長に就任したばかりで憶えることがたくさんあるというのに。軽くなぞっただけで、置き去りにしてやってきた。
ソフィアを制し、まっさらのスーツとネクタイを正し、自ら玄関ドアをノックする。

訪問の意を表明する。
待たされはしなかった。
すぐにドアは内側から開く。おどおどとした様子で、眼鏡の娘がそばかす顔を覗かせる。
少女と呼ぶには幼くなく、大人の女と呼ぶにはあどけない。
事前情報はあったから、今度は肩透かしなど感じなかった。
『初めまして、アメリカ支部長殿――』
英語に変えて、綺びた声で挨拶をする。
事前にソフィアからアポをとってもらっていたが、改めて自己紹介もする。
ところがその眼鏡の娘――アーリン・ハイバリーは、半ば聞き流しながら玄関から飛び出て、石動の脇を抜け、後で様子見していたソフィアの背中に隠れてしまう。
（なるほど、聞きしに勝る人見知りだな）
内心で一つうなずく石動。
怖がらせないよう声のトーンは抑え、しかし礼儀正しさは微塵も損なわず、用件を告げる。
『あなたに僕の武器を作っていただきたい』
決意したのはあの日。
亜鐘学園崩壊事件の時に、一人の男と出会った。
〝閃剣〟レナード・ヴァン＝バーシー。
あの悪魔の持つ終焉剣は、アーリンの作だと聞いた。
石動とレナード。ともに至高の頂を目指す同士。
しかし、終焉剣を振るうレナードに、石動はまるで歯が立たなかった。
レナードの方が遥かに頂に近かった。
あるいは半歩届いてすらいるのではないかと、そう思わせられるほどあの男は強かった。
願わくば、終焉剣に匹敵する武具を我が手に――

その一心で、石動は何を置いてもニューヨークを訪ねたのだ。
『作っていただけるならば、なんでもいたします』
緊張を呑み込みつつ、石動は続けた。
可憐な娘にしか見えなくても、ソフィアの背中から出てこない人見知りでも。
彼女は六頭領の一角。
人の皮を被った化物なのだ。
そう易々と動かせる相手ではないだろう。
果たして、アーリンはソフィアの後から背伸びして耳打ちする。
それをソフィアが伝言する。
「指を舐めさせて欲しい――とボスは言っているデス」
聞いて、石動は遅滞なくその場で、人差し指を差し伸べた。
驚きもしない。肩透かしも覚えない。
何でもすると、そう言ったのだから。
最初から腹は据わっている。
アーリンがおっかなびっくりやってきて、石動の人差し指を口に含み、舌先でなぞり出した。
得も言われぬこそばゆさがあり、また、ある意味色っぽい行為であったが、石動は一切動じることなくされるがままになる。
これで武具を作ってもらえるだろうかと、そのことだけが一大事で、他の感情を覚える余裕がまるでないのだ。
アーリンはしばらく、丹念に石動の指先へ舌を這わせていたが、やがて緩慢になっていき、完全に止まった。
口から離した。
いかがですか？　と、訊ねようとして石動はできない。
アーリンの顔色を見て、ぎょっとさせられた。
緊張で硬直していた感情が初めて揺れた。
こちらを見るアメリカ支部長の目が、とても冷え冷えとしていたからだ。
そう、まるで石ころでも見ているような瞳。

『率直な話、キミのために武具を作ってあげることはできないヨ。遠いところから遥々来てくれたのニ、どめんネ』
そう拒絶する声音もまた、録音したものかのようによそよそしかった。
『なぜですか!?　理由をお聞かせくださいっ』
石動は堪らず叫ぶ。

『キミから何もインスピレーションが降りてこなイ』

そして、たじろがされた。
言葉という名の刃で、両断されたような衝撃を受ける。
並の男であれば、それでもう撃沈していただろう。
しかし、石動は並々ならぬ覚悟を持って渡米したのだ。
『僕が弱いからですか!?　ならばあなたのお眼鏡に適うよう、もう一度鍛えて出直してくれば、再検討していただけますか!?』
アーリンの両肩をつかみ、食い下がる。
『強い弱いの問題じゃないヨ。それこソ、うちの四銃士よりキミの方が強いみたいだシ』
『ならば、僕が日本支部の人間だからですか!?』
『そんなのも関係ないサ。いいこと閃いたラ、私はどこの誰のためにだって作るヨ』
『ならばなぜ！』
『モー、皆まで言わせるかナー？』
肩に置いた手を、アーリンにすげなく振り払われる。
『キミがつまんない男だから無理って言ってるノ』
ろくに力も入っていないはずなのに、まるで有無を言わさぬようだった。
そのまま、白い家へと帰っていくアーリン。
『作っていただけるまで、僕は帰らぬ覚悟でここに来ましたっ』
石動は小雪で半ば泥濘と化した、地面の上に座り込む。

真新なスーツが汚れるのも構わず。
『無駄なことはやめなヨ』
アーリンは一顧だにしてくれず、玄関ドアの向こうへ消えた。
代わりに、ずっと見守っていたソフィアが、石動の肩に手を置く。
「諦めるデス、ジン……」
優しい、気遣いの声。
「ボスは極めつけの合理主義者です。決して、いやがらせで言っているわけじゃないデス」
「……それは僕にだってわかる」
「だからこそ、ジンがどんなに真摯に、情に訴えても、ボスは動かせないのです。決して」
「……」
地面に膝をついたまま、石動はうなだれた。
うなだれるしかなかった。
ニューヨークの寒風にさらされたまま。

ソフィアに礼を言って別れた後、石動はその日のうちに航空機へ飛び乗った。
進路を西へ、次は中国へと渡る。
独り、狭いシートに背中を預け、わずかでも疲れをとるために、浅い眠りを繰り返す。
春休みは残り少ない。くよくよなどしていられない。
空港を後にすると、砂塵舞う見知らぬ土地を、コートの襟を締めて進む。
北京本局を訪ね、道を訊ね、己の足にて北へ。
雄々しい山々に分け入り、さらに深く、《神足通》に練達しなくては到底、踏み入ることはできないほどの奥部へと登ると、やがて景色ががらりと変わる。
墨絵を彷彿させる幽境へと至る。
目的の人物は、そんな静寂閑雅たる世界の中で、まさしく神仙の如く佇んでいた。

枯淡な味わいのある池のほとり、巨大な蛙にも似た奇岩の背で、囲碁に興ずる老人。
碁盤の向こうに相手は座っていない。
老人はなんとスマートフォンを片手にメールを待ち、その指示に従って黒石を打ち、また沈思黙考して白石を打つと、相手に返信を送る。
この深山幽谷にスマホとは風情もぶち壊しのはずなのに、不思議と趣きを損ねていないのは、老人が纏う侘び枯れた風格の所以であろう。
五十年、百年生きたくらいでは、それほどの佇まいは醸し出せない。
五百年を生きる、正真の仙人だからこその境地。
彼こそが中国支部長、馬迭戈である。
石動は奇岩の裾から直立不動で見上げ、声もかけずに碁が終わるのを待つ。
一時間。
二時間。
時が止まったようなこの幽境の雰囲気のせいで、迭戈の遊興は無限に続くのではないかと錯覚させられたが、石動は口元を引き結んで堪え、待ち続ける。
そうして時間感覚が完全に摩耗したころ、迭戈は最後の石を打ち終え、返信をし、スマートフォンを懐にしまった。
好々爺然とした笑みを浮かべ、岩下の石動に初めて顔を向ける。
「すまんのう、お若いの。指導碁を頼まれておっての。陳の坊やとやると、いつも長引くのよ」
「かまいません」
石動は首を左右にし、
「亜羅学園新校長、石動迅と申します」
「これは丁寧に……痛み入るのう」
迭戈は笑みをより一層柔らかいものに変え、顔中をシワだらけにした。
こんな余人を寄せ付けぬ深山で、隠遁生活を送っていても、人間嫌いでは全くないらしい。
顔、声、物腰全てを使って、和やかなムードを作ってくれる人生の大先輩のおかげで、石動は張りつめていた気

を自然とほぐされる。
口元もやや緩ませ、用件を告げた。
「御老人はこの世界で最強の白鉄だと聞き及んでおります。そのあなたにお願いしたいのです。道に迷い、壁を感じているこの僕に、何か、一手、ご教示をば」
「ふむう……」
迭戈は瞑目し、長い髭をしごいた。
それだけでたちまちに、まるで人が変わったように好々爺の雰囲気が抜け落ちる。
周辺にごろごろしている巌の一つと化したかの如く、厳格な空気を身に纏う。
迭戈が沈思黙考する時間は決して長くなかった。
「すまんが……わしはぬしの力にはなれんの」
両目を閉じたまま、心底申し訳なさそうに答える迭戈。
またか、と石動は足元が崩れ落ちるような、強烈な不安感を刻み付けられる。
「なぜでしょうかっ……？」
問いに、迭戈はしばし口をつぐみ、その後、重々しく開いた。
「そもそも、わしはの、長生きしたい一心で仙道を修め、肉を捨てたジジイにすぎんのよ。結果、たまたま強くなれただけでの。……ゆえに昇仙を望む者ならば、弟子にとっておる。わしは仙骨と呼ぶが、白鉄の素質さえあれば、来る者を拒むつもりもない――」
迭戈が、ゆらりと、双眸を開いた。
「――だが、ぬしはそうではなかろう？」
浄玻璃鏡の如き二つの瞳が、石動の心を暴き立てるように、ひたと見据えてくる。
「二十年、三十年と、昇仙のための修行を黙々としたいわけではあるまいよ？　今すぐにでも、もっと、もっと強くなりたいのであろう？　ならば、わしがぬしに教えることはない」
「それはっ、手段を知らないという意味ですか？　知ってても教えぬという意味ですかっ？」
石動は蛙岩の下から、天へと訴えかけるように叫ぶ。
迭戈は巌の峻厳さを纏ったまま、返答した。

「ぬし、鏡を見てみい。今にも悪魔に取かされそうな顔つきになっておるよ」
「……！」
石動は瞠目させられる。
咄嗟に何も言い返せない。
迭戈が頭をしゃくってみせ、石動はふらふらと池のほとりまで歩む。
膝をつき、両手をつき、池を覗き込んで、水面に映る己の顔を眺める。
いつもの自分と、何も変わりはしない。
だからこそショックを受けた。
石動は、迭戈の言葉を疑っていない。
疑わせないだけの重みが、この五百年を生きる仙人の声音に宿っていたからだ。
ならば、自分はもうずっと、迭戈の言う危うい顔をしているということ。
「男じゃもの、強く在りたいと願うは自然。ぬしを悪と断じるほど、わしも偏狭ではないさ。ただ、わしもジジイじゃもの、こう願うのよ。あまり生き急ぐな、若人。そこへ至るまでの全てを楽しむ余裕を持てば、人生とは驚くほど豊かになるものよ」
蛙岩の上に座す迭戈が、立てた人差し指で天を示し、滔々と語った。
清流のように石動の耳に注ぎ込んで、胸に染み渡る。
痛い、言葉だ。

石動が目指す果て――灰村諸葉は常々言っている。
強くなるためには、気の持ちようが大事。
そして、自然体。
迭戈の今の教えにも、それと通ずるものがある。
二人の絶対的強者が同じことを言っている。
だから、耳に痛い。
石動はこの一年間、崇拝にも似た感情の対象である諸葉の言葉を信じ、前向きな気持ちで強くなるための努力に

取り込み、またその努力を楽しんだ。
手応えは間違いなくあった。
諸葉の言葉は正しいと思った。
しかし、レナードとの邂逅によって覆された。
それでは足りないのではないかと——
初めて、諸葉の言葉に疑問を抱いてしまった。
一度疑問が胸中に生まれれば、もう止まらない。諸葉を崇拝し、諸葉の言う通りにしているだけでは、諸葉を越えることは永遠にできないのではないかと、疑心暗鬼に囚われた。
だからこうして、日本を飛び出し、アーリンや迭戈を訪ねずにいられなかった。

石動は迭戈へ答える。率直に。
「それを、真実、楽しめるほど、僕の心は強くなかったのです……っ」
絞り出すような声で。
迭戈もまた答える。
否、独白する。
「……ヂーシンと同じことを言う、の」
寂しさと哀切に満ちた声で。
それきり言葉は途絶える。
人里離れた仙境に、荒涼とした風が吹くのみ。
石動は立ち上がった。
立ち上がれるだけの気力を、彼は持っていた。
それだけはちゃんと、持っていた。
迭戈に一礼し、踵を返す。
とぼとぼと下山していく。
その背中に迭戈の声がかかる。

「電話番号、交換しておかんか？」
優しさが今度は胸に痛かった。
石動は甘えを振りきるようにして、何も答えず仙境を後にした。

すぐに帰国した石動は、亜鐘学園の近くに借りたマンションへと、重い足を引きずるように歩いていた。
深夜だ。
華やかには程遠い地方都市のゆえで、通りにはもう人影がない。
管理の行き届いた街灯だけはやけに明るく、それがかえって辺りの空疎さを浮き彫りにする。
そんな行く手に、驚くべき人物が待ち構えていた。
まず聞こえたのは、アスファルトを叩く杖の音。
石動は反射的に顔を上げる。
道服を着た中肉中背の男が、杖を頼りに反対側からやってきている。
糸のように細いその目は、本当に光を失ったのだと報告で聞いた。
へらへらとした独特の笑みが、街灯の薄明かりに照らし出される。
ルー・ヂーシン。
元、中国支部長代理。今は六翼会議の一翼だ。
石動は咄嗟に、懐の認識票を抜こうとする。
だが、まだ、指も動かせないうちから、ヂーシンが機先を制すように、
「警戒されずともけっこうですよ、石動様」
さも温厚に聞こえる声で告げた。
初対面ではない。この男の言葉の軽薄さは、石動も知っている。
この師弟はどうなっているのか、あらゆる言葉が真理と誠意でできているような迭戈とは正反対なのだ。
石動は決して警戒を緩めず、認識票を抜いて握りしめた。
ヂーシンも肩を竦めるだけで、それ以上は何も言わない。

「僕に何の用だ？」

硬い声音で問い詰める。

およそ尋常な要件ではあるまい。ランクSの彼からすれば、石動など路傍の石。にもかかわらず、わざわざ訪ねてくる価値があるというのだから。

ヂーシンはあっけらかんと語り出した。

「レナード様より聞き及んでおりますよ。ランクSになるのが石動様のお望みのようで」

「……それで？」

「ワタシ、生来、口下手でして、機場様のように上手に口説くことはできません。ですので、単刀直入に申し上げますが――」

へらへらとしたヂーシンの薄笑み。

それが、街灯の明かりのせいで、濃い、不気味な陰影がついて見える。

悪魔の笑みとはこういうものかと、思わせるに充分な凄みを滅える。

「――もっと強くなりたくはありませんか？」

ヂーシンが囁いた誘惑は、石動にとって抗い難いものであった。

聖剣使いの
禁呪詠唱
ワールドブレイク

CHAPTER

第一章　新たなる試み

六月下旬。
諸葉が二年生に進級して、早や三か月が経とうとしていた。
新生亜舞学園は校舎を再建させただけにとどまらず、新校長の石動によって急改革が進められ、在校生たちは大きな変化を感じている。
石動の改革の最たるものが、「リーグ戦制度」の導入であった――

もうすぐ来る初夏の気配を思わせるような、強い日差しが第一武道館を焼いている。
しかし、館内に渦巻く熱気はより激烈。
見学席を埋め尽くす、全校生徒たちの歓声がやまない。
「嵐城ちゃん、ファイトー！」
「百地ー！　そんなバカ、ぶっ殺したれー！」
「うおおおおおカミー先輩のしょおおおおりをっ……いのってえええええっ」
「「死ぬ気で応援すっぞ」」
「「死ぬ気で応援すっぞ」」
「「死ぬ気で応援すっぞ」」
「竹中くぅぅん♥　可愛い顔にケガしない程度にがんばってねえええええん♥」
とにかく熱い。
比喩ではなく、館内温度が外気を遥かに超えるほど、人の熱で煮え滾っている。
これほどのお祭り騒ぎ、去年までは――実戦部隊が《異端者》を狩る、ライブ映像を流す時にだって――起こら

なかった。
三百人を超える大歓声が、実技場に立つ四人に向けられている。
「落ち着いてね、嵐城さぁん！　そしたら絶対に勝てるから！」
「百地先輩の足を引っ張らないでね！　そしたら絶対に勝てるから！」
主にクラスメイトの女子たちからの声援を受け、嵐城サツキは、
「ふぉ～～～ふぉっふぉっふぉ！　まーかーせーてーちょうだい！　皆の期待と応援が、あたしのパワーの元なんだからっ。今日も絶対絶好調よっ」
両手を腰に当てて、得意満面、高笑いする。
一方では、
「百地！　あんたの力を疑う奴はもうどこにもいない！　そいつをぶちかましておやりよっ」
「今日も鮮やかに勝ってくださぁぁぁい、せんぱいぃぃぃ！」
「よっ、三年三組のアマゾネスっ」
全学年の女子から、満遍なく声援を受ける百地春鹿が、
「今どさくさでアマゾネスっつった奴、後で憶えてろよっ」
目尻にちょっとだけ涙を溜めて、見学席を睨んでいる。
そんなサツキと春鹿、二人の肩に、諸葉は後から両手を置いた。
二人の視線が〝コーチ役〟である諸葉に集中する。
同時に二人が落ち着いたのを見て、諸葉はささやくように言った。
「目の前に集中ですよ。今日の相手は一筋縄ではいかないんですからね」
前方、距離を開けて対峙する、二人の三年男子の方を促す。
彼らこそが、サツキ&春鹿コンビの対戦相手。
浴びる声援の強さ、多さもこちらに負けてはいない。
「竹中くぅぅん♥　応援してあげるから、手を振ってぇん♥」
「あー、ずるい♥　こっちにも手を振ってください、先輩ン♥」
「あはは、バニクってるセンパイ、マジかわいー♥♥♥」

そんな女子生徒の黄色い声援に応えようと、慌てふためきながら、あちこちに手を振り返している草食動物みたいな少年が、竹中半太。

実戦部隊の現副長で、ランクCの黒魔だ。

この竹中と、サツキ&春鹿コンビで女子全員の声援を分け合っている感じだった。

では、男子生徒はどうしているのかというと――

「うおおおおおカミー先輩っっっ、絶対しよおおおおりいいいいいいっ」

なぜか学ランを着た二年が、見学席で応援団長まがいのコールをし、

「「「死ぬ気で応援すっぞ」」」

「「「死ぬ気で応援すっぞ」」」

「「「死ぬ気で応援すっぞ」」」

残る男子たちが異様な熱気で連呼する。

もはや怪しげなカルトめいたムードを放っている。

今年度に入って二カ月半、その人柄と実力で男子たちだけのハートをわしづかみにした、実戦部隊の新隊長は、

「OHよ！　今日もおまえらに勝利の美酒を味あわせてやっから、オレ様にノッとけやあ！」

見事な倒立を決め、両足を振って声援に応えるという、独自のポーズに酔いしれていた。

誰あろう、万年堂亀吉その人である！

彼の独自のポーズを眺めながら、サツキが一言ポソリ。

「一筋縄でいかないって、所詮カメヨシじゃん」

「こーら」

妹の頭を、諸葉は後から軽く小突いた。

「奇行や言動で相手の実力を見誤る奴は、いつまで経っても強くなれないぞ」

「えへへ、ごめんね兄様」

サツキは叱られても、どこかうれしそうだった。

ちゃんと反省はしてる様子なので、諸葉もよしとする。

また一方、

「モモ先輩はちょっと硬いですね」

触れた肩の様子からわかる。

相手を舐めてたサツキとは真逆。

このコンビはまあ何から何まで正反対というか。

諸葉は苦笑させられ、サツキも「カメヨシなんかにビビってるワケ？」とケタケタ笑う。

「あ、あいつ一人にビビってるわけじゃねーし――」

ただ、春鹿の緊張は少し毛色が違ったようで、

「――前に、万年堂に言われたんだよ。谷間の世代って笑われないよう、がんばってこうぜって。石動先輩の代は、本当に強い人たちがゴロゴロしてただろ？　もしあの人たちがいたら、アタシや万年堂や竹中が今こうして優勝争いの舞台に立っていられたか、実際のところわかんないじゃん？」

いつもの自虐ではなく、むしろ成長を感じさせるような強い眼差しを天井に向けて、冷静な口調で語る。

「だけど、それがたとえ事実だとしても、黄金世代が抜けたからアタシらがここにいられるだけだろって――笑われるような戦いをするわけにはいかない」

見学席にいる全校生徒たちに、現二年の実力を激励も疑わせないほどの、見事な戦いぶりを発揮しなければいけない。

その気負いが、春鹿を硬くさせていたのだ。

「大丈夫だってば！」すぐさまサツキが春鹿を笑い飛ばす。「このあたしとコンビ組んで、ついてこられるんだから、モモ先輩は自信持ちなさーい」

「おまえなあ……人の話、聞いてるか？」

春鹿がジト目になって隣のサツキを睨む。

「大丈夫ですよ。モモ先輩もカミー先輩たちも、天王山に相応しい試合ができます」

諸葉は春鹿の肩をつかむ手に、力を入れる。

「だからはりきって行きましょう。そして、勝ちましょう」

「……オッケ」

その諸葉の手に、春鹿が手を重ねる。

優しくだ。
もう緊張はなくなっていた。

折よく、審判役を務める教師・田中太郎がアリーナへやってきた。
見学席の生徒たちが、潮が引くように静まっていく。
諸葉はサツキと春鹿の肩を叩いて、見学席へ退散する。
最前列から二人を見守る。
田中はアリーナの中央に立つと、よく通る声でアナウンスを始めた。
「これより一学期エキスパートリーグ、最終戦にして優勝決定戦を行う。両コンビともここまで全勝という結果で、素晴らしいというしかないよ。特に、黒魔でありながらメイジリーグではなく、エキスパートを選んでなお勝ち抜いた、万年堂君と竹中君の勇気と奮闘は見事だった。まずはそれを先生から言わせてくれ」
田中が首をひねって、視線を見学席の方へ向ける。
その先には、通路から姿を現したばかりの新校長・石動がいて、田中への同意を示すように、沈級に首肯してみせる。
恐くて厳しい先代隊長にまで褒められ、特に亀吉がはにかんだ。デレデレになった。
「百地君と嵐城君コンビの現獲得ポイントは一一二八P。自分たちがランクBに相応しいことを、さすが数字でも証明したね」
「トーーーゼンですともっ。あたしたちが一〇〇〇ポイント届かなかったら恥ですから！」
サツキが大威張りで田中に応え、隣で春鹿が恥ずかしそうにした。
「万年堂君と竹中君コンビは九六三ポイント。この試合に勝てば逆転するし、一〇〇〇ポイントに届く。晴れて君たち二人もランクBに認定されるわけだね」
「百地と嵐城がBで、オレ様がCのままっていう不条理と不公平が、やっと是正されるってわけだな、タナT！やっぱ天は正直者を放っとかないんだよなあ」
亀吉が大威張りで田中に応え、隣で竹中が「僕のことは……？」と自分を指している。

「優勝コンビには、校長先生への挑戦権が与えられる」
田中のその言葉にサツキ、春鹿、亀吉の目つきが変わり、鋭く輝いた。
見学席から石動が、田中のアナウンスを継いで、錆びた声で宣言。
「今日勝って、十日後の僕との試合にも勝てば、ランクAに認定することを改めて確約しよう」
静まっていた武道館内が、一気に沸き上がる。
全校生徒たちは皆、大興奮である。こんなチャンス話、たとえ自分のことではなくとも、聞いただけで奮い立たずにはいられないとばかりに。
そして、再びサツキたち四人へ熱烈な声援を送る。
田中はまだアナウンスを続ける気だったようだが、渦巻く大歓声の前に諦め顔になると、右手を高々と掲げた。
試合準備の合図だ。
サツキが懐から認識票を抜き、金色の通力を込める。
顕現したのは、やや小振りの剣。
精緻で美しい装飾とアーキュールの銘を持つ、伝家の宝刀。
隣に立つ春鹿が、さらに刀身の短い小剣を顕現させる。
軽さと取り回しに優れ、翼を模した装飾が見る者にも捷そうな印象を与える。
対する竹中は黒魔ゆえに無手のまま。
しかし、亀吉は黒魔であるにもかかわらず、腰に佩いていたサーベルを抜き放つ。
それだけで亀吉応援団が沸き立った。
亀吉は大声援に押されながら、得意絶頂でサーベルを放り、もったいぶった口調で唱える。
「――《解放》ンンン！」
宙舞うサーベルがたちまち主に応え、その形を膨張させ、その姿を変貌させた。
魔法のように顕れたのは、亀戦車。
鋼の甲羅を黒光らせ、四肢代わりのキャタピラを有し、首の代わりに主砲が聳え立つ。
世にも奇抜な搭乗・操縦型のゴーレムである。

開いた背面ハッチから亀吉が意気揚々と、竹中がこそこそと乗り込む。
これで四者の準備が整った。
二人の少女が剣を構え、サイズと重量で威圧的雰囲気を醸し出す戦車と対峙する。
田中が、掲げていた手を振り下ろした。
試合開始。
『先手ひっしょおおおおおう！』
亀戦車の内蔵スピーカーから亀吉の叫びが轟き、主砲から弾をぶっ放す。
魔力でできた砲弾だ。
それが開始位置に立つサツキを襲った。
スピード特化の春鹿ではなく、パワーとタフネスに優れるが鈍重な彼女を狙うのは、サツキにとっても予測のうちだっただろう。
しかし、わかっていてもかわせないものはある。
撃ち放たれた砲弾は空中で炸裂し、無数の礫と化すと、雨霰と降り注ぐ。
こんなもの、サツキの脚ではそうそうかわせるものではない。
「あだだだだだだだっ」
全身を数えきれないほど殴打され、半泣きで悲鳴を上げる。
通力のほとんどを守りに回すも、ダメージをゼロにするというわけにはいかない。実際、痛くて堪らないらしい。
『ゲヒヒヒヒ！　ただの砲弾だと思った？　残念っ、榴弾モードでした！　オレ様のゴーレムはオレ様に似てなて、とても器用で可愛い奴なのさァ！』
と、亀吉は自慢たらたらである。
してやったりのゲス顔が、目に浮かぶようなはしゃぎよう。
亀吉応援団も大盛り上がりで、太鼓を鳴らすわウェーブが始まるわ。
竹中が『か、亀吉君、あんまり挑発しない方が……』と諫めても聞こえてない。
「知ってるわよ！　わかってるわよ！」
サツキが悔しげに怒鳴り返す。

亀戦車の主砲から発射される弾が、一種類ではないことくらい、今までのリーグ戦で散々見てきたことだ。
それを亀吉にいちいち説明されると、余計に煽られている気がするのだろう。
『あっそ？　じゃあ本邦初公開の一発いっちゃおうカナ？　カナ？』
亀吉がものすごく気に障る言い方で挑発を続け、
「来るなら来なさいよ！　あたしは逃げないから！」
サツキは悔しげにしながらも、油断なく一層身構える。
『とか言って、もっかい榴弾ドーン！』
しかし、亀吉がぶっ放した二発目は、先ほどと同じ雨霰と降り注ぐ魔力の礫で、再び浴びるサツキが「痛だだだだだっ」と悲鳴を上げる。
『逃げねーじゃなくて逃げられねーじゃねーか！　手も足も出ねーじゃねーか！』
哄笑する亀吉。
『グラグラグラグラグラ――げぇ!?』
それが途中で苦悶のうめきに変わった。
亀戦車が急発進を始め、強い荷重がかかったからだ。
『嵐城さんばかり構ってちゃダメだよ、亀吉くぅぅぅん』
と、亀戦車のキャタピラを操縦する竹中が泣き言をいう。
当たり前の話で、サツキに攻撃が集中すれば、春鹿はフリー。
自分は安全だと見切るや、大胆に突進を敢行している。
亀戦車は円形アリーナの外周に沿って走り、逃げようとする。
近代兵器の戦車は意外と速度を出せるのだが、亀吉の戦車は見た目通りのノロマ。
機動力に乏しく、春鹿の追撃を到底、振りきれるものではない。
『ヒェー』
亀吉が慌てて主砲の角度を変え、春鹿を迎撃せんとぶっ放す。
厄介な榴弾を前にしても、春鹿は冒険たっぷりで、
「近すぎだよっ！」

空中で榴弾が炸裂するその前に、易々とかいくぐってみせる。
そうなるともう、亀戦車が次弾を撃つよりも、春鹿が肉薄する方が早い！
「その首、もらったっ」
厚くて硬い甲羅部分など無視し、細くて長い主砲を両断しようと斬りかかる春鹿。
鋼で鋼を強く打つ、耳障りなほど甲高い音が響き渡る。
見学席では耳を塞ぐ者が続出だ。
一拍遅れて、
「い――――――ってえええええ!?」
春鹿の絶叫が撒き散らされた。
見れば、亀戦車の主砲は全く無傷。
逆に斬りつけた春鹿の右手首の方が、変な方向に曲がっている。
細くて切断可能に見えた主砲がその実、メチャクチャ硬く、斬ろうとしたのが斬れずに跳ね返されて、予想外の負荷が彼女の手首にかかり、グニャっといったわけだ。
『ヒーーーーッ！　ヒーヒヒヒーッ。び、びびらせんじゃねえ、百地っ。この貧弱貧乳があ！』
亀吉がまだ震え声で強がった。
「ちょ、ちょっと硬いからってチョーシ乗んなっ」
ダブルで図星を指された春鹿も震え声になった。
痛みもまだ残っているだろう。
それは《内活通》を走らせることで無理矢理抑え、
「くおのっ、くおのくおのっ……！」
今度は薄いキャタピラ部分を狙い、八つ当たりのようにゲシゲシ叩く。
しかし、これも見た目に反して相当硬いようで、まるで傷つけられない。
春鹿の《太白》が非力なのもあるだろうが、やはりフランス・《元素衆》の筆頭騎士ズラタンと共同開発した、このゴーレムの防御力は尋常ではないということだろう。
『キヒヒっ。オラ、竹中！　ボサっとしてないでそのザコ轢き潰したれっ』

『えっ!?　それは百地さんが可哀想だよ……』
『バァアアアアカ！　おまっバァアアアアカ！　試合なんだから、可哀想もどくけし草もねーーーだろがっ。結界もあんだし遠慮なくやれやァ！』
「ご、ごめんね、百地さんっ」
亀吉に急き立てられ、竹中が戦車の進路を変更し、春鹿を轢こうとする。
しかし、春鹿は逃げようとも身構えようともしなかった。
『観念したか、百地ィ！　往生際のいい奴はきらいじゃねえぜぇヒャハハハァ！』
亀吉が世紀末の救世主な伝説に、ザコ役として登場しそうな高笑いをしたのと、
「あたしのこと忘れてんじゃなああい！」
横合いからサツキが、人間砲弾の如く亀戦車のドテっ腹に突っ込んだのは、同時だった。
衝撃で亀戦車の巨体が傾ぎ、コンクリートの地面の上を滑りながら、数メートルも弾き飛ばされる。頑丈、堅牢な鋼の甲羅が一部ひしゃげて、陥没する。
戦車対戦車の突進対決は、サツキの勝ち。
小柄なサツキがバカデカい戦車をはね飛ばす絵面に、見学席からどよめきが起こった。
春鹿が逃げなかったのはこれが理由。フリーになった相方がフォローに来てくれるのが、冷静に見えていたからだ。
一方、痛烈な横槍を入れられた亀吉は収まらない。
『くおんの馬鹿力がっっっ』
「馬鹿力って言わないでよっ。愛と正義の力よ！」
『こんな暴力的な愛と正義があるかボケェ！』
サツキと罵り合いながら、また榴弾をぶっ放す。
それも二射、三射と立て続けにだ。
「ギャーいじめっ子ぉ！」
これをかわせないサツキは、その場に踏みとどまって守りの通力を振り絞るしかない。
後退で遠ざかっていく亀戦車と距離を詰めることも、反撃することもできない。

ダメージを最低限に抑えつつ、痛みに耐えるのが精一杯。
すかさず今度は春鹿がフォローに入ろうとするが、
「……どうしよ？」
亀戦車を斬っても突いても叩いても跳ね返され、亀吉からも無視され、援護が成立しない。
主砲の中に小剣を突っ込むという無茶までするが、漫画のように暴発したりなどせず、小剣ごと榴弾をぶっ放して、サツキにぶつかるだけだった。

そのまま亀吉はもう、サツキ一人に攻撃を集中させる。
どうせ春鹿を狙っても当たらないし、春鹿の攻撃も恐くない。
だったらサツキを塩漬けにしてしまえという、ごく真っ当な戦術判断だ。
石動の制定した試合ルールでは、コンビのどちらか一方が戦闘不能になった時点で敗北。
榴弾でコツコツとダメージを蓄積させ、サツキのノックアウトを狙う。
「卑怯よ、万年堂！」
「そんなつまんない試合して、恥ずかしくないんですかぁ!?」
「あたしの竹中きゅんに悪事の片棒、担がせてんじゃないわよ！　独りでやんなさないよ！」
見学席の女子たちから一斉にブーイングが巻き起こる。
『ゲハハハヒア！　勝てば主人公、負ければ悪役なんだよおおおっ』
しかし亀吉は痛痒も感じておらず、むしろゲッスい喜悦を覚えていた。
「うおおおおカミーバイセンかっけえええええっ」
「開き直れる漢の潔さァ！」
「実際、カミーの言う通りだ！　負ける嵐城が悪ってことだろ！」
「「カ・ミ・イ！　カ・ミ・イ！」」
見学席の男子たちから一斉にカミーコールが巻き起こる。
両陣営の罵倒と応援でがっぷり四つ、全校生徒のボルテージも最高潮に達していた。

そんな大騒ぎの中で、
「サツキ！　もう諦めろっ」
春鹿の鋭い声が館内を切り裂く。
夢中で叫んでいた生徒たちの誰もが、「え？」と押し黙る。
春鹿の台詞はまるで降参宣言のように聞こえたからだ。
無論、そんなわけはないことを諸葉は知っていた。
春鹿の指示に、榴弾を堪えながらサツキが返答する。
「いやよ！　あんなカッコ悪い真似、公衆の面前でするのはっ」
「しょうがねえじゃんっ。このままじゃ勝ち目ねえじゃんっ」
「でもだからってっ」
「じゃあ、おまえいいんだな？　バ亀吉に負けて悔しくないんだな？　諸葉にせっかく伝授してもらった秘策、バーになっていいんだな？」
「ううぅっ、わかったわよ！」
サツキがやけっぱちで叫びながら、全身に走らせていた通力の質を変え、刀身に込める。
剣を振って《太歳》を放つ。
破壊の通力を孕んだ太刀風が、一瞬、榴弾の雨を吹き飛ばして間隙を作り出す。
《太歳》は素早く連発できる業ではないし、それより亀戦車の榴弾発射間隔の方が短い。
実際、亀吉は構わず次弾をぶっ放す。
通力の大半を《太歳》に回したサツキに、これを防ぎきる術はない。
ゆえにこの一瞬の晴れ間は、乾坤一擲。
サツキが走り出す。

春鹿も走り出す。
互いが互いを目指して、一瞬で距離をゼロにして、
「「合体！」」
と二人が叫んだ幻聴が、諸葉には聞こえるようだった。
それくらい息ピッタリに、サツキと春鹿は瞬時に重なり合ったのだ。
しばらく静まり返っていた見学席が、信じられないモノを目の当たりにして一気に沸いた。
そう。
サツキと春鹿はその場で肩車をしていた。
さっき小剣を失った春鹿が下で支え、サツキが上でビシっとアーキュールを構える。
『ぶっびーーーーーーっっっ。なんだそりゃあ!?』
失笑し、嘲笑する亀吉。
『いやな予感がするよ……』
と竹中が忠告しても聞いていない。
「なんだと思うならセンパイ、試してみればぁ？　ふおっふおっふおー」
『言われずともやったらあやコウハイ！』
サツキに挑発され、肩車中の二人目がけて榴弾発射。
空中で炸裂し、礫の雨を降らす——前に、サツキと春鹿の姿がかき消えた。

かき消えたと思わせるほどの、高速で動いた。
真っ直ぐ、亀戦車の方へ。
炸裂前の榴弾をかいくぐり、あっという間に接近する。
「今までのお返しよ！」
すかさずサツキが剣で叩くように斬りつける。
肩車という不安定な体勢のため、腰の入っていない手打ちだ。
それでもサツキの通力はビカ一で、見学席にいる全員の、下腹に響くような重い打撃音が轟くと、鋼の甲羅に亀裂が刻まれた。今やサツキの《太白》は、ソフィアに勝るとも劣らない威力にまで成長しているのだ。
『デタラメやあ！　こんなんデタラメやあ！』
『げ、現実を直視しようよ、亀吉君』
竹中が戦車を全方後退させ、亀吉がわめき散らしながら榴弾を放つ。
しかし無駄。
肩車の下になった春鹿のスピードで楽々回避、接敵し、肩車の上になったサツキのパワーで亀戦車の甲羅をゴリゴリ削る。
冗談みたいなこの戦法が、めっぽう強い。

亀戦車をどう攻略するかについてはもちろん、諸葉も交えて事前に話し合っていた。
サツキは榴弾砲撃で釘付けにされるのではないか？
春鹿の《太白》は効かないのではないか？
その想定はちゃんとしていたし、事実そうなった時、亀吉がサツキを塩漬けにする戦術をとってくるだろうことは想像に難くなかった。
予測できたからこそ、諸葉は一計を案じ、打開策をコーチしていたのだ。
それがこれ。
戦術「肩車」である。
機動力に乏しく、斬るのも容易なほどデカい亀戦車相手でもなければ使えない戦法だが、やはり効果覿面であった。

『そんなみっともない戦い方して恥ずかしくねーのかよ、ランジョオオオオ!?』
「ハア？　勝てば主人公だって最初に言い出したの、あんたなんですケドォ？」
『「そうよ、負けるカメヨシが悪よ！」』
サツキの反論を、見学席の女子たちが大声援で後押しする。
「……うおー。カミー先輩、絶対しょーりぃ」
『「……死ぬ気で応援すっぞ」』
逆に亀吉応援団はたじたじになっている。
春鹿は勢いに乗って逃げる亀戦車を追っかけ回し、サツキがタコ殴りにする。
やがて――
『ＮＯＯＯ

を差しかねないという配慮だろう。
今は石動の存在も挑戦権のことも忘れ、勝利の喜びに浸りなさい、と。
元実戦部隊隊長は意外と気遣いの人であり、校長になった今も変わっていなかった。
諸葉は口元に微笑を浮かべる。
それからアリーナのサツキと春鹿に向き直り、惜しみない拍手を贈った。
周りの誰かが倣って拍手を始め、また一人、さらに一人と伝播し、見学席に拍手の輪が広がっていく。
サツキや春鹿を応援していた者たちだけではない。
亀吉や竹中を応援していた者たちも、負けたりとはいえその健闘を讃えて拍手する。
武道館の中が、熱い拍手の波でいっぱいになる。

黄金世代が抜けたから、春鹿たちがこの場に立っていられるのだと――
そんなことを考えていそうな者など、一人も見当たらなかったのだ。

SECTION 2

第二章　新年度の実戦部隊

サツキたちの優勝決定戦の後、各クラスに帰って終わりのホームルームを挟み、実戦部隊の放課後特別演習が始まる。
戦闘服に着替えた諸葉は、第三武道館に向かう道すがら、
「モモ先輩にも聞いてみないとだけど、サツキは優勝祝いって何がいい？」
そんな話を振る。
間髪入れぬ速度で、
「遠くまでデート！」
と、叫びかけたサツキの口を、右手で塞いだのは漆原静乃だった。
「優勝もしたし、私と諸葉もそろそろ身を固める相談を始めてもいいころだと思うの……」
さもしおらしげに左手を頬に当てる。
「独りでコンクリでも使って固めてなさいよ！」
サツキが静乃の手を乱暴に振り払い、頭から湯気を昇らせて、
「それに、あんたが優勝したんじゃねーーーんですケドォ？」
「あら、失礼。てっきり私の全国居眠りコンテスト優勝のお祝いかと」
「そんなコンテストが実在したらヨモスエよ！」
「証拠に賞状の写真、見る？」
「マジで？　どれどれ……」
静乃が取り出したスマートフォンの画面を、サツキがしげしげと覗き込んだ。
途端、静乃がホームボタンを押してパシャリ。

サツキの顔のアップ画像を撮影し、さらに立派すぎるヒゲを付け加えてくれるジョークアプリで加工して、諸葉に見せる。

雄々しき剛毛をたくわえた、サツキのヒゲ面ドアップ。

画面を覗く表情がまた、何とも言えぬおマヌケさを足す見事なトッピング。

諸葉は一秒たりとも堪えることができず、噴き出した。

「兄様までひ～ど～い～」

「ゴゴゴメン。でもこのサツキ、すげえケッサク……」

「素晴らしいわ。皆にもメールして、この笑いを共有しなくてはね」

「させるか！　早く消しなさいよ、その画像！」

「消してもいいけれど、貸し一つよ？」

「チッ、しょうがないわね――なんて言うわけないでしょーが！」

サツキが静乃のスマホにつかみかかり、静乃がとられまいとその場でくるくる回って逃げ、サツキがその周りをくるくる子犬のように追っかけ回す。

（仲良くなったよなあ、こいつら）

諸葉は自然と笑みが零れる。

一年生のころを考えると、信じられない光景だ。

サツキが静乃からスマホを奪い、肩で息をしながらさっきの写真データを消す。

「優勝……っ、祝いの……っ、話が……っ、なんで、こう、なるのよっ……」

「あら？　誰が優勝したの？」

「あたしとモモ先輩ぃ！　あんた、見てなかったワケェ!?」

「誰にものを言っているのかしら？　私は全国居眠りコンテストの綺羅者なのよ？」

「自分に関係ないからって、あんた興味なさすぎっ」

サツキは悲鳴交じりに非難した。

静乃は先ごろ正式にランクAに認定され、諸葉と同様に「実力が違いすぎて試合にならない」という理由で、石動からリーグ戦参加を禁じられているのだ。

「あたしの試合くらいは見てくれたっていいじゃないよっ。ふんっ」

すっかりヘソをまげて頬を膨らませるサツキ。

静乃はしばらく楽しそうに小さなえくぼを浮かべていたが、

「見てたわよ、ちゃんと」

そのえくぼを消して答えた。

そう。諸葉は最前列からサツキたちを応援していたが、静乃はマヤやレーシャと一緒に後の方で観戦していたのである。

諸葉と一緒じゃなかったのには理由がある。

一学期初頭、リーグ戦が始まったばかりの時、サツキ&春鹿コンビを応援していた諸葉の左右で、静乃とマヤが試合そっちのけでイチャイチャしてくるという事件があった。

おかげでサツキは諸葉たちの方に気をとられ、春鹿の足を引っ張るという事態に。

試合後、当然サツキはいきり立って、静乃たちに詰め寄った。

春鹿も一緒になって、それはもうすごい剣幕で、さすがの鉄面皮を持つ静乃とマヤも降参。

以後、サツキ&春鹿コンビの試合中は、静乃たちは諸葉に近寄らないという約定が取り交わされたのだった。

静乃は真面目な顔つきのまま言う。

「サツキも先輩も、よくがんばったわね。だから、私からも優勝祝いをあげるわ？」

いきなりの優しい言葉に、これでもかと戸惑うサツキ。

頬をカッと染め、きょどきょどしながら、

「い、要らないわよっ、なんか裏がありそうだしっ。後で高くつきそうだしぃっ」

心にもないことを言い出す。

「じゃあ、サツキの分まで百地先輩にお祝いあげることにするわ」

静乃はあっさり意見を翻した。

「えっ」

たちまちサツキがぎょっとした。
もっと食い下がってくれると思い込んでいた顔だ。あれは。
静乃はしれっとした顔で、そそくさと武道館へ急ぐ。
サツキは「う～」としこたま迷った後、
「やっぱり欲しいっ。あたしにもお祝いちょうだい～」
結局、静乃に泣きついた。
静乃も表情は能面のように変わらぬまま、でも声は微笑ましげなものに変えて、
「ハイハイ、ちゃんとあげるから心配しないで？」
「ありがと～」
「でもね、諸葉は何が欲しいか聞いてたけれど、いざフタを開けてみるまでプレゼントは秘密の方が、こういうのって粋だと思わない？」
「わかる～」
「そういうわけで、諸葉。週末はサツキ抜きで秘密のプレゼント買いに行きましょ？」
「それが魂胆かあああ！」
「きゃー。嵐城サンこわーい」
静乃が脱兎の如く武道館へ逃げていき、サツキが目を吊り上げて追っかけていく。
これもまた、一年生のころだったら信じられない光景だ。
静乃が他人とじゃれ合ったり、意味もなく走り出したりするなんて。
諸葉はなんだか我がことのようにうれしくて。
目を細めて、武道館まで駆けていく二人の背中を見守った。

第三武道館の天井を、亀吉の奇声が突き上げる。
「クキィィィィソ。あとちょっと運の天秤がオレ様に傾いていたら、優勝できてたのに！」
まだ負けたのが悔しいようで、頬りにわめいていた。

アリーナの中央に立ち、悲劇の主人公の如く天に向かって吠え続ける。
「いや、運の要素は微塵も入り込む余地がないくらい、僕たち完璧な敗北だったよね……」
離れた場所、アリーナの床に座り込んだ竹中がツッコむが、聞いていない。
それより大ボリュームで亀吉を取り巻く男子隊員たちが、
「二学期のリーグ戦でリベンジ決めるしかねえよ、カミー！」
「肩車は反則じゃないかって、ルールに入れてもらうよう校長先生に直訴しましょうよっ」
「俺たち全員、カミー先輩の味方ですから！」
「ああもう！　メイジリーグと二重登録できたら、カミー先輩の二冠だって夢じゃないのにっ」
「つーかオレらもカミーに負けねえくらい、次のリーグはがんばらねえとな」
「そうだよ！　俺らの誰かが百地らに土つけてやりゃあ、カミーが優勝じゃねえか」
「うおお気合い入ってくんなあ！」
「今から二学期が楽しみだぜ」
やんやんや、とリーグ戦の全日程が終わっても大盛り上がりである。
一方、竹中の周りは女子隊員たちが取り巻いている。
「一学期ずっとあのバカのお守、お疲れ様♥」
「ねえ、二学期はあたしとコンビ組んで、メイジリーグに出ようよ～」
「あ、抜け駆けはズルいですよ、先輩っ」
「私と組もうよ！　私と竹中君なら優勝確実だし！」
「とにかくあのカメヨシは捨てた方がいいーって」
「うん、とりあえずそこだけは間違いないです、竹中センパイ」
「だから、アタシと～♥」
きゃいきゃい、とこちらはハートや黄色い声が飛び交う盛り上がり。
元々、竹中は童顔だけどまずまずの美少年で、女子たちから人気はあった。
それが副長になって、やや頼りないところが「あたしが支えてあげなきゃ！」と同学年の保護欲をかき立て、通にリーグ戦での好成績が「実は強いなんてギャップがステキ！」と後輩たちの憧憬を集めているのだ。

また厳格な石動と、他人の色恋沙汰を妬む前鬼副長もいなくなったので、公然とイチャイチャすることが隊内で可能になったという事情もある。

石動は今でも週一、二のベースで稽古をつけに来てくれるが、それ以外の日はいつもこんな雰囲気である。

「たるんでるわね。今年の実戦部隊は」

と、生真面目なサツキがコワイ目で睨むのもむべなるかな。

アリーナの端、連絡通路を出たところで、腕組みして亀吉一派と竹中一派を見回す。

対して、

「まあまあ、和気藹々ってやつだよ。こういうのがいざって時、チームワークを産むのさ」

とりなすように言ったのが、諸葉たちと通路前で鉢合わせた男。

卒業生の丈弦初介だった。

小粋なシャツとパンツを襲爽と着こなす私服姿で、後輩の顔を見に来てくれている。

というか、ここのところ毎日だった。

丈弦が進学したのは、ここから三駅のところにある漆原家の息がかかった大学で、近場と言えば近場。今年度に入ってからも、ちょくちょく遊びに来てくれていた。

でもそれが何を思って日参するようになったのか？

わざわざ電車に揺られてやって来るのか？

「大学生ってそんなにヒマなんですか？」

先日、さすがに諸葉も気になって聞いてみた。

「まさか友達ができないとかっ？」

サツキもそんな質問をうれしそうにした。

ぼっち仲間みーっけ、てなノリなのだろうが、もし図星なら喜んでいい話じゃない。

「それこそまさかでしょうに。人当たりの如才ない丈弦先輩に限って、そんなわけがないわ」

静乃がサツキを窘めたが、言い方にトゲあった。

実際、丈弦も頬をひくつかせていた。

それから咳払いをして、

「友達っつーか、話し相手はいくらでもいるんだけどなあ。ツルんでて楽しくないんだわ」

顔に影を落として語ってくれた。

「何かってと合コン、合コンでよ。こっちゃ宗谷真奈子がいる身なわけよ？　行けるわけねえじゃん？　でも断ったら『ノリワリィ』ってバカにされんだよなあ」

「カノジョがいるって言ってないんですか？」

「何度も言ってるよ。でも『そんな関係ないじゃん』ってあっけらかんと言われるんだ」

「なにそれサイテー」

「あげく、遠距離恋愛だってわかった途端、言い寄ってくる女がワラワラいて……。『寂しいでしょ？　慰めてあげる』ってオレもう聞き飽きたわ……」

と、丈弦がアンニュイな顔で嘆息する。

他の男が言ったら「モテ自慢かよ!?」という話だが、イケメン気遣いメンの丈弦がどれだけモテるかは諸葉たちもよく知ってるし、恋人の真奈子に対してどれだけ一途かもわかってる。

災難だなあ、と同情するし。

生真い話だなあ、と呆れたりもする。

大学がどこでもそうだとは思わないが、丈弦が通ってるところはずいぶんチャラいらしい。

「宗谷先輩はどうしてるんですかね？」

「電話とか毎日かけたりしないんですか！？」

「仕事が忙しいみたい。『大学生はヒマそうで羨ましいわ』ってよくため息つかれる……」

「宗谷先輩きっつー」

「あはは……」

と諸葉は苦笑いで誤魔化すしかなかった。

「それより、嵐城。おまえさん、きょう優勝したんだってな。さすがじゃんか」

丈弦がそう褒めた途端、

「ええぇ～。なんで丈弦先輩まで知ってるんですかぁ～？　照れちゃうなぁもぉ～」
コワイ目をしていたサツキが、コロリと得意満面になった。
しおらしいのは口だけだ。
「なんでって、おまえさんが友人知人にメールで一斉送信したからじゃねえか。寃先棚がすごいことになってたぞ？」
「ええぇ～。あたしってそんな自慢たらしいことしちゃったかしらぁ～」
「したよ」
「したした」
「してるわ」
丈弦、諸葉、静乃で一斉にケイタイやスマホを取り出し、件のメールを突きつけた。
亜鐺学園関係者以外（両親等）には送ってないらしい、ギリギリの理性だけは褒められる。
「百地はまだ来てないみたいだし、ここは一丁、優勝者サマが率先して引っ張ったらどうよ？」
「それもそうね！」
丈弦に上手く転がされ、サツキはやる気を漲らせると、
「みーんなーーっ。そろそろウォームアップくらい始めるわよー！」
元気よく亀吉組や竹中組の方へ走っていく。
静乃も去年のように面倒臭がることなく、背筋を伸ばしてついていく。
「バッキャロー！　隊長のオレ様を差し置いてテメエが仕切ってんじゃねー！」
「あんたがグズグズしてんのが悪いんでしょーが、ドンガメ！」
「う、うっせー。オレ様も今、は、始めようと思ってたところなんだよっ」
「声が震えてるわよ？」
「ふふふるるるえええててててななななんんんかかかねねねえええししし」
「……逆に器用ね。それ」
「と、とにかく始めっぞ、オマエラ！」
亀吉がどうにか威厳を取り繕いながら号令をかけ、

「「「よっしゃー！」」」
と男子隊員たちが野太い声で威勢よく応える。
「だって。今日も皆でがんばろうね」
竹中が周りに頼りなげな笑顔を振りまき、
「「「はーい♥」」」
女子隊員たちが黄色い声で華やかに応える。
入口で眺めていた諸葉は丈弦に、
「あれはあれで一種の役割分担ですよね」
「だな。石動と神崎の人事の妙だ」
ひどく訝らし気にうなずく、先輩の横顔が印象的だった。
「オレらが抜けても、おまえらはよくやってるよ」

――現在、正隊員の数は十三名。
諸葉、サツキ、静乃、春鹿、亀吉、竹中で六人。
リーグ戦に触発されて伸びた、ランクCの白鉄が二年に四人。
同じくランクCの黒魔が三年に二人。二年に一人。
どうにか人数だけは、去年の今ごろと同じ。
予備隊員の数は去年よりも着実に増えつつある。
それが今の実戦部隊だった。

去年と比べても決して遜色のないハードなトレーニングが終わると、武道館二階の窓が夕焼けで真っ赤に染まっていた。
隊長の亀吉が解散を言い渡し、皆がゾロゾロと下校していく。

その亀吉は竹中の首っ玉を抱えながら、優勝を逃した残念会をしたいと丈弦を誘っている。
人気が去るとともにどんどん閑散としていく中で、
「あーっ。今日も疲れたー！」
サツキが充実した顔で、気持ちよさげに伸びをした。
「この後、なんか食べに行かねー？」
春鹿も軽く屈伸しながら提案する。
「いーわねー！　たまにはどこかでパーッと」
たちまちサツキが名案だとばかりに食いつく。
それから春鹿と二人で、諸葉と静乃の様子をチラチラと盗み見る。
これはアレだ。「行きますか。優勝祝い」と言って欲しい顔だ。
二人とも微笑ましいほどに可愛い。
でも、諸葉が何か言う前に、静乃が前に出て、
「ごめんなさい、サツキ。百地先輩。今日は私が諸葉に個人特訓してもらう番なの」
「うぇー。そうだったっけ……？」
「ええ、そうよ。今度、サツキの番を譲ってくれるなら、私も今日はディナーにつき合ってもいいのだけれど？」
「ううー。今年からはあたしとモモ先輩で、諸葉を独占できると思ってたのになー。こんなんなら漆原は昼行燈のままでよかったなー」
静乃のそれは冗談だったろうが、サツキは悩み顔になって腕組みした。
それから春鹿の方をチラリと見る。
春鹿もサツキをチラリと見る。
口に出さなくてもその仕種を見ていれば、
「モモ先輩の番を漆原に譲ってやってよ」
「それはやだよ！　静乃が言ってんだし、サツキの番でいいじゃん」
という声が聞こえてきそうだ。
静乃はおかしそうな口調になって、

「遅木は皆、ヒマなのでしょう？　だったら改めてゆっくり祝勝会をすればいいわ。マヤさんやエレーナさんも呼んで。うちを使ってもいいわよ？」
代案を提示する。
サツキがぐっと前のめりになった。そっちの方が楽しそうだと思ったのだろう。
春鹿と目配せを交わし、「じゃあそれで！」と約束し、納得顔で下校していった。
諸葉と静乃だけが第三武道館に残り、広い館内が静まり返る。
夕焼けがコンクリート製のアリーナの床を、炎の舞台の如く染め上げている。
静かに燃える炎だ。
静乃がそっと、アリーナの端に立った。
諸葉も対峙するように、反対端に立った。
無言のまま二人の視線がからむ。
境合わせのように、同時に二人が人差し指を突きつけ合う。
そして、どちらからともなく特訓を開始した。
二人の指が流麗に曲線を描き、虚空に太古の魔法文字をスペリング。
諸葉が綴るは炎の第六階梯、《紅蓮地獄》。
静乃が綴るは氷の第五階梯、《吹雪の死霊》。
第六と第五。
難度も完成までにかかる時間も段違いのはずが、この二人がやるとちょうど釣り合う。
静乃が遅いのではない。むしろかなり速い方だ。
通力を使い、光技の応用でスペリングの速度と緻密さを高められる、諸葉が特別なのだ。
諸葉がそんな絶技を見せる一方で、静乃は普通とは違ったスペリングをしている。
左右を反転させた、鏡文字で綴っていた。
常ならぬと言えばもう一つ。
武道館に、諸葉の詠唱だけが滔々と響く。
そう、静乃は一切の詠唱をしていない。

その二つの「異常」を織り交ぜながら、静乃の闇術が完成した。
青白き冷気が結集すると、不気味な死霊の形をとり、群れ成し、吹雪を具して襲ってくる。
雪が猛り吹く音の中、もの悲しい怨念の叫びが幽々と混ざる。
だが諸葉の《紅蓮地獄》もほぼ同時に完成していた。
真に真紅の業炎を放ち、吹雪の死霊どもに叩きつける。
その怨霊どもがいよいよ金切り声を上げ、白と紅がアリーナの中央でぶつかり合った。
途端――
爆発を起こし、耳を劈く音を撒き散らし、互いが互いを焼き尽くした。

静乃が放った吹雪は、ただの吹雪にあらず。
森羅万象の摂理に反した、超高熱の吹雪である。
反魂。あるいは〝言魂ヲ反転サセル法〟とも言い、敢えて鏡文字にして綴ることで人為的に魔力を暴走させ、闇術の属性を真逆に変えると同時に威力も強化する、裏呪法を用いた結果だ。
そうでなければ無詠唱の第五で、第六の威力と伍して相殺するなどまず不可能。

高熱と高熱の衝突によって発生した大爆発を眺めながら、静乃は歯を食いしばっている。
綴ったその右手と腕に血管が浮かび上がり、あちこちが破裂して血がしぶく。
無理矢理に暴走させた魔力の一部が、逆流した結果である。
なんとも凄惨な有様だが、反魂の代償としてはむしろ少ない出血量といえた。
魔力の制御が傑出している証拠だ。
多少の技自慢程度なら、今ごろ右腕はズタズタになっていてもおかしくないのだ。
静乃は歯を食いしばったまま、また無詠唱で、また鏡文字を使って、《吹雪の死霊》の行使を始める。
流血で少し蒼褪めたその顔が、
（綺麗だ）
と諸葉は思った。

普段、人形のように表情が変わらない静乃だからこそ、余計に、強い意志によって彩られる様が輝いて見える。
諸葉もまた気持ちを高揚させながら、闇術の撃ち合いに応じる。
第六階梯闇術の連発だ。
真紅の業炎が何度となく吹き荒れ、死霊の群れが超高熱の吹雪とともに踊り猛り、アリーナの中心で激突を繰り返し、そのたびに武道館が内側から震撼する。
そのたびに武道館が内側から震撼する。
もし〝PSG〟や〝雪帝〟以外の黒魔が、この光景を目の当たりにすれば、二人の魔力や技術の高さ、何よりただの特訓の域を超えた異様な迫力に呑まれることになるだろう。
果てなく続くかと思われた大魔法のぶつかり合いは、静乃がその場にへたり込んだことで決着がついた。
綴るための右腕がもう、出血に次ぐ出血で真っ赤に染まり、上手く動かせなくなっている。
無事な方の手で押さえながら、荒い息をついて痛みを堪える静乃。
「休憩しようぜ」
諸葉は静乃の傍まで行くと、痛みでまともに声も出せない彼女に手を貸して立ち上がらせ、肩を貸して支えてやる。
そのまま二人で武道館の外へ歩いていく。
そこまで行けば《夢石の面晶体》の結界の外でもある。
腕に負った傷も「悪夢から醒めたように」元通りだ。
「いつも思うのだけれど、この不条理さには釈然としないものがあるわね」
静乃が元通りになった自分の、染み一つない白い肌を眺めながらようやく口を開いた。
「これほどありがたいものがないのも事実だろ？」
「そうね。こんなに気安く反魂を使えるなんて、他国の黒魔が聞いたらきっと目を剝くわ」
静乃が軽口を叩きながら、武道館に戻るそぶりを見せる。
「もうちょっと休んでからでいいんじゃないか？」
諸葉は肩を貸したままその場で言った。
たとえ肉体的な痛みは嘘のように消えても、精神的なショックは尾を引くものだ。

「気遣いは無用だわ？　諸葉につき合ってもらえるのも順番待ちだし、今日この時間を無為にはできないもの」
「もったいないってか？」
「いいえ。私のこの気持ちは、もっと貪欲なものよ？」
そう言って静乃は、諸葉にもっとしなだれかかってくる。
こちらを見上げる流し目の、艶っぽいこと。
諸葉は我知らず前を向いて背筋を正しながら、静乃の蠱惑的な視線から逃れた。
「つれない人ね？」
豊かな胸がより押し当たる体勢で静乃が寄りかかってくるのが、心臓に悪い。
「よーし、まだまだ行くかー」
これ以上、別のやる気が出てしまわないうちにと、諸葉は武道館の中へ戻る。
そこからはまた闘術の種類を変えて、諸葉の第六と静乃の反魂第五の撃ち合いだ。

実戦よりも敢えて厳しい条件下で反復練習を行うのは、スポーツでもなんでもトレーニングの常套手段だろう。
野球のバッティング練習ならばピッチャーをマウンドよりずっと手前に立たせる。サッカーのフリーキック練習ならば壁を人間より高くする。
静乃がやっているのは、その闘術版だ。
術の完成度を高めるにはイメージの強さが重要なのだが、それを補佐する役割を持つ詠唱を敢えてしない。
反魂で魔力を暴走させれば、制御は格段にシビアになる。
そういう厳しい制約を課した上での反復練習。
マヤの結界さえあれば周囲の被害を気にすることなく、一人でも壁に向かって延々練習できるといえばできる。
だが、本当に威力が向上しているのか効果の実感が伴わない。ピッチャーの球を打ち返したりゴールを決めたりと結果がわかりやすい、スポーツとはそこが違う。
だから諸葉が一階梯上の闘術をぶつけて、威力測定の基準としているわけだった。
異常速度でスペリングできる、諸葉やＰＳＧでなければこの相手役は務まらない。

ただ――強くなりたいという一心なのはわかるが、さすがに苦痛を伴いすぎではないか？
諸葉はそう思って、心配したことがある。
「わかっていないわね。あなたに近づこうというのだもの。痛みを伴ってこそ当然だわ？」
特訓の最中、静乃は上気した顔でそう答えた。
血に染まった腕が疼くはずなのに、その声には恍惚とした響きすらあった。
倒錯的なまでの、陰性の色気をにわかに薫らせた静乃に、諸葉はドギマギさせられたのだ。

長い日がとっぷりと沈み、マンツーマン特訓はここまでということになった。
更衣室で制服に着替えた静乃と二人きり、地獄坂をくだって下校する。
街灯の光は頼りなく、勾配のキツさもあって足元は覚束ない。
だから仕方ないわよねとばかり、静乃が腕を組んできて、これでもかとくっついてくる。
「今日もうちに寄っていくでしょう？」
「えー、いやー、今日は晩飯は寮で――」
「サツキや百地先輩の特訓につき合った後は、お礼で食事に出かけるのに？　魚心あれば水心ではなかったのかしら？」
「だって、おまえんちでメシ食わせてもらうと、逆に気を遣うんだもん……」
前回も前々回もそのまた前も、とにかくいつもそうだった。広い食卓いっぱいに並ぶ、二人で食べるには豪勢すぎるディナーを思い出しただけで、諸葉は胃がキリキリする。
「じゃあ、選んで？　私からの今日のお礼、ディナーがいいかキスがいいか――」
「ディナーの方でっっ」
諸葉は即答した。
静乃に「イケズな人ね？」と脇腹を、甘くつねられる。
くすぐったいやら、その子どもみたいな仕種が可愛いやらで、諸葉は頭をかいた。
「まあ、許してあげる。ディナーの後は私の部屋でゆっくりしましょう？　御祖父さまからいいお茶菓子が届いた

の」

「うっす。それは喜んで」

「一緒にえっちなネグリジェも届いたのだけど、見てくれる？」

「はは……心臓に悪い冗談はやめようぜ……」

「なんなら朝までゆっくりしていってくれても構わないのよ？」

「だからそれ冗談だよなっ？」

「さあ？　私の胸に手を当てて聞いてみれば？」

「はは……は……」

特訓が終われば、すっかりもういつもの静乃だ。

諸葉の方がたじたじにされっ放し。

たじろいで身を離しても、すぐにぎゅっと寄ってくる。

漆原家の車を待たせている地獄坂の麓まで、ずっとそんな感じなのだった。

❻

丈弦は独り、月を眺めながら電話をしていた。

スマホからは東京にいる真奈子の声が聞こえてくる。

この時期、夜風はまだ冷たく、火照った体に心地よい。

さっきまで駅前繁華街で、亀吉と竹中の残念会で盛り上がっていたのだ。

その時の様子を、丹念に真奈子に話す。

去年までの彼女だったら、

『そう。どうでもいいから話題を変えてくれる？』

と言っただろう。

今の真奈子はこう言った。

『そう。楽しそうでけっこうだわ』

口調は相変わらずドライだ。

しかしその奥にある、懐かしむような感情の機微を、丈弦は聞き逃さなかった。

「マナちゃんは疲れてない？」

『……正直。こんなに辛い仕事だったとは思わなかったわね』

冷めた性格ゆえに、弱音なんかまず見せてくれなかったカノジョが重い息を吐く。

卒業後、真奈子は白騎士機関・東京本局の、内部監査室に配属となった。

彼女らのいま最も重要な職務は、六翼会議の構成員を見つけ出して捕縛することなのだが、これが雲をつかむような話だった。

何しろ連中は、この世ならざる場所に潜伏しているらしい。

真奈子の話では春休み中に、六翼会議へ寝返った《背教者》を多数、捕縛することにレーシャが成功したという。

内部監査室がそいつらを尋問し、この地球と異空間にある六翼会議のアジトを繋ぐゲートまで案内させたが、しかし影も形もなかった。

全部で六つ存在するというそのゲートが、どうやら移動可能であったことを、寝返って日の浅い《背教者》たちは知らされていなかったというわけだ。

要するに、大量捕縛できたのは捨て駒でしかなかった。

それくらい連中のアジトを暴くのは困難で、各国でもいろいろと試行錯誤されているという。

例えばこうだ。

現在、由々しきことに六翼会議へ寝返る者が増えてきている。

となれば、六翼会議の《背教者》が目当ての《救世主》に近づいて、口説いていることに他ならない。殊に連中の首魁は、そうやって誑かすのが得意という話だ。

誘惑が一度で成功しなかったら、二度、三度と対象に接触するだろう。

実際、高梨恭子が裏切った時、それ以前からもう数度の打診を受けていた痕跡が、調査の結果発見されている。

その女はずっと黙っていたわけだ。

真奈子の与えられた任務は、日本支部の《救世主（メサイア）》たちを秘密裏に監視し、高梨のように六翼会議（シックスウィング）からの接触を受けていないか調査することだった。

その接触の瞬間を発見できれば、《背教者（アーキ）》を捕縛することも、尾行することもできる。

理屈は簡単だが、仲間であるはずの者たちを疑い、監視する任務がどれほど心をすり減らすだろうか、丈弦は想像に難くなかった。

『でも、初介の声を聞いてると元気が出るから』

真奈子は健気（けなげ）なことを言ってくれるが、それが本当ならいい——丈弦は祈らずにいられない。

こんな話、後輩たちには聞かせられない。

「オレも東京の大学に通いたかったよ。そしたら、マナちゃんに直接会えるのに……」

『それは言わない約束よ、初介』

日本支部の決まりで、《救世主（メサイア）》の正体を隠して通うなら、漆原家の影響力がある今の大学が一番都合いいということになっているのだ。

『……いけない、もう時間だわ。また電話するわね？』

「もちろん！　なんでも相談してよ。愚痴だって聞くよ。誰かに話すだけでもすっきりするもんだしさ。……ううん、オレだって単にマナちゃんの声が聞きたいんだよ」

『ありがとう。またね』

「無理はしないでね。またね」

通話を切る。

丈弦は屋上フェンスに背中を預けた。

駅前ビジネス街にある、この町で一番高いビルの上だ。

《神足通（じんそくつう）》を使って忍び込んだ。

寄りかかったまま見上げると、ほとんど闇の中に欠けた月が、虚（うつ）ろな光を放っている。

丈弦が最近毎日この町を訪ねているのは、大学がヒマだからではない。

後輩たちに顔を見せるのもついで。

本当にたまたまのことだったが、先日、正隊員の倉木という後輩から聞いたのだ。
「道服を着て、杖をついて歩く男をこの町で見かけた」
「翡翠色の通力を纏っていたので、何者かと気になって後をつけたが、すぐ見失った」
丈弦には心当たりのある人物だった。
ルー・ダーシン。
六賢会議のランクS《背教者》が、またぞろいったい何の用でこの町にいたのか？
ろくでもない話に決まってる。
丈弦は「危ないから」と、倉木にそれ以上の詮索や口外を固く禁じた。
そう、学校や白騎士機関にも伝えるなと命じた。
もしダーシンがひっそりとこの町に現れたことを知ったら、内部監査室が乗り出してくるに決まっている。その中には真奈子もいるかもしれないのだ。
そして、実際にダーシンが発見されて、その発見者が真奈子だった時――
真奈子が殺されても何も不思議じゃない。

（あの男を監視や尾行できるのなんて、オレくらいのものさ）
丈弦は背筋を震わせながら、心の中で強がる。
触れたフェンスが凍えそうなほど冷たい。
背中を離し、振り返る。
この町で一番高いビルの上から、この町の全てを見下ろす。
丈弦は既に通力を纏っていた。真奈子との電話の最中からずっとだ。
琥珀色のオーラが、じっとりと仄暗い輝きを対流させる。
ずっと練り上げていたのだ。細く。長く。
丈弦の《霊糸》は、糸。
意識を紡ぎ、研ぎ澄ませるほど、その糸は無限に細くなる。
細くなるほど長く伸ばせる。

そうして、街中に糸を張り巡らせる。
網のように。
蜘蛛の巣のように。
（早く来い。絶対に捉えてやるからよ、ヂーシンさん）
町を見下ろす文弦の目は、真奈子の比にはならぬほど冷えきっていて。鋭くて。
到底、救世主のそれではなかった。

SECTION 3

第三章　石動迅のもたらすもの

翌朝、諸葉は一人で登校した。
普段なら四門マヤと一緒に寮を出るのだが、
「今日はお洗濯があるので、後から行くのです。いってらっしゃいなのです、諸葉」
まるで夫を見送る若妻のような甲斐甲斐しさで、そう言ってくれた。
思えば彼女がルームメイトになったのは、ちょうど去年の今ごろである。
「お財布はちゃんと持ったのです？　ケイタイは？　諸葉はすぐ充電を忘れるから、まーやがしておいてあげたのです」
最近ではその甲斐甲斐しさが、すっかり板についている。
「うん、バッチリなのです。お勉強もトレーニングもがんばってなのです」
無邪気に手を振り、送り出してくれるその笑顔は、天使そのものなのに。
十一歳になったまーやさんは、可愛さもしっかりさも一割増し。
工章にアイロンがけされたばかりの制服の、着心地に口元をほころばせながら、今日も諸葉は一日を始める。

「やあ、灰村君。おはよう」
学校前の地獄坂を上っているところで、後から声をかけられた。
「おはようございます」
諸葉は立ち止まって振り返り、にこやかに挨拶を返す。
錆びた声の主は、石動迅だった。

一九〇を超える長身に痩躯。
峻厳さを絵に描いたような顔つき。
制服も戦闘服も似合う人だったが、校長になってスーツに着替えても決まっている。
そんな彼の左胸を諸葉は眺め、次いで口元を見、
「それ、前からずっと続けてますけど、なんか意味あるんすか？」
「……ちょっと、思うところがあってね」
「なんすか教えてくださいよー。面白そー」
「灰村君には。いずれね」
「ちぇー。石動先輩のいけずー」
諸葉は冗談めかして拗ねてみせてから、すぐに自分の失言に気づき、
「――ってイケネ、石動校長でしたね」
「はは、構わないさ。ここだけの話だがね、僕自身、四門校長こそが今でも本当の校長先生だっていう気持ちがあるんだ」
一緒に地獄坂を上りながら、石動が小声で言う。
頭ではわかっていても、気持ちが切り替えられない。
それくらい万里が拉致されたのは、唐突な事件だったということだ。
にもかかわらず石動は即座に決断して、率先して校長をやると手を挙げ、亜鐘学園を混乱させることなくまとめ上げた。
そんな彼の責任感が、諸葉はとても立派だと思う。
諸葉も彼同様、校長先生は万里だという気持ちが強い、抜けていない一方で、
「ちゃんとやれてますよ。胸張ってくださいよ」
石動のことを認める気持ちもまた、嘘偽りないものだった。
「そうだといいがね。急な改革、改革ばかりで、煙たがられていないかとヒヤヒヤものだよ」
石動は、彼の生真面目さのトレードマークのようなこけた頬を、さらに引き締めた。

石動の改革の最たるものは、リーグ戦とポイント制の導入である。
目的は亜鐘学園生、一人一人の強さの向上。
従来は実戦部隊の正・予備隊員ばかりが本格的な訓練を積み、他の一般生徒は授業で画一的な訓練を課されるだけだった。
結果、両者の間に大きな壁ができて、実力格差がますます開く。
今年三月の六翼会議による学園襲撃の時、生徒が三百六十人からいて、その大半が戦力にならなかった。さすがに相手が悪すぎた、仕方なかったという面もある一方、それに全く問題がないと言いきっていいものか……。
もっと多くの生徒に、もっと実践的な戦いを、早くから学ばせるべきではなかったのか。
「僕は十四人しかいない実戦部隊の正隊員であることに、無意識の驕りがあったのだと思う」
石動は卒業前にそう懺悔していた。
そう、例えば――サツキが最初に実戦部隊へ入りたいと志願した時、石動は実力不足を理由に断った。「門戸を閉じることはないから、また来なさい」とは答えたが、何か積極的にサツキにフォローしてやるわけでもなかった。
問題の根はその時すでにあったのだ。
その時に気づけていたらと石動は悔やんだのだ。
石動は悔恨を胸に校長になり、それを晴らすためにいろいろと思案した。
「歯を食いしばってでも強くなれと、頭ごなしに言っても、ついてこられる生徒は結局一握り」
「灰村君は強くなるためには、気の持ちようが大事だと言う。ならば、生徒たちが自主的に強くなりたいと思う、強くなることを楽しめる、そういう施策が必要だ」
そうして考案されたのが、リーグ戦制度だった。
ちゃんと勝負が成立するようにとの工夫で、リーグは三つに分けた。
黒魔が闇術のみで戦う、メイジリーグ。
まだ《太白》を習得できてない白鉄が戦う、ノーマルリーグ。
なんでもありの、エキスパートリーグ。
二学期からは一年生のみが戦う、ノービスリーグも行われる。
対人戦でも通用する個の力を磨くために、同時に《異端者》戦で必要となる連携の大切さを忘れないために、試

合はコンビで行う。
強い相手に勝つほど、たくさんポイントをもらえる。
弱い相手に負けるほど、たくさんポイントを失う。
各学期終了時に、獲得ポイントに応じた奨学金を支払うことで、生徒のやる気に繋げる。
また、従来は基準が曖昧だったランクCやBへの昇格も、一定ポイントに達することで昇格できるように明文化され、これも生徒の意欲向上に繋がった。
エキスパートリーグで最もポイントを稼いで優勝すれば、石動への挑戦権が与えられ、勝てばランクAになれるという、破格の道さえ用意した。
（無論、これらの奨学金や昇格がちゃんと保証されるよう、石動が日本支部を相手取って交渉し、認めさせた）
そうやって生徒たちに、自己鍛錬へのわかりやすい意義を提示し、また切磋琢磨する場所を作る一方で――
実力的にどうしてもついていけない者たちへの配慮も、石動は忘れていない。
そもそも、リーグ戦を行う時間を捻出するため、カリキュラムも見直されている。
学科の時間は大幅に短縮し、従来通りの実技特訓の時間と合わせて、午前中に終わらせる。
午後からは各生徒がリーグ戦の試合をするのも自由、観戦するのも自由、実技特訓するのも自由、好きな学科の授業を受けるのも自由と、選択制に切り替えたのだ。
《救世主（ヴァヴァー）》として戦っていくことに自信がある者にとって、過剰な学科授業は無意味。
戦っていくことに自信がないものは、高校生として通常の授業を多く選択し、白騎士機関の職員を目指すなり、普通大学への入学を目指すなりすればいい。
《救世主（ヴァヴァー）》になることを諦めた者の、受け皿となる高校はよそに用意されているが――
「そんなところへは極力、転校する必要はないのです」
石動は教師陣の前で力強く言ったという。
恐らくは、弟の顔を思い浮かべながら。
また、授業が選択制になり、個別指導的な側面が強くなると、教師の負担も大幅に増えるのだが、
「クラスに教師は一人、生徒は多数――だから授業が画一的になっても仕方がないというのは、教師側の甘えでしかないでしょう」

石動はそう一刀両断したという。
無論、亜鐘では教師たちも《救世主（ヴァヴァー）》だ。正義感と責任感にかけて否やは出なかった。
それらに代表される改革を、生徒にはどう受け止められているのか？
石動は自信なさげだが、諸葉は地獄坂を上る他の生徒たちを見回しながら、
「大丈夫ですってば」
あっけらかんと答えた。
こんなある種、殺伐とした学校なのに、道行く生徒たちの顔が明るいのは去年までと同じ。
今はさらに加えて、生徒たちの目が活気に溢れている。
何かに打ち込んでいる者、特有の自負で満たされている。
真っ直ぐな野心で輝いている。
それは戦士（ヴァヴァー）には必要なものだろう。
初代校長の下では、生徒はおよそ人とは扱われず、精神を壊す者が続出したと聞く。
万里の代ではその反省から、真っ当な高校生活を送れるようにと、そこに一番心を砕いた。
石動のもたらした改革は、万里の尽力を踏み倒すことなく、学園に力強さをもたらした。
六翼会議（シックスウィング）の動きが活発になった今、どのみち強くならなくてはいけないのだ。
改革は必須なのだ。
その上で、石動は――
「メチャクチャ上手くやってると俺は思います。てか、さすがっすよ。センパイ」
諸葉は屈託（くったく）なく微笑みかけた。
石動はすぐには応えない。苦み走った顔で黙考する。
それから一瞬、目を閉じる。
「君にそう言ってもらえるなら、僕も一安心だね」
トレードマークのこけた頬がわずかに緩む。
地獄坂がようやく終わって、諸葉たちは正門にたどり着いた。

諸葉は教室のある第一校舎へ、石動は校長室のある教務棟へとわかれるのだが、その前、武道館の方を眺めながら、

「今度、サツキと百地先輩が、石動先輩に挑戦す――」

「勝たせないよ」

皆まで言わせてくれず、石動が即答した。

「えー。でも、もちろん手加減して――」

「僕は全力で戦わせてもらう」

また諸葉が言い終わらぬうちに、ぴしゃりと言われた。

石動は取りつく島がないようでもあり、どこか楽しんでるようでもあり。

「ほどほどのところで『うむ、君たちの実力はわかった。ランクAに認定して進ぜよう』みたいなノリは？」

「期待してもらっては困るね」

「一ミリも？」

「微塵も」

「マジすかー。でも、普通のランクAが二人がかりで戦っても、石動先輩は勝っちゃうじゃないですか。だったら全力の先輩に勝たなきゃいけないって、認定ハードルとして高すぎじゃありません？」

「高い方が、嵐城君も百地君も挑戦し甲斐があるのではないかな？　僕は学生諸君のためにこそ、ハードルとして聳え立つ義務がある。なに、今回がダメでも二学期、三学期だってリーグ戦はあるんだ。そこで優勝すれば、何度でも僕に挑戦できるさ」

まあ正論だなあ……と諸葉は頷をかく。

二年の春鹿は、三学期は研修でリーグ戦に出られないというツッコミは野暮として。

「それにね、灰村君」

「ええ。それに？」

「この僕の他に、学生でランクAを獲る者がそう簡単に出てしまったら、僕の立場がないと思わないかい？」

石動は頬をやや緩めたまま言ってのけた。

「先輩って冗談が下手ですよね」

そんな権威にしがみつくとかさもしいこと、かけらも思ってないくせに。

「はは。よく言われるよ」

男同士、からりと笑い合って別れる。

諸葉は教室に向かいながら、「さあてこりゃ大変だぞ」とネジを巻き直した。

サツキと春鹿にちょっと同情しながら。

◎

その日の昼休憩のことである。

二年生四クラスによる合同実技の授業が終わり、諸葉は更衣室で戦闘服から制服に着替えると、お昼を買いに速足で購買へ向かった。

サツキと静乃に中庭で一緒に食べようと誘われたのだが、サツキは登校前にコンビニで、静乃は家から弁当を持ってきているというので、諸葉だけなる早やで調達せねばならない。

しかし、購買の前は既に行列ができていて、諸葉は並びながらケイタイでメールを打つ。

マヤとも一緒にお昼を食べようと約束していて、中庭集合と報せる。

その間にサツキからメールが来て、春鹿も誘った旨が書いてある。

ちなみにレーシャは、クラスメイトとの先約があると合同実技の時に聞いていた。

ようやく名物のカレーパン等々をゲットして、諸葉は四人のところへ急ぐ。

広い中庭の端っこ、ベンチが並ぶ辺りを足速やにすぎ去ろうとして――

ぽつんと、うたたねしている少女が、ふと目に付いた。

行儀よく腰かけているが、確かに寝息を立てている。

この辺りは特に日当たりのよい場所で、冬から春にかけては憩いのベストプレイスとして生徒たちに知られている。

だが、七月も目前に控えた今日この頃、照り付ける直射日光は半端ではない。

よく眠れるなと驚く一方、まさか熱中症になっているのではあるまいなと心配する。

「なあ、昼寝するならあっちの日陰の方にしとけよ」
念のため、ひと声かけてみる諸葉。
少女はぐっすり、返事はない。
胸の名札を見ると、「一－一（特Ｄ）　天木虚穂」とある。
一年生なら、今時期のここのヤバさを知らないのも、無理はないかもしれない。
「なあ、起きろってば」
諸葉は虚穂という名前らしい少女の前で腰を屈め、揺り起こそうとする。
もちろん、相手は女の子だし、こっちは知らない男だし、触れるのも揺らすのもどうしても遠慮がちになる。
だからかどうか、虚穂は豪胆に眠り続ける。
あるいはよほど図太い神経をしているのか。
まさか静乃より上が実在するとは思わなかった。
近くで観察して、大量に汗をかいた形跡はないので日射病ではないと思うが、放っておいたらそれこそ、かかってしまうかもしれない。
どうせお節介を焼いたのだし、今さら見捨てるのも寝覚めが悪い。
多少、強引にでも起こしてしまうべきだろうか……？
そんな風に諸葉が考えあぐねていると、
「灰村先輩？」
横合いから呼びかけられた。
聞き覚えのない男の声だ。
浮ついたところの全くない、落ち着き払ったトーンで、ひと声聞いただけで冷静沈着さが窺えるような、それほどの深みを感じる。
諸葉は顔を上げて確認するが、やはり知らない少年。
冴えた細眼鏡にクールな顔つき。
しかもスポーツか武道でもやっていたのか、体つきは逞しく、それでいて細身に見える。いい鍛え方をしている証拠と言える。

「灰村だけど……どちら様？」
「一年一組、田中一朗と申します。そちらの天木さんとはクラスメイトです」
（年下かよっ）
諸葉は唖然とさせられる。
その涼やかな所作も、落ち着いた物言いも、サマになってるほど自分に自信ありげなところも、年上と言われても驚かない。
いや、《救世主》なんて精神年齢が実年齢を凌駕する場合もままあるわけだから、何もおかしいことはないのだろうが……。
一朗少年は大人びた口調で続けた。
「天木さんは困ったところがありまして、一日の大半を寝てすごすのです。しかも、そこかしこで。教室からいなくなっていたので、連れ帰るために手分けして捜していたところです」
「あー、そりゃ助かるわ」
諸葉は立ち上がると、ベンチの前からどく。
ところが、一朗は動かない。
明敏そうな目つきで、じっと諸葉の顔を見ている。
「……俺に話でも？」
「ええ。灰村先輩のことは、父からよく聞いております」
一朗の言葉を聞いて、諸葉の脳裏に閃くものがあった。
「もしかして、田中先生の息子さんだったり？」
「その通りです。最展だ七光りだと言われることがあったら面倒なので、あまり触れ回るなと父には言われていますが。灰村先輩は信用できる方だと思うので、大丈夫でしょう」
諸葉は「似てない親子だなー」「あ、それは田中先生に失礼か」なんて思いながら、頭をかきつつ、
「いやー。初対面の相手をそんなに信じるのはどうかって思うぜ？」
「そうかもしれないですね。でも、父のメールに何度も灰村先輩のことが書いてあるから、初対面には思えなくて」
「メールで？」

「はい。僕はこの学校に来る前に白鉄として目覚めたので、一年半ほどアメリカの《救世主》育成校に留学していたのです」

「はー、なるほど」

日本とあちらの高校の仕組みは、随分と違う。

例えば（州や地域によって差異はあるが）アメリカでは高校は四年制。

年度初めも違い、九月に満十四歳の者が入学できる。

日本に比べるとかなり早く高校生活がスタートするというわけだ。

得心がいくと同時に諸葉は感心する。

（田中先生は息子さんに特例を許さなかったんだな）

おエライさん方の決まりで、《救世主》として目覚めてしまった者は普通の学校に通えない。

マヤがそうだし、静乃も中学最後の一年は通っていなかったと聞く。

逆に、万里の計らいで特例として、普通の中学に通っていたのが石動蔵だ。

田中だって万里に頼めばできただろうに。

決して甘えず、息子にも甘やかさず、普通の中学に通えないなら、開始が早いアメリカの《救世主》育成校に通わせようとは、なんとも厳しい道を選んだものだ。

「じゃあ君、けっこうやるんじゃない？」

諸葉はニヤリとすると、右手だけ剣を構えるジェスチャーをとって訊く。

普通より二年早く修行を開始できた石動蔵も、入学前から《太白》を習得していた。

興味本位の質問だったが、

「まだまだだと父には言われてます――」

一朗は卑下するでもなく誇るでもなく答えてくれた。

「――ただ、僕も早く実戦部隊に入って、灰村先輩たちと戦いたいです」

「戦うのが好きなのか？」

「いいえ」

一朗が首を振る。

そして初めて、強い感情の色を見せてくれる。

はにかんだのだ。年相応の少年の顔で。

「正義の味方になりたいんです」

小声になって告白してくれた。

諸葉は笑わない。

彼が浮ついた気分でそれを口にしたのではなく、むしろその言葉の意味を、重さを、難しさを、冷静に理解した上で、それでもなりたいのだと、秘めた芯の部分を特別に明かしてくれたのが伝わったからだ。

「放課後に実戦部隊の演習やってるから、こんど遊びに来なよ。カミー隊長は気さくな人だし、きっと歓迎してくれる」

「ありがとうございます」

一朗はもうクールな表情に戻っていたが、口の端がわずかに、照れの残滓で緩んでいた。

それから一礼して、虚穂をお姫様みたいに抱え上げ、つれていく。

その大胆な行為には全く照れがない。

諸葉なら親しい相手や、緊急事態でもなければそんな真似できない。

（かっこいいやっちゃなあ）

面白い男が入学したものだと思う。

それがあの「冴えない」田中先生の息子だというのがより面白い。

◎

サツキたちは中庭の真ん中辺り、木陰もある芝生でお昼を広げていた。

いよいよ九日後に控える、挑戦試合の話のまさに真っ最中だ。

「石動先輩、全力で戦うってよ」

諸葉も腰を下ろして、談笑に交ざる。

「ほう。さすがは先輩、そうじゃなければあたしの相手は難しいとわかっているわけね！」

「ゲェー。神崎先輩よりよっぽど鬼じゃん……」
聞いたサツキが意気揚々となり、春鹿が意気消沈し、二者二様の反応を見せる。
クロックムッシュを楚々と食んでいた、静乃が口を挟んだ。
「意外ね。てっきり《蠱惑》封印くらいのハンデはくれると思っていたのだけれど」
サツキは「そんなハンデ要らないわよ！　侮辱よ！」と憤っていたが。
一方、アップルパイをはむはむと咀嚼していたマヤが、飲み下してから、
「リーグ優勝おめでとーの会は、皆で思いっきり騒ごーなのです」
「は？　何よ、いきなり。てか当然、あたしはそのつもりですケドォ？」
「石動お兄さんと戦う前に、盛大にお祝いしておかなきゃダメなのです（にぱっ）」
「あたしらが負けるって言いたいワケェ!?」
サツキがマヤの頭をつかんで怒りのままにシェイクし、マヤがふにゅうと目を回す。
口は禍の元だぞ、と注意しつつ諸葉は助けてやる。
「フンッ。いいわよっ。リーグ優勝のお祝いなんかやらなくていいわっ。あたしとモモ先輩のランクA昇格お祝いと立て続けになっちゃうもの！　まとめてやりましょうよっ」
「え……。アタシはパーティーやりたいけど……」
「週末、漆原んちに集まるのナシね！　けってー！　その分、特訓よ、特訓。打倒、石動先輩のために！　諸葉も一日あたしたちにつき合ってちょうだいっ。いーい？」
「そ、そりゃ、俺は構わんが……」
「モモ先輩もそれでＯＫよね？　あたしたちコンビなんだもん、気持ちは一つよね!?」
「あ、はい……」
「サツキ、それは無謀だと私は思うわ？　石動先輩に負けた後では、今さらリーグ優勝のお祝いなんてできる雰囲気にならないわよ？」
「ンンな忠告は要らないわよ、漆原っっっ！　諸葉、今日の放課後からコーチお願いね！　ビシビシしごいてちょうだい」
「そのつもりじゃいたけどなあ」

「絶対に負けられない戦いになったから！」
それは自業自得じゃあ？　という言葉を諸葉は呑み込んだ。
一方、春鹿にチョンチョンと腕をつつかれ、目を向ける。
「実際のところさあ、諸葉はアタシらが勝てると思う……？」
春鹿は顔を落として背中を丸め、人差し指同士をいじいじとさせながら訊いてきた。
諸葉は少し言葉を選んで、結局、率直に答えた。
「勝率は十パーセントくらいだと思います」
「もっとあるでしょ!?　せめて五十パーくらいはっ」
「ハア……そうだよねえ」
ほとんど同時にサツキが目を剝き、春鹿が下がった肩から哀愁を漂わせる。
「モモ先輩までナニ情けないこと言ってるワケ!?」
「げ、現実を見なきゃますます勝てねーじゃんっ」

「現実ってなんですかぁ？　下を向いてたら見えるんですかぁ？」
「じゃあ上、向いてたら勝率五十パーなんて幻覚、見えるのかよっ？」
「あたしの客観的計算に基づいた展望をバカにするワケ!?」
「え？　よく聞こえなかった。楽観的計算に基づいた死亡？」
「モモ先輩のヘタレチキン！」
「サツキなんか夢見る愚考停止じゃんっ」
睨み合い、取っ組み合う寸前まで発展させる二人。
マヤが「チームワークまでバラバラなのです」と呟いたが、聞こえちゃいない。
静乃まで「もうコンビ解消したら？」とか言い出す始末。
放っておいたらマジでサツキが「いいわよ！　音楽性の違いってやつねっ」とかやらかして、翌日、後悔の嵐で泣きついてくるのが目に浮かぶので、諸葉も仲裁に入る。
「はいそこまでー。サツキはモモ先輩を見習うことー。モモ先輩はサツキを見習うことー。お互い持ってないものを補完し合える、ナイスコンビなんですから、チト頭を冷やしましょー」
「あ、あたしはレーセーだもんっ」
「じゃあ無駄な口論じゃなくて、勝つための話し合いができるな？」
「うっっっ。……も、モチロンよっ」
顔を引きつらせるサツキ。
でもすぐに唇を尖らせると、幾分か落ち着いた声音で、
「モモ先輩、一つだけ確認させて。記念受験みたいな気分じゃないのよね？」
「ちゃ、ちゃんとやるよっ」
春鹿は即座に言い返す。
しかし、サツキはジトーっと疑惑の目を向ける。
静乃やマヤまで好奇の目を向ける。
視線が集中し、春鹿は避けるように身をよじって、頬を薄っすらと赤らめ、
「……十パーでも、諸葉が勝てるって言ってくれたもん。ちゃんとやるよっ」

最初はもじもじと、最後はヤケクソ気味に答えた。
静乃が「あら可愛い」とからかって、ますます頬を赤くする。
隣でマヤまでクスクス笑い出す。
「もーヤダこいつら！」
春鹿の悲鳴交じりの絶叫。
それが中庭から校舎へ、そして屋上から初夏の空へと木霊していった。

亜鐸学園の購買は、特にパン類コーナーが充実している。
中でも一番人気のカレーパンは、今日も出色の美味しさだった。中身のカレールーは甘く仕上げたタイプだが、ひと噛み目だけは福妻のような刺激的辛さが走る、絶妙な塩梅。
打たれた舌が助けを求めたそこへ、ルーの中核を成すじっくり炒めた玉ねぎの甘みと、揚げパンのどっしりした甘みが、癒しを超えた美味となって押し寄せる。
表面には粒の荒いパン粉がまぶされ、昼休憩の時間に合わせて揚げたてで提供されるから、歯触りのサクサク加減はこの上なし。
「旨かったー」
諸葉はパン職人さんに感謝し、合掌する。
午後の授業までまだ時間が残っていたので、皆もそのまま石動攻略の話し合いになった。
「カメヨシぶっ潰した時みたいな、すんごい秘策はないの、諸葉？」
サツキがチョーシのいいことを言ってくる。期待の眼差しで。
春鹿が「肩車いやがったくせに」とツッコみ、サツキは「るさいっ」と頬をふくらませる。
「ぶっちゃけそんな都合のいいものはない」
諸葉は容赦なくサツキの期待を打ち砕いた。
「石動先輩は全く隙のない白鉄だものね」
静乃も横から言い、諸葉は大いにうなずく。
「パワーはサツキやソフィー先輩には劣ると思う。でも、通力を威力に変えて収束させるセンスが抜群だから、《太

白》や《太歳》の破壊力は石動先輩の方がずっと上」
「攻撃の方が得意なタイプだけど、決して防御が苦手ってわけじゃない。攻めと守りの通力の、咄嗟の入れ替えがスムーズだし。一流だよ」
「スピードは並……かな。でも歩法はちゃんと磨いてる。《巨門》なんて得意にしてるし、ここ一発の《破軍》まである」
「しかも、あの雷の《蜚廉》は反則レベルだよな」
と、諸葉は矢継ぎ早に石動の長所を挙げていく。
マヤが指折り数え、そのたびにサツキが悔しげな首をさらに引っ込めていく。
「……た、短所は？」
「だから隙がないって静乃が言ったじゃん」
おずおずと訊ねたサツキに、春鹿がピシャリ。
諸葉は苦笑いで話を続け、
「基本的には、どっしり待ち構える石動先輩を、二人でどう攻略するかって流れになるはず」
「石動お兄さんは攻める方が得意なのにです？」
「ああ。サツキもモモ先輩も、守るのが得意な白鉄だからな」
首をかしげたマヤの頭に、諸葉は手を置く。
守りに徹すると決めたタフネス自慢のサツキや、逃げ回ることに専念した春鹿を打ち倒すのは、並大抵のことじゃない。いくらあの石動迅だって手こずる。手こずらせることができるほどにこの二人は成長した。
「これが一対一なら、それでも石動先輩は攻め立てて勝とうとすると思う」
でも、二対一だから、その間にもう一人が背中から襲ってくる。
それはいくら石動でもマズいシチュエーションだし、ゆえに待ち構えることに徹して、カウンター狙いの戦術をとってくるというのが、諸葉の見立てだった。
「なるほどなるほど。で、あたしらはどうすればいいワケ？」
「ちょっとは自分で考える気はないのかしら……？」
静乃が呆れ、サツキが「るさいっ」と頬をふくらませる。

「カウンターに気をつけつつ、モモ先輩が足を使って石動先輩への攻めと撹乱を同時に行う。サツキは石動先輩に隙ができるのを虎視眈々と待って、隙あらば重い一撃を叩き込む」

「アタシも隙があったら、一気に勝負かけちゃダメ？」

春鹿がきょとんと自分を指差す。

「ダメですね。石動先輩がたまーに使う《巨門》がまた怨いんですよ。その隙がブラフだった場合、二人が一気にやられかねないです。逆に、モモ先輩が睨みを利かせていれば、サツキは残像にだまされたらどうしようって一切心配せず突っ込めます」

「そりゃそっかあ……」

「特に、今回の試合では《貪狼》は絶対に使用禁止です。使っていいのは、石動先輩が《破軍》を使った後、反動で足が止まった時だけです」

「逆に言えばアタシが《貪狼》を温存しとくだけで、先輩にプレッシャーかけられるのか……」

「二対一の大きなアドバンテージなのですっ」

「でも、いくら睨みが利いているからといって、石動先輩が《破軍》を使ってこないと思い込むのは悪手でしょう？もし使われた時に、それこそサツキなんてどうすればいいのかしら？」

「うっ、そう言われれば……。もしかしてあたし、使われたらそこでゲームオーバー？」

「対策はある。……そこまで劇的じゃないけど」

「聞かせて、兄様！」

「だから劇的じゃないぞ？　サツキは試合中、いつ如何なる時も油断せず、守りの通力をメインにして全身に纏っておくこと」

石動の《破軍》を使った攻撃は見切れなくても、一撃喰らって倒れさえしなければいい。

逆に大チャンス到来だ。

「特に、必ず一定の間合いをとって、近づきすぎないこと」

石動の奥の手中の奥の手に、《破軍》ですれ違い様に斬るというのがある。

これは如何にサツキのタフネスでも、凄まじきるのは難しい。

でも、《破軍》はそう飛距離を出せる技ではないので、近づきすぎることさえなければ、《破軍》のその直最中に斬

られるようなことはない。

「サツキは通力の、攻めと守りのスイッチが苦手だろ？　だからいつもは地の強さ任せで、フィフティフィフティにしとこって癖があるけど。今回はメリハリが重要なんだ。やれるな？」

「わ、わかった！　あたし、肝に銘じた！」

自分の左胸をドンドン叩くサツキ。

静乃が「そこは肝ではないと思うけれど？」とからかい、サツキは「るさいっ」と頬をふくらませる。

「んで――《破軍》対策はそれでいいとして、一番厄介なのは《蛮惑》だよ。石動先輩のはろくに溜めも撃った後の隙もないし、きっと試合でもバンバン使ってくるぞ」

「……あたし、それこそ雷なんて避ける自信ないんですケド」

サツキの憂鬱げなその瞳が「何か対策ないの、兄様？」と言っている。

しかし、諸葉が口を開くより早く、マヤが両手を打ち合わせた。

「わかったのです！　サツキお姉さんの《破軍》対策が、《蛮惑》対策にもなっているのです」

「正解」

諸葉は頭を撫でてやり、マヤがうれしそうにする。

「サツキがずっと守りの通力を使って身構えていれば、雷で打たれても平気というわけね？」

「平気じゃないし痛いだろうが、サツキのタフネスなら耐えられないってほどじゃないはずだ」

「あたし、勝つためならがまんする！」

「でもその対策、アタシには使えないじゃんっ」

サツキが快哉を上げ、春鹿が悲鳴を上げる、二者二様の反応。

「モモ先輩はなんとか避けてもらうしかないですね……」

「なんとかってなんだよ……」

春鹿はしょぼくれていたが、すぐに、思い出したように顔を上げた。

「……六翼会議の〝閃剣〟は、完璧にかわしてたな……」

「俺はそいつを見たことないので想像ですが、肝心なのは『読み予測の速さ』でしょうね」

「読み予測ねえ……」

「石動先輩のはいくら溜めが要らないって言っても、《蚤歴》である以上は強い精神集中が要るはずなんです。その〝打ち気〟を読むしかない」
「しかないわよモモ先輩！」
サツキがガッツポーズをとり、春鹿が「他人事だと思って……」と恨めし気に睨む。
それから、
「でも待ってくれ。石動先輩が〝閃剣〟と戦った時、校舎の一階丸々貫くような大量の電撃を放ったんだ。あれは読んでもかわせないよぉ」
「その時、石動先輩は平然としてました？　しばらく動けなかったりは？」
「あっ。膝ついて、相当長いこと立ち直れてなかった」
「でしょうね」
そんな真似がノーリスクでできるなら、石動はあの悪魔みたいに剣を磨く必要がない。
「だったら石動先輩はそれを試合で使いません。忘れていいです。そりゃモモ先輩はイチコロでしょうけど、サツキは耐えきる公算が高いですから。とどめ刺されるだけになります」
「そっか♪」
「ふぉ～～～～～ふぉっふぉっふぉ！　頼りにしてくれていいのよ？」
サツキが得意げに高笑いをし、あげく春鹿に向かってうりうりと愚着せがましくする。
春鹿が「ウゼエ……」と呟いたが聞こえていない。
今日一番の明るい表情で、こうのたまったのだ。
「もしかして、あたしとモモ先輩のコンビって、すごく相性がいいんじゃないの？　お互いの苦手なとこを補い合えるってゆーかさー」
聞いたマヤがクスリとし、春鹿が呆れ果てた顔をした。
サツキが「なんでそんな顔をされなきゃならないの？」とばかりにムッとし、仕方がなさそうに静乃がツッコむ。
「だから、さっき諸葉が言ったじゃないの」
「う、漆原が威張んなくてもいいじゃない……」
サツキは反発するような口を叩いたが、声がもう尻すぼみだった。

マヤがますます、春鹿も堪らず笑い出す。
諸葉も声には出さず笑いながら、
「サツキとモモ先輩のコンビなら、勝てる可能性は決してゼロじゃないんです」
仮定の話、「サツキとソフィア」なんて組み合わせだったらほぼゼロだっただろう。
「何より――石動先輩は全力で戦うって言ったけど、死に物狂いになるとは言ってない」
「そこまでして戦う理由は、先輩にはないものね？」
「あれで石動お兄さんは優しいのです」
「そう。一番怖い時の石動先輩を相手するわけじゃないんです。勝機はあります」
諸葉はゆっくりと、サツキと春鹿を見回す。
サツキと春鹿は何か閃いたように、互いに顔を見合わせ、
「だったら逆に、あたしたちが一心不乱に戦えば――」
「もっと勝機が呼び込める？」
「そう。その通り」
諸葉は力強くうなずいた。
サツキと春鹿が同時に、跳ねるように立ち上がる。
「あと九日、できることは全部やるよ、サツキ！」
「レッツ一心不乱！」
ハイタッチする二人の少女を、諸葉は見上げて眺める。
風が吹き、木陰を作っている枝葉がざわめく。
その隙間をすり抜ける陽光が、乱反射して降り注ぎ、サツキと春鹿を輝かせていた。

元々、亜麻学園ではクラスは持ち上がり制だった。
組も生徒も担任の顔ぶれも、全く変わらない。

改革を進める上で教師の中から、「実力順にクラスを振り分けた方が、生徒たちに見合ったレベルの授業が、無駄なくできてよいのではないか」という意見も出たそうだ。

が、これは石動が却下した。

一クラスの中で、どうしても優れる者、落ちこぼれる者が出てしまうのは仕方がない。

それは人間社会の摂理だ。

しかし、優れた者がクラスの身近にいれば、周りは感化、発奮させられる。

落ちこぼれた者は教師陣が手厚くフォローし、また勉学等の他の道にも目を向けさせてやる。

大事なのはそちらであって、実力順のクラス割などしたが最後、一学年四クラスのうち、一番下の一クラスが丸々——最悪、二番目に下のクラスも——が、劣等生の烙印を捺され、やる気を失ってしまうだろう。

そして、そんな彼らを教える教師側からのフォローなど存在しない。

あたら貴重な《救世主》の、四分の一から半分の未来を学校制度で奪ってしまうわけだ。

「愚策にすぎます」

と石動は断じた。

という経緯があって、諸葉、サツキ、静乃は揃って二年一組のクラスメイトとなった。

レーシャが二組のままなのは残念かもしれないが、彼女は彼女で仲のいい友達をクラスに作っていたので、レーシャのためを思えば悪くない結果。

そしてもちろん、二年一組の担任は田中太郎のままであった。

日直当番の諸業は放課後、職員室の田中のところへ日誌を届けに行く。

ついでに小声で話しかけた。

昼間会った、少年の顔を思い浮かべながら。

「先生の息子さん、今年入学してたんですね」

「もしかして、一朗から聞いたのかい？」

自分の席に着いたままの田中が、大げさにのけぞり、自分の頭をひと撫でする。

「ええ。言いふらす気はないですけど」

「そうしてもらえると助かるなあ」

もちろん他の先生方は知ってるけど、と田中は付け加える。

「親子で《救世主》だったなんて珍しいですよね」

「似てないだろう？」

黒ぶち眼鏡に七三分けの髪型、背景に溶け込みそうなほど地味な風貌の田中が笑う。

同じ眼鏡マンでも、一朗少年は確かに涼やかな容貌だった。

「でも、先生を見て育ってるからか、すごく正義感もありそうで。いい子じゃないですか」

「いやいや、あいつは物心ついたころからそうだったんだよ」

田中は身内のことを語る照れ半分、苦笑い半分という表情で教えてくれた。

「困った人を放っておけないというか……それはいいことなんだけど、クラスのいじめっ子とか近所のワルとかも許せないタチでね、そりゃあケンカが絶えなかった。子どものやることだから、殴る方も殴られる方も加減てものを知らない。親としては冷や冷やだったよ」

だから田中は、一朗少年を柔道の道場に通わせることにしたという。

精神修養も重視し、人格者で知られる有名な師範が近所にいたらしい。

なるほど、きちんとした武道を身につければ、自分も相手もほとんど傷つけずに、荒事を解決することだってできる。

「師範のおかげもあって、僕と妻の期待以上に立派に育ってくれたと思っていたら、今度は《救世主》に目覚めちゃったんだよ。あいつが中二の時だった。白騎士機関とか《異端者》の話をする決まりだから、僕からしたよ。そしたらあいつ、どういう反応をしたと思う？」

「大喜び？」

「そうなんだ。化物はみーんな退治して、世界を救うんだって張りきっちゃってねえ」

田中の、身内を語る照れと苦笑いが強くなる。

「熱いですね。見た目はクールなのに」

「そう。親の僕から見ても変なヤツなんだ」

「でもうれしいもんなんじゃないですか？　息子さんが一緒の道を目指してくれるってのは」

「僕はあいつには、野球選手にでもなって欲しかったなあ」
どこまで本気か軽口か、田中が笑い飛ばした。
でも確かに、一朝少年の名前は超メジャーな野球選手の名前と、同じだと諸葉も気づく。
「先生って野球がお好きなんです？」
「こう見えて甲子園まで行ったんだよ？　相葉一高の二番ショート・田中太郎と言えば、当時は……っていけない、年寄りの昔自慢は退屈だったね」
それはまた意外な経歴があったものだと、諸葉は感心する。
「いえ、興味ありますよ。聞かせてください」
「また今度ね。今度」
そう言って田中は、照れ臭さ十割の表情で言葉を濁した。
相任の、こういう素朴な人柄が、諸葉はきらいではない。

SECTION 4

第四章　尸解行

残照を背負いながら、丈弦は薄暗い校庭を歩いていた。
足取り重く、武道館の脇を通りすぎる。
中は灯りが点いていて、サツキと春鹿の威勢よい掛け声や、諸葉の頼もしいコーチングの声が聞こえてくる。
こんな時間までまだ特訓か。
石動への挑戦試合はもう三日後。追い込みをかけているのだろう。
丈弦はうつむけていた顔を上げ、武道館をしばし振り返った。
でも、再び歩き出し、教務棟に入り、校長室の前に立つころには、また顔が下を向いている。
気持ちを入れ替えるために、肺の中の空気を吐く。
空っぽになるまで嘆息したのに、気分は変わってくれない。
仕方なく、陰鬱なままドアを叩いた。
「入りたまえ」
間断なく、錆びた声が中から返ってくる。
「よう。邪魔するぜ」
丈弦は入室し、しっかりとドアが閉まったのを確認してから、挨拶をした。
石動迅は執務机にかけて、ノートパソコンとにらめっこしているところだった。
こんなにスーツ姿がしっくりきてても、まだまだ事務仕事には慣れないのだろう。
丈弦はクスリとしかけて——失敗する。
口元が強張ったままだったのだ。

「どうした、丈弦？　そんな恐い顔をして……」
石動も怪訝そうにしている。
「久しぶりだな、石動」
「？　ついこの間、一緒に万年堂君たちへ稽古をつけたばかりだろう？」
とにかく唇を湿し、舌を動かそうと努力したらこれだ。
「……だったな」
丈弦は肩を竦めるが、いつもみたいにサマにならない。
なんと話を切り出すべきかと考える。
考えながら、石動の口元を凝視し、それから目を閉じて《天耳通》に集中する。
そうやって、間違いないと確認すると、
「……変なこと、訊いていいか……石動？」
「別に構わんが」
気軽に請け合った石動の表情が、
「おまえさん、なんで呼吸を止めてんの？　ずっと」
丈弦の質問で、一発で強張った。
「まるで死人みたいだぜ……？」
「……別に深い意味はないさ。少し、思うところがあってね」
「へえ。聞かせて欲しいな。その愚うところってやつを。詳しく」
「……」
石動は口をつぐむ。
目が据わる。
最初、丈弦を歓迎してくれていた雰囲気は、微塵も残っていない。
丈弦も怯むわけにはいかなかった。
核心へと斬り込む。
「なあ……石動。……おまえさん、昨日の夜は何をしていた？」

「事務仕事を持って帰ってやっていたが？」
石動がますます警戒の色を顔に出した。
丈弦も引き返せない。
「本当に？」
「疑うのか？」
互いに言葉短く。
しかし、刃を交わすように鋭く。
「なあ、丈弦。……おまえこそ昨日、何かあったのか？」
逆に問いかけてくる、石動の表情と声は重く、硬質で――何より怖ろしかった。
丈弦もまた答えない。
昨夜、目にした信じがたい光景のことは、迂闊に口にできない。
あの男を追っていたら、なぜ……。
なぜ、石動と……。
「……おまえさんとオレは、友達だよな？　今でも」
答える代わりに出るのはそんな台詞。
「当たり前のことを聞くな」
石動が少し――ほんの少しだけムっとなった。
だから嘘には聞こえなかった。
丈弦は自分でもびっくりするくらい、ホっとなる。
同時に「ならなんでだよ……」とやりきれない。
押し殺した声で言う。
「今夜、一緒にメシ行こうぜ」
「悪いが予定がある」
「へえ。ダチのオレより、優先しなきゃいけない予定が？」
「……子どもみたいなワガママを言わないでくれ、丈弦」

これ以上、押し問答する気はないことを示すように、石動が口を真一文字に引き結んだ。
潮時だ。
丈弦も理解する。
「信じてるからな」
それだけ言い残して、踵を返す。
石動も最後に一つだけ、声をかけてくれた。
「友人として忠告する――」
沈毅で、生真面目な彼らしい口ぶりで。
「――大学生活を謳歌しろ。無用の場所に首を突っ込むな」
彼らしい優しさで。
丈弦は手を振って応えた。
来た時以上の何かを背負って、校長室を後にする。

その夜、石動はマンションに帰ることなく、独り、北へ向かった。
《神足通》を用いて影の如く走る。
速く、それでいて静かに。途中、何度も背後を振り返りながら。
県道を三十キロほど、山々へ至る。
学園が山岳戦シミュレーションの特訓によく使う、林の中。
奇しくも彼の弟が、田中太郎の指示で山籠もりしていた場所だった。
そこで、待つ。
灯りも点けない。月光すら寄せつけぬ夜のヴェールが、完全に林の中を覆っている。
じっとしていると、やがて、深い闇の中に気配が生まれた。
石動はそちらへ目を向ける。

「こんばんは、石動様。今宵も時間十分前でございますね。感服いたしました」
気配の主は慇懃無礼な挨拶とともに、飄々とやってきた。
道服を纏い、杖をつくその男は、ルー・ヂーシンである。
「誰かに尾行されてはいないか？」
「ワタシがそんなヘマをするとでも？」
「……なら、いいが」
石動は渋面で周囲の様子を探る。
どこかの木陰に丈弦が潜んでいるのではないかと、嫌な予感を拭い去れない。
石動がそんな難しい顔をしている間にも、
「申し訳ありませぬが、ワタシも暇ではございません。早速、一手ご指南つかまつりましょう」
ヂーシンは木の幹に杖を立てかけ、拳法の構えをとった。
石動も認識票から広刃の剣を顕現させる。
真剣の中、化物を教師と仰いで対峙する。
暇ではないの言葉に偽りなく、ヂーシンは時折フラリと現れては、数夜ほど連続して稽古をつけてくれて、また音沙汰がなくなるのを繰り返している。
「石動様のご成長の様子を、確認しに参っておるのですよ」
と彼は言う。

思い起こせば、春休みも末のことだ。
「もっと強くなりたくはありませんか？」
ヂーシンはその言葉を携えて、石動の前に姿を現した。
石動は警戒し、偵踏みし、黙考し、その果てにこう答えた。
「……話を聞かせてくれ」
ヂーシンが我が意を得たりとばかりに、口角を吊り上げたのは言うまでもない。
誰にも見つからぬよう、場所を移した石動の前で、ヂーシンが最初にやってみせたのは、特殊な呼吸法だった。

「我が師父が編み出した、調息という練気の極意でございます」
初見の石動には、途方もなく長い深呼吸に見えた。
そして、興味深い。
翡翠のような暗緑色のチーシンの通力が、呼吸に合わせて磨かれ、明度と純度を増していく。
「これを会得すれば、僕も強くなれるというわけか……」
拳を握りしめた石動に、
「早とちりはいけませぬなあ」
チーシンはやんわりと窘めた。
逸る心を揶揄されたようで、石動は仏頂面で押し黙る。
話の先を促す。
「この調息をある程度、高い次元で会得できれば、確かに強くなれます。しかし、それはあくまで副次的なもの……本来は仙道へ至るための、気が遠くなるほど時間のかかる修行法なのでございます。かくいうワタシもこの域まで会得するのに、二十年かかりました。師父には筋がよいとお墨付きをいただいた、このワタシですら」
「……二十年、か」
「それは石動様が望むものではございませぬでしょう？」
論を俟たない。
そんな悠長な修行を良しとできるのならば、石動はこうも焦っていない。
チーシンはわざと焦らすように間をとってから、
「そこで、もう御一方の仙人の話になります」
「……いるのかね？　中国支部長殿以外にも？」
「いらっしゃいますとも。永劫の寿命を体得された御方が、世にもう一人だけ。御名を貝利師叔と仰います。我が師父とは全く違う修行法にて至った、尸解仙なのでございます」
ここまで話を聞いて、石動はピンと来た。
「僕が会得すべきは、その貝利仙女の修行法であると？」
チーシンは肯定する代わりに拱手した。

「貝利師叔が如何なる行で昇仙に至ったのかは、ワタシも長らく存じ上げなかったのです。それを先日、師叔御自身から教授いただく僥倖に恵まれました。残念ながらそちらの修行法でも、仙道へ至るにはそれなりの時間がかかるとのことです。が――強さを得られるまでの時間に関しましては、なかなかの即効性がある、と……」
それはまさしく石動が求めていたものだった。
永遠の寿命などどうでもいい。
すぐに、力、が手に入るなら。
「どうすればいい？」
「貝利師叔のやり方は、我が師父のやり方とまさに対照的でございました」
チーシンがもどかしいほど懇切丁寧に教えてくれる。
迭戈は調息によって天地自然の氣を取り込み、己の魂を補強し、より純粋な存在として、ついには肉体が不要になるほどの進化を遂げ、仙人となった。
しかし、貝利の考えは逆だった。
人はその魂だけで完成されている。
むしろ天地自然の方が、肉体同様に不純物である。
よってそれらを断つことによって初めて、人間はより純粋な存在となれる。
水も肥料も敢えて与えぬことで、より強靭に育つある種の作物と同じ。断つことでかえって人の魂は、生き延びようと眠っていた力を発揮する。
やがては摂理を歪め、肉体を不滅のものに作り変えてしまうほどの、強大な力だ。
「石動様は、考えたことがございませぬか？　そも呪力とはなんぞや、と」
囁くように言うチーシンの言葉に、石動は驚愕と戦慄を禁じ得なかった。
呪力とは《異端者》の力の根源。
そして、《異端者》とは人の魂を抜き出して造ったものだと、今では判明している。
ならば呪力はどこから発生するものなのか……。
「何も知らずに呪力と、禍々しく命名したのはサー・エドワードにございますが、おかげで我々の思考は先入観に毒され、真実に気づけなかった」

「あんな……あんな邪悪な力が、人の魂の根源だと言うのかっ」
「はて？　石動様は、人類が一切の邪まを持たぬ、聖人君子の同義語だと考えておいでで？」
チーシンは殴憮無礼に嗤笑んでみせた。
これほど痛烈な皮肉はない。
石動は何かとてつもなく苦いものを、呑まされたような気分に陥る。
我知らず苛立ち、
「つまり、その貝利仙女とやらは《異端者》なのか⁉」
「滅多な――そして失礼なことを仰いますな。《異端者》とは六翼会議の巫女が、人から強制的に魂を抜き取り、その暗部を暴走させて作るただの魔物。貝利師叔は己の自我と美貌を保ったまま、己の知恵で魂の力を高めて昇仙なさった、傑物にございまする」
石動は大声で指弾したが、チーシンは小揺るぎもせず反論した。
ぐっ、と言葉を詰まらされる。
チーシンが身を乗り出し、畳みかけるように続ける。
「さあ、石動様。呪力などという無知が産んだ価値観など忘れ、己の魂の力をほしいまま高めるのです。やり方はもう、見当がついてらっしゃいましょう？」
無論、言われずとも、もう石動にはわかっていた。
チーシンは送炎のやり方と対照的だと言い、天地自然を断つのだと言った。
すなわち、呼吸を止めることこそが、貝利の修行法だ。
それでどうやって人間が、生命活動を維持できるのか？
チーシンに教えを請う必要もない。
白鉄なら《内活通》が使えるのだから。
酸素が遮絶えようがなんだろうが――それこそ、かつて諱業に何時間も氷漬けにされたサー・エドワードの如く――《内活通》があれば、その程度では死にはしない。
その怪しげな修行法で、自分は強くなれるのか。
何やら、不気味な力を会得できるのか。

「一つだけ、確認させて欲しい」
石動はにわかに空気が欲しくなって、喘ぐように訊ねた。
「ワタシにお答えできることならばなんなりと」
「なぜ、それを僕に教えた？　知己でもなければ敵であるこの僕に？」
「はて？　石動様はこのワタシの敵足りえると？　素晴らしい自負にございますなあ」
辛辣な嫌みだ。
石動は反論できず、ぐっと堪えて、
「……それが答えか？」
「いえいえ、冗談にございます。真面目なところをお答えいたしましょう」
チーシンが神仏の如きアルカイックスマイルで破顔した。
「人体実験でございますよ」
石動は口をへの字に曲げるように、歪んだ笑みを浮かべた。
「なるほど。僕はモルモットか」
「然様にございます。ワタシは貝利師叔を信用したわけではありません。何しろ、人をからかうのがお好きな女性。修行法は真っ赤な偽りやも。あるいは真実だとして、恐ろしい副作用があるやも。真っ先に自分で試す気には、到底なれぬのでございますな。そしてもちろん、レナード様で試して間違いがあっても、ワタシの立場がなくなってしまいます」
ぬけぬけと言ってのけるチーシン。
でも石動は激昂することも、言い返すこともできなかった。
事実、心が揺らいでいたのだ。
チーシンからすれば路傍の石にすぎぬ自分の元へ、わざわざ顔を出した理由も腑に落ちた。
石動ならどんなリスクがあろうと手を出すと、見透かされ、侮られたとわかっても。
（強くなれるならば、僕にとって全ては些事）
――そう。
決意は固まった。

ヂーシンもまた最後に確認してくる。

「ワタシと石動様の利害は一致しておると愚考いたしますが、さて――御返答は？」

彼の、光を失ったはずの、糸のように細い目が、こちらを射抜くようにしてきた。

石動は胸を張って即答した。

「僕は天をつかみたい。灰村君のように。……灰村君よりも」

「なんと！　石動様の悲願は、打倒・灰村様でございましたか。これは面白い！」

石動とヂーシンが握手をした瞬間だった。

あれから早や数か月。

石動はもうずっと呼吸を止め、常時《内活通》を走らせて生活している。

半随意筋であるため、完全に止め続けるのは最初難しかったが、やがて慣れた。

七門の一つ、心臓の門から絶え間なく通力を汲み上げることにもだ。
眠っている時でさえできるようになった。
「素質がおありだったようですねえ」とはヂーシンの言。
貝利仙女の教えは果たして嘘ではなく、効果はあり、成果も出てきた。
その成果を確かめるために、今夜もまた石動は、ヂーシンの胸を借りて手合わせをする。
七門とは別の、もっと奥底から汲み上げられるようになった、〝新しい力〟を全身に纏って。
月光も届かぬ深い山林の中で。
しめやかに。密やかに。

SECTIONS

第五章　ランクAになりたい！

夕食後、春鹿はクラスメイトで親友の、椎名春子の部屋に来ていた。
座卓を挟んでモソモソと宿題をやる。
春鹿の学力は割とアレなので、主に椎名頼りになっている。
「ちょっとは自分で解きなさいよね……」
「まあまあ」
なんてやりとりを繰り返すのも何度目か。
「あーもー！　石動先輩もどうせなら、学科の授業なんて全部なくしてくれればよかったのに」
春鹿は床へ身を投げ出すように、後へ倒れた。
「あんた、それ、さりげにサイテー発言だよ？」
「へーへー、戦うことしか知らない、社会のクズですみませんねー」
椎名に小言をいわれ、春鹿は頬を膨らませ、体ごとプイっと横になる。
その顔と格好のままで、
「完全になくせとは言わないからさー、今この大事な時くらい、宿題ナシにしてくれてもいいじゃんねー」
三日後に迫る、石動への挑戦試合に想いを馳せ、憂鬱になる。
「校長先生に勝つの、やっぱり難しそうなの？」
「勝率十パーだってさ。諸葉が言ってた」
「灰村君も手厳しいわね」
「コーチもすげー厳しいんだよー。だから椎名は優しくしてくれよー」

春鹿は甘えた声を出すが、椎名は「宿題は自分でやれ」とバッサリだった。
恨めしげな目をして睨む。
椎名はそれを無視して、
「灰村君ってそんなに厳しくするんだ？　意外」
「まー、そーじゃねーと身にならないしー。アタシもありがたいんだけどさー」
「ふふふ、愛だね」
「あ、愛とか言うなっ」
「百地も好きな人と毎日特訓できて、うれしいんでしょ？」
「す、好きな人って言うなっ」
「だって事実だもーん。こないだ、ロシアに出撃した時のこと憶えてる？」
と、椎名が一か月も前の話を持ち出す。

モスクワとニジニ・ノヴゴロドの中間点に、等級《異端者》が出現する事件があったのだ。
雷帝を失ったロシア支部では、ドレノドノート退治は難しい。多数の犠牲を出しかねない。
そこで日本支部が要請を受けて、諸葉を先頭に実戦部隊が出撃した。
マヤの《移ろいの門》を使い、救援に駆けつけた実戦部隊一同は遊撃部隊として動き、ロシア支部の精鋭たちとともに戦った。
その戦闘の様子はロシア支部の計らいで中継され、亜鐘学園の生徒たちも観戦できた――

「あんた、灰村君とペア組んで戦ってたじゃない？」
「ロシア支部とにわか連携するのは危険だから、アタシら遊撃任務だったもん。そしたら諸葉のスピードについていけるの、アタシだけじゃん。それだけの話じゃん」
「あんた、甲斐甲斐しくフォローしてたわよね」
「そりゃ当たり前じゃん。一番強い諸葉を立てるのが、一番効率いいじゃん」
「ぶっちゃけあんた、雌の顔になってたわよね」

「し、してねーしそんなの！」
「写真に撮っておいたんだけど、証拠に見る？」
「ま、また今度なっ。さ、宿題しよーっと」
春鹿は逃げた。
いそいそと座卓の上のノートに向き直った。
椎名の証拠写真とやらは大方ブラフだと思うが、もし万が一、自分が本当にそんな恥ずかしい表情をしていたなら、客観視させられたら悶え死ぬ。
諸葉とコンビ組んで戦うのは、時に快感を伴うほど楽しく、一体感を味わえるのも事実だし。
「ねーねー、灰村君とはどこまで進んだのー？」
さっきまであんなに宿題やれやれ言っていた椎名が、掌を返して甘えた声で訊いてくる。
「あ、アタシと諸葉はそんなんじゃねーし」
「キスくらいはした～？　灰村君の唇って柔らかい？　それとも男の子って硬いものなの～？」
「コノヤロウ……」
座卓の上に両手で頬杖ついて、楽しげに体を揺する椎名のことを、春鹿は半眼で睨む。
「いいじゃないの。教えてよ、百地～。いつも宿題、教えてあげてるでしょ～？」
「そ、それ出すのはズルいじゃんっ」
「え～？　何がズルいかわかんないな～？　ギブ・アンド・テイクだと思うな～？」
椎名はニヤニヤしながら、自分のノートを閉じる。
春鹿が白状しなきゃ、これ以上、宿題は見せてやらないという意思表示……！
「くっ……」
追い詰められてしまった。
「ね～、いいでしょ～？　誰にも言わないからさ～？」
しかもそこへ、さも救いの手が延べ見せかけた、巧妙なる椎名の話術！
「わ、わかったよっ」
春鹿は陥落した。

すると椎名も女神のように慈悲溢れる笑みを浮かべ、再びノートを開く。
「ね、灰村君ともうキスした？」
同時に、悪魔のように容赦なき質問をしてくる。
「ナイナイ。これマジ」
「つまんないなー。百地は奥手だなー」
「悪かったねっ」
春鹿は憎まれ口を叩きつつ、額を汗まみれにした。
勢いで諸葉のほっぺやおでこにしたことあるのは、絶対に悟られないようにしよう。
「じゃあ、手くらいは繋いだの？」
「それくらいならある」
「いついつっ？　デートの時？」
《破軍》の特訓の時」
「……」
憮然となった椎名の視線が痛い。
「でも事実、デートはしてるんだよね？　よく二人で出かけてるもんね？」
「ただフツーに遊びに行ってるだけじゃん。多分、あっちもデートと思ってないし」
「そんなまさかでしょ！　言ってみ？　こないだは二人きりで何したの？　白状してみ？」
「バッティングセンター行った」
「……」
無表情になった椎名の視線が冷たい。
「ご飯は？」
「焼肉食い放題。なんか、五周年記念とかで安い店あった」
「……」
椎名にため息つかれた。
「まるっきり、男同士の遊びって感じじゃない……」

「だから言ったじゃんっ」
「あっはっは、あんたやっぱホントは男なんでしょ？　みたいじゃなくてマジモンなんでしょ？　私が嫁き遅れたらその時はもらってよねっ」
「やめろー！　アタシの場合それシャレにならーん！」
「シャレにならないって自覚してんなら、なんとかしなさいよ！　もっと乙女として灰村君に迫りなさいよ！」
「あ、アタシだってこんなでも、せーいっぱい努力してるっつーの！」
言い合いが白熱し、気づけば互いにツバを飛ばして怒鳴り合っていた。
その不毛さにも気づかされて、二人とも黙り込む。
かと愚えば、
「だよねー。あの灰村君にあんたは突撃してんだもん。嵐城ちゃんや漆原静乃を相手取って。あんたは充分、勇気あるよねー」
今度は椎名が上体を後へ倒し、寝転がる。
いきなり褒められても、春鹿は反応できない。
椎名はしばらくゴロゴロしていたが、座卓の下から足を伸ばしてきて、
「考えたらさ。実は悪くない関係なのかもよ」
「足でさすんな。慰めんな」
「あんたくらいサバサバした奴の方が、灰村君としてもつき合いやすいし、気兼ねないかもね」
「そっ、そうかなっ」
「だからってたまにはドキドキさせないと、いつまでも〝男友達〟よ？」
「難しいこと言うなよー……」
春鹿はべたりと座卓の上に体を投げ出した。
「灰村君の前でスカートたくし上げるとか、簡単じゃない？」
「その簡単さは代償が大きすぎるやつだからっ」
国庫がヤバいから紙幣を鋳造しよう、とかと同次元のやつ。
「じゃあ腕組んで『おっぱい当ててんのよ』とか……あ、ゴメン」

「謝んなっ。泣くぞっ」
春鹿はほとんど膨らんでない胸を、隠すように自分で抱く。
掌に当たるボリューム感は悲しいほど乏しい。
座卓に顎を置いたまま、椎名を眺め見る。
あっちは仰向けに寝転がってても、決して重力に押し潰されない、立派なものをお持ちだ。
（ちぇー。椎名の隠れ巨乳……っ）
春鹿は天の不公平を呪わずにいられない。

その晩、春鹿は夢を見た。
自分も立派な乳に成長して、諸葉の視線を釘付けにしてやる夢だ。
起きてすぐ、四隅の窓から飛び降りたくなった。

（じ、自分の潜在意識が恥ずかしいっ）
なんて欲望に忠実な潜在意識だろうかと嘆きつつ、日課のジョギングに出かける。
変な夢のせいでいつもより早く目が醒めて、出発も一時間ほど繰り上がる。
あくびしながら女子寮の玄関先に立つと、思わぬ人物と出くわした。
ランニングウェアの短パンから伸びる、日本人にはありえないほど真っ白な脚。
銅のようにくすんだ銀髪が、今は朝日を浴びてきらめいている。
レーシャこと、エレーナ・アルシャヴィナだった。
あちらも春鹿の存在に気づき、
「おはよう、百地春鹿」
よそよそしいほど硬質な声音で挨拶してきた。
「おはよ。おまえもジョギングか？」
「はい。この時間に走り込みをするのが、私の日課だ」
「こんな早くから!?」

「あなたは何を驚いているのだろうか。早起きしているのはあなたも同じだ」
「あ、アタシのはなんつーか……その……あはは」
夢見が悪くてたまたま早起きしただなんて、格好悪くて言えない。
レーシャはきょとんとしていたが、
「よくわからないが、私はお先に失礼させてもらう」
そう断って、さっさと街の方へ向かって走り出した。
素っ気ないというか他人行儀というか。
思えば、レーシャと二人きりで何かをしたという記憶が、春鹿にはない。
お互い諸葉の周りをウロチョロしているから、ともにすごした時間はけっこうあるはずなのに、まともに話したこともない。
皆で一緒にいる時も、だいたいレーシャは諸葉や静乃とばかり話している気がする。
「なあ！　アタシも一緒に走っていい？」
珍しい機会だし、ちょっと興味が湧いて、春鹿は後を追いかけた。
「私は構わない」
隣を並走すると、レーシャはこちらも見ずに了承する。
それきり、だんまり。
ひどくとっつきにくい感じ。
おしゃべりするにもきっかけをつかみ損ね、春鹿は横目で盗み見る。
するとだ。
非常に目につくではないか。
走る動作に合わせて大きく揺れる、レーシャの豊かなおっぱいが。

目障りこの上ないことに。

（こいつ、よく見たら腕も脚も……腰まで細いのに、そこだけデカいとか……反則クセエ……）

これが東欧女の魔性か。

春鹿は思わず嫉妬の炎を燃やしてしまう。

これ見よがしに揺らしやがってぇ！　と嫉妬の対象をジロジロ睨んでしまう。

しかも、レーシャときたら相変わらず口も利こうとしないし、こっちを一度も見ない。「テメーなんて眼中ねーから」とでも言うつもりか？

春鹿は拗ねた口調になって言ってやる。

「アタシのことをきらいなら、無理に一緒に走ってくれなくていいんだけど」

「あなたの言葉の意味が、私には理解できないのだが？」

「だってアタシの方、見向きもしねーじゃん」

「なるほど。見つめ合って走りたかったということか。承知した」

「そこまで言ってねーし前見ろ前！　赤信号突っ込むから！」

レーシャは危うく交差点の前でストップし、その場で足踏みを続けた。

春鹿は胸を撫で下ろしつつ、

「……もうこっち見なくていいから」

「あなたの言うことは難しい。嵐城サツキを私は彷彿する」

「おまえが融通利かなすぎぃ！」

「なぜ、私は怒られ続けなければならないのだろうか？　もしかしてあなたは私をきらっているのだろうか？」

「そりゃこっちの台詞じゃん！」

もしやからかわれているのではないかと、春鹿は訝しむ。

だが、レーシャは心外そうな顔つきになった。

「私があなたのことをきらっていると？　それは甚だ誤解だ」

「……ホントぬぃ？」

信号が青になって、二人同時に走り出す。

「真実だ。むしろ、私はあなたのことを仲間だと認識しているが？」
レーシャが意外なことを言い出す。
仲間？　なんの仲間だろうか？
学年も違えば、レーシャは実戦部隊のメンバーでもない。
走りながら、答えを探しあぐねていると、レーシャが続けた。
「あなたは諸葉のことが好きなのだろう？」
春鹿はその場でずっこけそうになった。
「キュウニナニイダスンダヨ！」
「違ったのだろうか？　静乃から私はそう聞いていたのだが」
（あの女ァ……）
春鹿はこの場にいない静乃の、しれっとした憎たらしい顔を思い浮かべ、恨んだ。
そうしている間にも、レーシャはクソ真面目な口調でさらに続ける。
「違うのならば失礼した。私は認識を改めよう。諸葉は私や静乃、及び嵐城サツキと四門マヤのものなのだと」
「あ、や、うん、アタシも別にきらいってわけじゃないし、一応、輪に入れて欲しいな、うん」
春鹿は年下相手に愛想笑いを振り撒き、懇願する。
「承知した。ならばやはり、私とあなたは仲間同士というわけだ。これからも、ともに諸葉を支え、戦っていこう」
「納得……」
たったこれだけの話にどこまで振り回されたのかと、春鹿は走りながらため息をこぼした。
同時に理解する。
レーシャの他人行儀に見えるところは、相手をどうこう思っているとかではなくて、単にこの融通の利かない性格に起因するものでしかないのだろう、と。
理解すると、ちょっと意趣返ししたくなる。
狼狽させてやりたくなる。
「じゃ、じゃー、レーシャは諸葉のこと好きなんかー？」
「好きだ」

「マジで!?」
即時断言され、春鹿の方が狼狽させられた。
「この世界より諸葉の方が私は大切だ」
「そこまで言いきる!?」
春鹿の方が赤面してしまう。
欧米の方ってちょっと大胆すぎじゃないかしら、と島国根性丸出しで思ってしまう。
でも、レーシャは平然と走りながら、
「諸葉がもしいなければ、私はとっくに世を儚んでいただろう。ならば、私にとって諸葉はこの世界以上の存在だという理屈になる」
大真面目に説明をした。
春鹿は、自分が告白されたわけでもないのに、妙にドギマギしてしまう。
（かきたてるわー。こいつチョー保護欲かきたてるわー。諸葉が大事にしてるのもわかるわー）
羨ましい。
自分もこんな風になれたら、諸葉に大事にしてもらえるだろうか？
いやさすがにそんな勇気ない！
……でも、勇気がないとか言ったら、背中を押してくれた送戈さんに顔向けできないな。
（ううん……！）
春鹿は内心葛藤し、走りながら頭を抱えてグイングイン振る。
そんなみっともない真似をしても、隣にいるのが全く気にも留めないレーシャなのが救い。
彼女は前を向いて走るだけ。
「諸葉を好きだという気持ちでは、私は誰にも負けない」
そんなことまで言いきっちゃう性格なのだ。
きっと、恐い恐い静乃の前でだって、こいつなら平然と。
昔の春鹿なら「勝てるわけねー……」と足が止まっていただろう。
でも、もう違う。

（……勇気を出すのと、人を羨んだり真似したりするのは違うじゃん）
（そう、自分はどんな一歩を踏み出し続けるかだろ！）
春鹿は頭を抱えるのはやめ、自分の頬を叩いた。
「おまえの気持ちも、アタシたちが仲間だってのも、よくわかった」
「意思疎通に成功できて、私はうれしい。あなたは嵐城サツキとは違うようだ」
「でも、同じ諸葉を支える仲間でも、戦場であいつとコンビ組むのはアタシだから」
負けないぞと意思表示をし、走るスピードを上げて、レーシャの前に出る。
「それは聞き捨てならない」
しかし、すぐにレーシャも速度を上げて、追いついてくる。
「あいつのスピードに合わせられるのは、アタシだけなんだからな！」
春鹿はまたアクセル踏んで、引き離す。
「私たちは皆、違う個性を持っているというだけにすぎないだろう」
レーシャがグンとスピードアップして、追い抜かれる。
「それって《異端者（ノウフィクス）》戦で役に立たない言い訳？」
追い抜く。
「六翼会議（シックスウィング）との戦いで、遅れを取るつもりはないが？」
追い抜かれる。
「魔剣を発動したら、諸葉まで《源祖の業（アーツ）》使えなくなるじゃん」
追い抜く。
「その条件下でも戦えるようにと、私と諸葉は定期的に特訓を重ねている」
追い抜かれる。
ジョグングのはずだったのが、しまいには二人とも全力疾走だ。
互いに意地を張るように、口論しながら抜きつ抜かれつを繰り返す。
しかし人間の体力は無限ではなく、次第に足がもつれだす。
先にバテたのは——春鹿だった。

「ちっくしょおおおおっ」
公園を突っ切る途中でへたり込み、両手両足を投げ出すように、仰向けに転がる。
レーシャもゼィゼィと肩で息をしていたが、まだ自分の足で立っていられる余力がある。
（鍛えてんなあ、こいつ……）
春鹿より一時間、早起きして走り込んでいるのは伊達じゃない。
（考えてみりゃ当然か……）
魔剣の力を発動中は、レーシャは生身で敵と戦わなくてはいけないのだから。
春鹿はかつて「速いだけ」と侮られたし、落ち込んだものだが、見方によってはレーシャも「通力（ツール）と魔力（マナ）を封印できるだけ」と言える。でもレーシャは腐らず、そこから先の、才能には頼れない部分の努力も、ちゃんとしているというわけだ。
身体的にはハンデを抱える、女の身で。
だから恐らくは、血のにじむ思いで。
（すげえ奴じゃん）
胸にストンと落ちるように、レーシャへのリスペクトを自然と抱いた。
春鹿はようやく少し息が整い、上体だけを起こす。
「あー。さっきの撤回する」
宣誓するように、右手を挙げた。
「撤回とはなんの話だろうか？」
「図に乗ってた。アタシはまだ、おまえや静乃の仲間って言えないって気づいた」
「それはなぜだろうか？　私には資格充分に思えるが」
「レーシャがそう言ってくれんのは、うれしいけどな」
春鹿は考える。

石動が制定したリーグ戦において、参加を禁止された学生が三人いる。
諸葉はもちろん、ランクAの静乃。

そして、このレーシャだ。
まさに別格扱い。
勝負が成立しないほど圧倒的な強さを持っているから、出てくれるなと頼まれたわけだ。
「もしアタシが明後日の試合で石動先輩に勝って、ランクAになったら、二学期のリーグ戦は出られないって聞いた」
実際、ラスボスを倒して、最後のお宝もゲットしたなら、出る意味がないと言えるし。
学生のうちにランクAまで登りつめるような化物は、出てくれるなというわけだ。
「そしたら胸張って、おまえらの仲間ってことで」
「……私にはよくわからないが、あなたがそう言うのなら、きっとあなたにとって大事なことなのだろう。私は応援するし、待っている」
レーシャが手を伸ばして、宣誓している春鹿の手をつかんだ。
「あんがと。がんばる」
春鹿もその手をつかんで、立ち上がった。

同日。昼休憩。
サツキは今日も静乃と誘い合わせ、マヤと合流し、中庭の芝生で昼食を広げていた。
諸葉は購買の行列に巻き込まれてか、まだ来ない。
春鹿とレーシャを誘ったら、意外な返事がきた。なんと二人で学校を抜け出し、牛丼を食べに行くらしい。
「あの人たち、いつの間に仲良くなったのかしら……」
芝生に横座りし、モソモソとサンドイッチを食べていると、
「なあに、サツキ？　大好きな先輩をとられたみたいで寂しいの？」
静乃がもうすかさずといった様子で、からかってくる。

図星を指され、サツキは紅潮させられた。
これはやり返すしかない。
「フンッ。あんただって大好きなお友達をとられたみたいで、寂しーんじゃねーですかー？」
「ええ、そうね。寂しいからサツキに慰めてもらうわ？」
静乃がころんと、サツキの膝を枕に寝転がる。
「あんた、なにやってるワケェェェェェェェェ!?」
いきなり甘えてくる、予想だにしない静乃の狼藉に、サツキは鎖骨の辺りまで赤くなった。
「静乃お姉さんが一枚上手なのです」
なんて、おにぎりを食べてるマヤにまで笑われる始末。
真下から静乃にいたずらっぽい目で覗き込まれて、サツキはあわあわと身をよじる。
「あら？　そんなに照れなくてもいいじゃない？」
「てててテレ臭いんちゃうわっ」
「じゃあ、なあに？」
「あたしの膝枕は諸葉専用なの！　だから領土侵犯されて怒ってるワケ！」
「諸葉のものは私のものでもあるから、今日も世界は平和ね」
「なんでそんな理屈になるのよぉ!?」
照れ隠しもあって、サツキはいつも以上のテンションでかんしゃくを起こすが、静乃は楽しそうに、また煽るように、膝枕の上でごろごろしてみせるだけ。
「いいから出てけーーーーー！」
サツキはその場で立ち上がって、強制排除を執行する。
静乃は勢いで芝生の上を転がっていき、「きゃー」としらじらしい悲鳴を漏らす。
「あたしはあんたなんかに構ってるヒマなんてないのよ！」
サツキは芝生に座り直すと、食べかけのサンドイッチをガツガツ平らげる。
「あーあ！　モモ先輩たらナニ考えてんのかしら！　今はレーシャなんかより、あたしとのチームワークを大事にする時期でしょうに！」

八つ当たりするように二個目へ手を伸ばし、それも平らげにかかる。
「……真面目な話、特訓は進んでるのかしら？　調子はどう？」
起き上がった静乃が髪を整えながら、訊いてきた。
サツキは喉を詰まらせかける。
ここのところ、対石動戦の猛特訓のため、諸葉はずっとサツキと春鹿で独占している。
そのことで静乃は文句一つ言わないし、あてつけがましい邪魔もしてこない。
それはサツキも正直、感謝しているところで。
だから、誠実に進捗報告をしなければと思った。
「あんま芳しくない……」
顔をうつむけて打ち明ける。
「試合はもう明後日なのにです？」
「うん……」
顔をうつむけたまま、うなずく。

この八日間、どんな特訓をしていたかと言えば、諸葉に石動の戦闘スタイルを模倣してもらって、それを仮想敵とする実戦トレーニングであった。
諸葉は決して人真似が巧いわけではないが、要するに強くて隙のない白鉄として振る舞えれば、練習台として的外れではないので、それでOKというわけだ（石動より弱い白鉄だったらこの役は務まらない）。
ただ、石動の《螢惑》だけは真似しようがないので、どうすればいいか、静乃やマヤを交えて話し合っていた。
手を挙げたのはマヤだった。
「諸葉が懐中電灯を持って、点けた時のライトに当たらないよう特訓するといいのです」
この冗談みたいなアイデアを、諸葉が採用して試してみることに。
右手にサラティガ、左手に懐中電灯を持って構えた諸葉を見て、
「やっぱジョークでしょ、こんなの！　笑っちゃうから真面目にやりましょうよ」
とサツキなんかはお腹を抱えてしまったのだが、

「まあまあ、一回やってみようぜ？」
と諸葉に諭され、渋々やってみた。
ライトを防御するのは「冗談じゃないわよ！」と叫ぶほど難しかった。
春鹿は照らされたらアウト、サツキは照らされた時に《耐魔通》に集中できてなかったらアウト、というルールでやったのだが、これがもう諸葉にアウトとられまくり。
厳密には雷の速さは、光の速さに比べればずっと遅いのだが、それでも「いきなり飛んでくる稲妻」というのがどれだけヤバい代物か、実感、痛感させられた。
詠唱もスペリングも必要な、闇術の電撃とは脅威の質が全く違う。
連日の猛練習のおかげで、なんとかコツがつかめてきているが、本番で完璧に防御できる自信があるかというと……。

「勝率五十パーとかノンキなこと言ってた、自分に喝入れてやりたい……です……」
サツキは悄然となって、内心を吐露する。
でも――
「し、自信家のサツキお姉さんとは思えない発言なのですっ。明日アルマゲドンなのです！」
「そこまでびっくりすることないでしょっ」
目を真ん丸にするマヤに、サツキは額へ青筋を浮かべる。
一方、静乃が宥めるような口調で、
「そんなに落ち込まなくてもいいじゃない。所詮、ランクBなんてその程度でしょ」
「あんたケンカ売ってるワケェ!?」
サツキがつかみかかると、静乃は「きゃー」としらじらしい悲鳴を上げて抵抗する。
つかませまいと、サツキの両手を両手でガードしながら、静乃はあろうことか「ほらほら、どーよ」とばかりに胸を突き出してくる。
「何よ自慢がましい！」
サツキは吠えたが、事実そこには渓望の的でしかないものが二つある。

一つは豊かな乳房。
もう一つは、ランクAと証明する名札だ。
「二一一（黒A）　漆原静乃」
進級後、静乃の胸についたその名札を見て、サツキは何度も目をこすったものだ。
取っ組み合いを続けながら、サツキは静乃を糾弾する。
「そもそもあんた、どうやってランクAになったワケ!?」
「コネと賄賂で」
「ずぅーるーっ。あんたには恥ってもんはないワケェ!?」
「ちゃんとあるわよ。いつまでもランクAになれないと恥ずかしいしい」
「殺すわよ!?」
「サツキにも口を利いてあげましょうか？」
「そう言ってまた一千万とか言うんでしょ!?」
「出世払いでもいいわよ？　ランクA《救世主》なら卒業後のお給金もいいし、利子をつけてもすぐに返せるわね、お得な話だと思わない？」
「黙れアクマ！」
「きゃー。オニに食べられちゃうー」
とうとうサツキが後から羽交い絞めにしてやると、静乃は楽しそうな悲鳴を上げた。
そんな二人を、マヤが見かねたように、
「サツキお姉さんも落ち着くのです。白騎士機関のランクAは、お金なんかで買えるほど安くはないのです」
大人びた口調で諭してくる。
こんな小さな子どもに道理を説かれ、サツキは憮然となりながら、
「落ち着いていられるもんですか。こんなランクA、ランクAって自慢されたら、誰だって悔しくなるでしょ？」
「まーやは別にならないのです」
「そりゃあんたは弱っちいし、元から上なんて目指し――」
「まーやももうランクAなのです」

「!?　!?　!?」
サツキは思わず静乃を放してしまうほどの衝撃を受け、目を白黒させた。
「ナニソレ……？　オコサマの間じゃ、そーゆージョークが流行ってるワケ？　あはは……笑えないんですケドォ……あはは……」
サツキが口元を引きつらせていると、マヤが余裕の態度で認識票を差し出してきた。
制服を着てないマヤには名札はないから、これで確認しろということだ。
したろうじゃないの！　とサツキは目ン玉ひん剝いて凝視する。
認識番号の下に「亜鐘学園預かり（黒A）　四門摩耶」と、ちゃんと彫金されてる。
「!?　!?　!?」
サツキはもう一度、目を白黒させた。
その表情のまま、マヤのことをもの言いたげに見つめる。
「まーやは《移ろいの門》を習得したご褒美で、認定されてたのです」
エヘンと天使ちゃんは可愛く威張った。
瞬間、サツキの脳裏に理解の稲妻が走る。
言われてみれば、これは道理だ。
先代校長の万里はそこまで強い黒魔ではなかったそうだが、ランクAに認定されていたのはその、《異端者》討伐に極めて有効的な《固有秘法》が使えたからだ。
現在、《移ろいの門》は二人目の使用者が現れたために、《固有秘法》認定から外されたが、だからといってその戦略的価値は一向に減じられたわけではない。
むしろ六翼会議のテレポート奇襲戦略に対抗できる切り札として、より高まった感すらある今日このごろ。
マヤがランクA認定を受けたのも、一切不思議ではなかった。
「ぐぬぬ……あんたら二人してえ……いつの間ぬぃ……」
サツキは嫉妬の権化となって、静乃とマヤをかわるがわる睨めつける。

静乃はしれっとした表情で、マヤは天使の笑顔で、棘だらけの視線を受け流す。
その小憎らしい態度が、サツキの堪忍袋の緒をブチ切った。
「いいわよ！　見てなさいよ！　明後日にはあたしもランクAになってるんだから！」
「そう。一千万用意する覚悟ができたわけね？」
「ワイロじゃなくて石動先輩ぶっ倒してなるって話よおおおおおおっっ」
サツキは天に向かって雄々しく咆哮した。
もう勝つ。
絶対勝つ。
弱音なんて吐いてらんない。
そんな意気込みが、絶叫となって青空を衝く。
ちょうどその時、ようやくパンを買った諸葉がやってきて、
「おーい、サツキー。あんま不穏なこと、でっかい声で叫ぶなよ。石動先輩に聞こえたらアレだぞ？　おっかないぞ？」
なんて忠告してくれたが、サツキは耳を貸さない。
「兄様！　今から特訓してちょうだいっ」
諸葉の手を引っつかんで、武道館の方へ連行する。
「無茶言うなよ、俺まだメシ食ってない」
「メシと妹、どっちが大事なワケ!?」
「その質問は卑怯だぞっ？」
「じゃあパン食べながら、あたしに稽古つけてよっ。それなら両立できるでしょっ」
「パンはガソリンじゃねえんだっ。俺はゆっくり味わいたいんだよっ」
「ハイハイ、『救われてなきゃいけないんだ』とかいま流行ってるそーゆーやつね！　その前に救うべき可愛い存在がいるでしょうが」
「だからその言い方は卑怯――」
そんな口論をしつつも、ろくに抵抗しない優しい「兄」を引っ張っていく。

背中からは、優しい「友人」二人が優しい眼差しで、見送ってくれていることにも気づかず。
もっとも。
気づいていたらサツキは、「優しい言い方でハッパかけてよ！」と、猛抗議しただろうが。

SECTION 6

第六章　いと眩きプラーナ -Challenge 1-

石動との、挑戦試合の日がついにやってきた。
サツキも春鹿も、赤い目をして寮の食堂で鉢合わせる。
「も〜、なによ〜モモ先輩？　緊張して眠れなかったワケェ？　も〜、しっかりしてよね〜。それであたしのパートナーを名乗るなんて、頼りなさすぎなんですケド〜？」
「鏡見て来い」
トレイを持って、二人で配膳待ちの列に並ぶ。
「モモ先輩なんかどうせランクBが器なんだし、あたしと違って気負う必要ないでしょ？　破れかぶれの気持ちでいってくれりゃいいのよ」
「おまえが足引っ張るんじゃないかって、不安で眠れなかっただけじゃん」
「ムカッ。モモ先輩の短い足なんて、引っ張り辛いだけですケド」
「おまえだって自分がランクAの器だっつんなら、ランクB止まりのアタシに胸貸してくれよ。あ、貸すほどはねーか！」
「モモ先輩ほど小さくないわよ！」
「あたしだってサツキほど短くない！」
朝ご飯をトレイに載せてくれる、おばちゃんがドン引きする勢いでディスり合う。
周りの女子生徒たちも、
「とうとう仲間割れ!?」
「こんなんじゃますます勝てないよ」

「プレッシャーが高じて……ストレスって恐いわね」
と、騒然となる。
でもその実――サツキが春鹿と憎まれ口を叩き合うのは、日常茶飯事だ。
口を動かしている間に、緊張がほぐれてくる。
いつもの調子が戻ってくる。
（モモ先輩がパートナーでよかった！）
と心底思う。
メンタルコンディションが上向き、午後の挑戦試合への集中力も高まっていき、午前の授業はあっという間に終わった。
昼休憩になって、春鹿と話し合う。
「あたし、お昼は抜くね。空腹の方が動ける気がする」
「賛成。そうしよ」
これが通常のスポーツや格闘技なら、ゼリー等で栄養補給した方がいいに決まっている。
だが、サツキたちが使うのは《源祖の業》であり、通力だ。
事実上の、諸業の直弟子であるサツキと春鹿は「気がする」の大切さを疑っていない。
一緒にご飯をと誘ってくれた諸葉や静乃に断って、試合直前の最後の時間を春鹿とすごす。
特に何をするでもない。
会話を交わすでもない。
芝生の日陰に寝転んで、下草を靡かせる風を受けて、試合の時間が来るのを静かに待つ。
体を水平にして大地と重力を感じていると、胸の器に闘志のガソリンが満たされたまま、平らかになっていくような心地を覚える。
そして、予鈴が鳴り響いた。
どちらからともなく立ち上がって、更衣室へ向かう。
「行くぞ、サツキ」
「おっけい！」

それ以上の言葉はもう、二人の間に必要なかった。
実際、着替えて向かった第三武道館で、先に通路で待っていてくれた諸葉が、サツキたちを見るなり言ったのだ。
「二人ともいい顔してますね」
それ以上、注意点のリマインドも追加のコーチもすることなかった。
代わりにサツキは「兄」へねだる。
「ねえ、諸葉の認識票、借りていい？」
「そりゃいいけど。俺と違って、サツキは誰のだろうとバッチリ剣が出せるだろ？」
「いいの、いいの。お守りみたいなもの♥」
諸葉が懐から出したのと、自分のとを交換する。
彼の名前が彫金されたそれを、両手で大切に握りしめる。
隣で春鹿が物欲しそうにしていたが、早いもの勝ちだし譲れない。
「行ってくるね、兄様」
「おー。行ってくらー」
「がんばって。二人とも」
見送られてアリーナに出る。
ぐるり、三百六十度を囲む、見学席は既にいっぱいだった。
生徒たちがサツキらの姿を見るなり、火が点いたように沸く。
誰もが大声を張り上げて、一人一人の言葉が判別つかないほど。
でも、全力でサツキ・春鹿コンビを応援してくれる気持ちが、しっかりと伝わってくる。
石動は去年、絶大な人気を誇っていたから、この大声援は多分に判官贔屓だろう。
正面、最後列の辺りには静乃もいて、マヤとレーシャが手を振ってくれていた。
諸葉も最前列に着席し、見守ってくれる。
最高の舞台だとサツキは思った。
「最高の舞台じゃん」と春鹿が独白した。
サツキは左手を挙げ、春鹿が当意即妙に右手を打ちつけてくる。

二人のハイタッチを見た生徒たちが、一層沸き立つ。
でもまだ最高潮ではなかった。
石動迅の入場で、ついに達した。
十九の青年とは思えぬ沈毅な表情、威風、足取り。
まさに亜羅学園の王様だ。
久しぶりに見る戦闘服姿が、やはり彼に一番似合っているのはこの格好だと思い出させる。
アリーナの中ごろへやってくると、十メートル以上の距離をとって、サツキたちと対峙した。
大きい。
石動の身長が一九〇を超えているのは知ってたが、果たしてこれほどだったろうか？
対戦相手として向き合うと、これほどのプレッシャーがあるものか？
石動は春鹿を見て首肯し、サツキを見て首肯し、厳かに訊いてくる。
「何か、前口上の類は必要かね？」
サツキは震えた。
武者震いだ。
返事代わりに、二人揃って剣を顕現する。
石動もまた堂々と広刃の剣を顕現する。
サツキの通力は黄金色。
春鹿の通力は蒼玉色。
石動の通力は雷光色。
それらを確認し、石動とともに入場した審判役の田中太郎が、右手を高々と掲げる。
斬るように振り下ろす。
サツキが、春鹿が、ずっと溜めていたものを通力という家で爆発させた。
大方の予想を裏切るように、サツキが春鹿の前に出る。

思いきり地面を蹴って、パワーもスピードに加えて、砲弾の如く突撃する。
七つある《神足通》の派生が一、サツキが得意とする《武曲》。
その突進力をも剣の威力に上乗せして、打ちかかる。
（まずは全力で小手調べよ！）
気勢を上げるサツキ。
石動は八相に構えていた剣で、サツキの剣を迎え撃つ。
圧倒的な攻撃力を宿した、鋼と鋼のぶつかり合い。
「……おう！」
石動の気炎とともに、サツキの方が跳ね返される。
両足を踏ん張って、コンクリートの床を擦りながら後退させられる。
パワーではこちらが勝っているはずなのに、なんという《太白》の冴えか。
サツキが歯を食いしばっている間に、すかさず春鹿が攻めかかる。
その姿は三つにわかれ、前方左右斜めから石動へ躍りかかった。
対する石動は冷静そのもの、豪快な横薙ぎで二人の春鹿を同時に斬り払う。
途端、春鹿の姿が霞んで消える。
やられたのは《巨門》による残像。
本物の春鹿が、剣を振りきった石動のわずかな隙を衝き、二の腕を斬り裂いて、後方へ残心。
しかし、石動の反応も、喘嗟に二の腕へ《金剛通》を集中させる技術もさすがだった。
春鹿はかすり傷しか与えられない。
石動は悠然と剣を構え直し、残心で距離をとった春鹿へ追撃する――も、これまた残像！
春鹿は早や石動の背後へ回り込んでいる。
予測のうちだったか、石動は全く動揺を見せず、剣を振る体勢から流れるように姿勢を変え、左掌を振り向きざまに突き出し、《螢惑》の雷を見舞う。
ついに撃ち放たれる、石動の真骨頂。
蛇のようにのたうつ紫電が、春鹿を焼いた――ように見えたが、またも残像！

「やるね」
石動が片眉を跳ね上げた。
対レナード戦で触発され、《神足通》を極めることに今まで以上の情熱を燃やすようになった春鹿は、今や《巨門》のダブルを自由自在としている。
以前はできなかった、同時に二つの残像を作る業も完全習得した。
攻防バリエーションの進化は、留まるところを知らない。そういって過言でない。
二重残像で石動を翻弄した春鹿は、極限まで姿勢を低くし、地面を滑るように走ると、すれ違いざまに石動の足を刈り払う。
それで転倒しなかったのはさすがだが、よろけて体軸をブレさせる石動。
サツキは見逃さなかった。
通力を刀身からぶっ放して、まず《太歳》での牽制。
石動は体勢を崩しながらも《太歳》で合わせ、相殺しにくる。
サツキの放った金色の暴風と、石動の放った雷光色の迅風が正面衝突する。
勝ったのは石動の《太歳》。
サツキのそれを食い殺し、まだ足りぬとばかりに襲いかかってくる。
吹きつける暴風を前にして、
（悔しいけど、承知の上よ！）
サツキは臆せず逆風の中へ突っ込んだ。
全身に《金剛通》を漲らせ、破壊の嵐に抗う。
既にサツキの《太歳》と打ち合った分、やはり威力は弱っている。耐えられる！
「たあああああっ」
暴風の中を突っ切って、サツキは真っ向斬りかかった。
これが石動の意表を衝く奇襲となる。

春鹿の見事な《巨門》と、不意打ちが二つ重なる。
（もらった！）
サツキは確信を込めて、上から剣を打ちつけた。
すんでのところで石動の剣にガードされる。
「惜しい！」
思わず声を出しながらも、そのまま強引に剣を振りきるサツキ。
体を崩され、意表を衝かれたところへの強振。
さっきとは逆に、石動が弾き飛ぶ番だった。
「ああ。見事な連携だね」
石動は剣でガードした体勢のまま、宙でたたらを踏むような格好をした。
しかし、その顔に焦りの色は全くない。
バタつく足の爪先が、わずかでも地面をかすると、そこへ通力を集中させ、コンクリートを削ってより多くの摩擦力を得、無理矢理ブレーキをかける。
弾き飛ばされても最小限の距離で踏み留まる。
おかげで、もっと遠くまで吹っ飛ぶと思って仕掛けていた、春鹿のアテが外れる。
ダッシュと刺突で、最短距離を最速で打ち抜くが——貫いたのは石動の残像。
しまった、と春鹿は目を見開く。
石動は残像を作るほどの速さで、回避に必要な最低限の距離だけ横スライドする、いぶし銀の動きを見せる。
だからこそ、残心も徹底する春鹿の、突き終わりの無防備な背中へと剣を打ち込める。
春鹿のお株を奪うような、石動の《巨門》。
終わった！　と見学席で誰かが叫んだ。
くっきりと聞こえた。
——その時にはもう、サツキが動いている。
「させない！」
叫びながら石動の太刀筋に割って入り、アーキュールの刀身で受け止め、春鹿を守った。

そのまま鍔迫り合いの流れになるが、咄嗟の割り込みで姿勢ができてないサツキも、春鹿が気になる石動も、長く続けたいものではない。敵味方でもその辺り、阿吽の呼吸というものが戦場には存在する。示し合わせたように互いに押し合い、間合いを切って仕切り直す。
ホっとしかけた……その時、サツキは気づいた。
こちらを見る石動の、まるで射殺すような強い眼差し。
ゾっとする。
連想的に、サツキの脳裏にこの九日間の厳しい特訓が思い返される。
反射的に、全ての通力を守りに回す。
刹那遅れて、石動が《霊感》を放ち、サツキは撃たれる。
痛い。痺れる。その当たり前の感想が頭に浮かぶくらい、ちゃんと耐え凌げている。
強烈なオゾン臭が立ち込め、喝を入れるようにサツキの鼻腔を衝いた。
特訓の成果を噛みしめつつも、生きた心地がしなかった。
サツキ、春鹿、ともに石動から大きく距離をとったまま、しばし仕掛ける機会を見失う。
石動は剣の切っ先でコンクリートの床を叩き、カランと鳴らすと、刀身を担ぐように、どっしりと八相に構え直した。

〈途端——
武道館が内側から割れるような、大歓声が巻き起こる。
そう。
試合前、サツキ・春鹿コンビの応援で騒然としていた生徒たちは、いざ試合が始まると、二人の戦いぶりに見惚れ、呑まれ、押し黙り、呼吸するのも忘れるようになっていたのだ。
それくらい、サツキと春鹿、そして石動の戦いはハイレベルだった。
実戦部隊による《異端者》討伐の様子は、ライブ映像で観戦できる。でも、あれは味方が順番に大技をぶつけ続けるような戦い方になるので、迫力はあっても見入られはしない。
対人戦の——それも強者同士の、ちょっと目を離した隙に生死がわかれるような、そんな緊張感に満ちた戦いは、

また別次元の世界だった。
しかもサツキたちは基礎技から高難度技まで、大小、硬軟、臨機応変に駆使しているのだ。
まさに技巧の極致であり、生徒たちからすると眼福以外の何物でもなかった。
これほどの戦いを目の当たりにするのは、ここにいる大半が初めての体験。
今世はもちろん、前世でも見た経験がある者は、ほんの一握りにすぎない。

にわかに活気づいた見学席。
でも、サツキの耳には何も届いていない。
気にしている余裕がない。
開幕してわずかの、濃密すぎる攻防のおかげで、気力がごっそり削られている。
たったあれだけの時間で、肩で息をさせられている。
それは向こうで、石動を挟み込む位置で剣を構える、春鹿も同じだった。
（も～、さっきの不意打ちで仕留められていれば～～）
サツキは歯噛みせずにいられない。
でも、頭では違うとわかっている。
不意打ちが二回重なった程度で、サツキらを勝たせてくれるほど、石動迅は弱くないということだ。
それでこそ、黄金世代の中にあり、一際燦然と輝いた隊長なのだ。
諸葉をして「強い」と言わせる男なのだ。
（とにかく仕切り直しよ……）
虚勢を張らず、大きく深呼吸を繰り返して、サツキは体力回復にかかる。
諸葉の戦前予想通り、石動から攻めてこないので、そこは焦らなくていい。
無論、だからと言って、油断していいわけではない。
石動が絶対に奇襲してこないとまでは断言できないのだ。
《内活通》の体力急速回復を謳めてまで、守りに全通力を回す。
頭の中で石動の奇襲パターンを想定、整理し、「《破軍》が来たらこう返す」「《蜃惑》が来たらこう返す」「春鹿が

《破軍》で狙われたらこう動く」「春鹿が《蜃惑》で狙われたらこう動く」と、おさらいしながら警戒する。
結って、そういう地味な徹底が、サツキの構えから隙をなくする。
石動もまた隙なく八相に構えながら、
「腕を上げたね、二人とも。それに、よく対策を練ってきたようだ」
心の通った声音で褒めてくれた。
生来、おしゃべりなサツキだが、今は返事をする余裕がない。
ようやく上がっていた息が、落ち着いてきたところだ。
石動を挟んで、対角線上に距離をとる春鹿が「もっかい行くぞ」とアイコンタクト。
サツキが首肯してみせると、スーッと向かって右に動き出す。
それに合わせて、サツキは左へ。
石動を中心に挟んだまま、二人で円を描くようにして攻める機を探る。
一方、石動は全く動じることなく、泰然と剣を構えたまま。
おかげでサツキは、周回して彼の真後ろをとれる。
（ここよ！）
左拳に破壊の通力を込めて、地面に叩きつけた。
コンクリートの床に大きな亀裂が走り、まるで土竜のように石動の足元へと伸びていく。
五星技の一つに、《辰星》という技がある。
触れたものを通力で操る、念動力のような光技だ。
部屋の壁に触れて、三メートル先にある電灯のスイッチを入れたり、そういうことができる。
丈弦が特に得意とし、見栄えがいいので、サツキは憧れて練習もした。
しかし、通力を器用に操るのはどうにも向いてないようで、うまくいかない。
それでもめげずにがんばること一年、触れたものを操る代わりに、触れたところから破壊の力を伝えて、指向性を持たせて伸ばすという妙な業を会得してしまった。

それがこれだ。
指向性を持つ破壊の通力が、コンクリの床を伝い、石動の足元を背後から襲う。
「む……」
コンクリが割れるものすごい音がするから、不意打ちにはならない。
軽々跳んでかわされる。
しかし、気を引かせることには成功した。
すかさず春鹿の姿がかき消え、石動に肉薄し、斬りかかる。
《巨門》のダブルによって、彼女の体が三重に見える。
しかもさっきより余裕を持って攻めたおかげで、前方左右斜め後からと、包囲した形。
どれが春鹿の本体かはある種、運任せだがこの角度からの攻めだと、石動は二人を纏めて斬るのは難しいはず。
かつて〝閃剣〟レナードは、スピードと《神足通》の妙技だけで石動と伍したと聞く。
春鹿はどこまでその域に近づけただろうか。
バートナーの答え合わせを、サツキは凝視する。
「ぬん……っ」
石動の強い息吹が木霊した。
と同時に、ごく弱い電撃が彼を中心として、八方にほとばしった。
それは春鹿の《耐魔通》でも、軽々凌げるほどの威力でしかなかったが。
顔を顰めさせる程度には、無害ではなかった。
（こんな方法で炙り出されるなんて！）
サツキが驚愕した時にはもう、石動は動いている。
電撃を浴びても平気な顔の二体を無視し、残る一人に広刃の剣をフルスイングする。
春鹿は刀身を使い、ギリギリでガードしたが、石動の膂力と《太白》の威力は凄まじかった。
野球ボールのように打ち上げられ、天井まで一直線に飛ばされ、叩きつけられ、建材にめり込んで、そのまま落ちてこない。

サツキは思い知らされた。
自分たちがそうであるように、石動もまた敗戦を敗戦のままにしておかない。
今の《蠱惑》の使い方はまさに、愚いつきでできるものではない。
電撃の威力を犠牲に、咄嗟の反応からの浅い集中でも《蠱惑》を放てるように特訓した、明確な残像攻撃対策。
春鹿がレナードにどこまで迫れたかと、答え合わせしようという、その意識が甘かった。
レナードに次ぐ勝とうかと、答え合わせをした石動の覇気に比べれば……。
「僕には止まっている時間なんてないんだ」
石動の声が聞こえた。
サツキのすぐ目の前で。
春鹿を天井に叩きつけて動けなくするや否や、《破軍》を使って一瞬で間合いを詰めてきた。
さっきまで遠くにいたはずなのに、なんとバカげた光景か。
化かされたような感覚か。
石動の広刃の剣が、大上段から振り下ろされる。
「あああああああっ」
サツキは恐怖に駆られ、条件反射的に剣で受け止める。
ギリギリそうできたのは、諸葉のコーチの賜物でしかない。
体勢は不十分。
衝撃を殺しきれずに弾き飛ばされ、アリーナを囲うコンクリート壁に打ちつけられる。
建材にめり込むほどではなかったのは、サツキと春鹿の通力の質差。
それでも息ができなくなるほど、背中を強打される。
膝をつかされる。
痛みで泣いてる暇はない。
その間に石動も《破軍》を使った反動から立ち直り、とどめを刺そうと襲いかかってくる。
涙を拭う余裕もなく立ち上がり、迎え撃つサツキ。

壁際に追い込まれたまま、石動の剛剣を叩きつけられる。
身の毛もよだつような袈裟斬り。
ねじ伏せられるような幹竹割り。
紫電を帯びた横薙ぎ。
刀身の隅々までを雷光色の通力で充溢させ、止まることなき連打を浴びせられる。
迅い。剛い。迅い。剛い。迅い。剛い。迅い。剛い——

「す、すげぇ……」
「百地と嵐城ちゃんが、まるで子ども扱いじゃない……」
「お、黄金世代の人らって、こんなにヤバいんすか……？」
「バカっ。石動サンが別格なんだよ」
「……がんばれ……嵐城ちゃん……」
「そうよ、がんばれ！　せめて一矢……！」
「一矢とか言ってんじゃNe!!　まだ勝負は終わってZeiだろガッ」
「でも……」
「もう……」

石動の一太刀、一太刀が必倒の闘気を漲らせ、サツキを敗北へと追い立てていく。
逆に、サツキの闘志は恐怖で完全に凍り付いていた。
この太刀を受け損なったら終わりだ。
絶叫じみた悲鳴をわめき散らし、縮こまった腕でわけもわからず剣を振って、ガードし、石動の打ち込みから逃れ続けることしかできない。
そのガードも十全とは、とても言い難い。
石動の《太白》の威力を殺しきれておらず、剣と剣を打ち合わせるごとに、余波が衝撃となってサツキへと叩きつけられ、全身に細かな傷が刻まれていく。

助けは来ない。
春鹿はどうなったのか。
確認しなくちゃ。
でも、顔を上げる余裕がほとんどない。
石動の剛剣から目を逸らす余裕がほとんどない。
恐怖で正常な思考力が失われていく。
代わりに敗北の予感に侵食される。
そして、ついに石動の剛剣を受け損なう。
衝撃で横へと弾き飛ばされる、アーキュール。
サツキの掌から、柄の感触が消失する。
もうほとんど反射的行動——それこそ無心になって。
サツキは飛んでいくアーキュールを追いかけた。
石動から目を離し、無防備な体勢をさらす愚を、犯してしまったことにも気づかない。
でも、その思いきりのよさが、追いかける勢いが結果として、とどめを刺そうとした石動に空を斬らせ、自身を救う。
その瞬間は間違いなく、サツキの目にはアーキュールしか映ってなかったのだ。
だからこそといえる。
サツキは思い起こすことができた。
回転しながら宙を舞う、その剣が、諸葉の認識票から顕現したものであることを。
宝物のように美しい刀身の中に、サツキは最愛の「兄」の姿を見た。

つかみとる。
同時に回れ右をし、石動に対して構える。
（忘れるんじゃないわよ、サツキ。あんたは今、諸葉の名前を背負って戦っているのよ）

力及ばず、負けるのはいい。
自分はまだまだ、発展途上なのだから。
諸葉だってきっと怒らない。焦るなって言ってくれるだろう。
でも、無様な負け方は話が違う。
諸葉に顔向けできない。
（忘れるんじゃないわよ、サツキ。あんたはいつも、諸葉に何を習っているワケ？）
追撃してきた石動と、再び刃を交えながら、自分に問う。
自ずと、縮こまっていた体から、無駄な力みが消えた。
強張っていた腕が伸びた。
大事なのは、自然体。
（だよね、兄様……！）
サツキの視界が一気に開ける。
聴を無駄に動かさなくても、周りが見えるようになる。
無論、石動の太刀筋もちゃんと見える。
「……む」
剣を合わせる石動だからこそ、サツキの変化を鋭敏に感じ取っただろう。
小さく唸った。どこかうれしげに。
だからといって、手心を加えてくれる人じゃない。
受けただけで痺れるような、剛剣の連打は止まらない。
サツキの防戦一方は変わらない。
でも、押し負けなくなった。

石動の斬撃の、刃筋までもきっちり見切り、こちらも刃筋を立てて受け止める。
《太白》の威力も《太白》で以って完璧に殺す。
アーキュールの刀身に、金色のオーラが烱々と満ちる。
どんな猛攻も受け凌いでやるぞという闘志を、剣に宿すが如く。
（ええ、いくらでも粘ってやるわよ！）
だって。
広く見えるようになったサツキの目には、建材の奥に埋もれていたはずの春鹿が、《文曲》の歩法で天井を足場に変え、ぶら下がるように立っている姿が映っていたから。
そこから春鹿が真っ逆さまに落下するのと。
殺気を感じとった石動が、大きく跳んで後退るのとは。
同時だった。
天井からの奇襲は空を切り、しかし春鹿は身軽に宙返りを打ってサツキの傍に着地する。
「お待たせ」
「そうでもないわよ」
「よく言うよ、ボロクソじゃん。さっきまで大ピンチだったじゃん」
「モモ先輩こそ、鏡見なさいよ」
強がりと憎まれ口を叩き合う。
春鹿もまた、さっき天井まで打ち上げられ、叩きつけられた時のダメージは相当のものだったようで、満身創痍となっていた。
「しゃあないじゃん。相手、石動先輩なんだし。覚悟の上だろ」
「そうね。覚悟できてなきゃ、こんなとこに立ってないわよね」
でも、サツキも春鹿もまだなんとか、気力は残っている。
不敵に笑い合うことができている。
「んじゃまあ、もっとボロクソになりに行こーぜ」
「あたしはもう一発ももらう気はないんですケドォ？」

「あ、アタシだってそうだよっ。おまえに気を遣ってやっただけだよっ」
強がりと憎まれ口が止まらない。
だってこれが、サツキと春鹿の間の励まし合いの形なのだから。
春鹿が敢然と突撃を再開する。
サツキはその背を追いかけた。

そんな二人の姿を、石動は感慨深く見つめていた。
自分が剣を構えていることを、ほんの一瞬、忘れそうになった。
サツキも春鹿もズタボロなのに、この戦いは最初から分が悪いとわかっているはずなのに、全く諦めた様子がない。
ランクAにならんがため、より高みを目指さんがため、二人が何を思って、願って、懸命になっているのか、石動は知らないし、どうでもよい。
頂へと手を伸ばそうとする、その美しさよ。
尊さよ。
それらの前に理由は要らない。
がむしゃらになって駆けてくる、真に迫るその姿に、心打たれずにいられない。
諸葉は常日ごろから、「通力の色を見ればわかる」と言う。
石動にそんな眼はないし、境地に辿り着けるとは思えない。
でも。今。
サツキの纏う金色と、春鹿の纏う蒼色の、通力の眩さときたらどうだ！
石動は胸が詰まりそうになる。
彼女ら二人が証明し、体現し、教えてくれているからだ。
石動がより高みを目指し、遮二無二、至難へ挑もうとすることは、決して愚かでも見苦しくもないのだと。
（君たちに感謝する！）
心の中で叫んだ。

（だからこそ、僕は最後まで全力を尽くそう！）

心の中で咆えた。

春鹿がトップスピードに乗って、真っ直ぐに突きかかってくる。

石動の弱電撃を用いた返し技に懲りてか、もうダブルの残像を先出ししてはこない。

ならば、その刺突を喰らう前に叩き伏せん。

石動も剣を横薙ぎにして迎え撃つ。

いつもより手首や肘、膝から力を抜き、体を柔らかく使う。

撫でるように剣を振るう。

剛剣こそ己が信条だった。

ほんのわずかでも威力を高めようと、意識して《太白》を磨いた。

でも、それだけではレナードには通用しなかった。

ゆえに編み出した、謂わば柔剣。

この斬り方なら威力が落ちるが、斬った後の隙がほとんどなくなる。

ゆえに、横薙ぎを叩きつけた春鹿は残像であったが、石動はそのまま次の斬撃へとなめらかに繋いだ。

体ごと回転し、背後に回り込んでいた春鹿へ、そのまま叩きつけた。

それもまた残像だったが、石動の柔剣はまだ止まらない。

（ここだ！）

春鹿がダブルを使いきった。

そのタイミングで、また背後をとろうとした彼女へ《太歳》を撃ち放つ。

線で斬るには難しいスピードスターを、面で攻める。

雷光色の通力を乗せた暴風が、牙剝くように荒れ狂う。

「先輩！」

こちらの隙を虎視眈々と窺っていたサツキが、パートナーの窮地と見て取って動く。

破壊の風の中へ突進し、春鹿の前に出て、タフネスに優れる自らの肉体を風よけとして使い、春鹿を守ろうとする。

称賛に値する勇気。仲間想い。

いい判断だった。

でもだからこそ、この流れは全て石動の読み通り。

「おお……ッ」

声に出して咆えた。

そして、自らが放った《太歳》の風の中へ突進した。

ただ進むのではない。

縮地の歩法を使って、瞬きのうちに駆けるのだ。

今――目前には身を投げ出したサツキがいて、その背後には庇われる春鹿の姿がある。

この距離、この位置関係ならば、《破軍》ですれ違いざまにまとめて討てる。

（これで終わらせる！）

刀身に雷を走らせる。

《破軍》中に《雷惑》を放電できるほどの通力はさすがに持ち合わせていないが、体や剣にある程度帯電させることならば可能。

石動は神速の世界に入り、刹那の世界の住人となる。

稲妻の軌跡を曳いて、石動の剣が唸りを上げる。

速さを悟らせぬほどのその迅さに、サツキは反応すらできない。

結界内ではあったが、石動は敢えて刀身の腹を使って、抜き胴を打ち込む。

続いて春鹿にも。

（完璧に決まった――）

剣を振り抜いた格好で駆け抜け、《破軍》で無茶をした足が止まり、膝が崩れかける。

切っ先を床に突き立て、刀身を支えにして堪える。

（――そう見えたのに）

石動は、柄を握る両手をまじまじと見つめた。
確かに、二人まとめて打ったと思ったのだ。
でも、一人分の手応えしかなかった。
後方でサツキが倒れる音がする。
同時に。
石動の首筋に、冷やりとした感触。
すぐ背後に立った春鹿が、刃を突きつけていた。
石動は瞑目し、問いかける。
「……《巨門》のトリプルかね？」
春鹿は喜びを噛みしめるように答える。
「うん。とっておきの奥の手」
面でなら当たると思った《太歳》すら、春鹿は残像を作る速さで回避していたのだ。
最後に読みを覆された。
「……参った」
石動は満足して嘆息し、剣の柄から手を離したのだった。

たちまち見学席の半分で、今日一番の歓声が爆発する。
「スゲエエエエエエエエエエエ！　やりやがったぜえええええ！」
「本当にすごいよ……百地さん……」
「《巨門》のトリプルとかマジありえねえっ」
「ランクAでも使える人はほとんどいないんだろ？」
「あの先輩、つい一年前はスピードしかないって笑われてたのに……」
「ヤバイ……なんか、あたし、感動してきちゃった……！」

その一方で、残る半分の生徒たちは、戸惑いの声を漏らしていた。

彼らの視線はアリーナの一点に注がれている。
石動の紫電剣で打たれ、昏倒したサツキにだ。
「これ……決着、どうなるの……？」
「コンビの片方が戦闘不能になった時点で、負けだよね？」
「校長先生は隊参したけど……」
「その前に嵐城ちゃんがやられちゃってるし」
もっともな疑問。
春鹿のすごさに興奮していた者たちにも、彼らの当惑は伝播し、見学席が静まっていく。
ざわざわと、不穏な気配だけが立ち込める。

疑問に答え、判断を下すのは、審判の田中の務めだろう。
だが石動は片手を挙げて、アリーナ中央に進み出ようとした田中を制した。
代わりに答える。
生徒たちが固唾を呑んで、静聴する。
「元々、二対一の変則試合だ。リーグ戦のルールを枷子定規に適用する必要はないだろう」
だから、これは二人の勝利だ――と。
続けようとした石動に、
「……待って……」
かぼそい声で異議を唱える者がいた。
石動はもちろん、館内にいる全員の目がそちらに向く。
サツキだった。
未だ倒れ伏したまま、痺れたまま、意識だけは戻ったようで、石動の方を睨むように見つめている。
泣き濡れ、だがなお燃えるような瞳で、訴えてくる。
「モモ先輩はランクAにしてあげてください……。でも……あたしはダメ……っ」
精一杯に声を絞り出すような、その強い口調に石動も春鹿も動揺させられた。

「嵐城君は最後に倒れてしまったからかね？　関係ない。君の戦いぶりだって、ランクAに値すると僕は思う」
「そうじゃん！　アタシ一人で勝てたわけじゃないじゃん！」
「……ダメ」
「気持ちはわかる。だが、君は立派だった。どうか卑下しないでくれたまえ」
「おまえ頭かたすぎっ。元々、ハードル高えよって話だったじゃん！　それでも勝てたんだから、細かいことなんか気にすんなよっ」
「ダメ!!」
サツキは絶叫して顔を伏せた。
震えているのは、痺れのせいなわけがない。
冷たいコンクリートの床に着けた額が、こすれて痛いだろうに。
嗚咽を堪え、でも堪えきれず、啜り泣きになる。
春鹿はもう言葉を失っていた。
石動は、うつむいたまま震え続ける、サツキの小さな背中を見つめ、考える。
自分はこの勇敢な少女に何をしてやれるだろうかと。
でもすぐに、してやれることなどほとんどないことに気づいた。
この少女はもう、石動の助けなんて何も必要がないほど成長しているのだから。
去年の春、実戦部隊に入れてくれと、意気込んで叫んだあの時とは、もう別人なのだから。
――いやそれどころか。
勝利を誇ってもなんら虚栄ではない戦いをしておきながら、自分が自分を許せないというこの少女の、克己心と何より誇り高さに、石動の方が敬服を覚えずにいられない。
だから、
「……わかった。嵐城君が再び鍛え、次のリーグ戦で挑戦してくる日を待っているよ」
石動はそうとだけ声をかける。
道さえ用意しておけばきっと、彼女は独りで立ち上がり、もう一度かかってくるに違いない。
「もっとも、僕だって今の僕のままのつもりはないから、簡単ではないと愚うがね？」

同情は一切かけない。
でも、ただ突き放すのではない。
それが石動にできる、たった一つ。
果たして、サツキは顔を上げてくれて、
「あぃ……！」
真っ直ぐに射るような、挑戦者の目で応えてくれた。
その喜ばしい返事に、石動は深くうなずいた。
春鹿は逆に不服そうだったが、口を挟むほど野暮ではない。
生徒たちは、この試合の顛末がどこへ向かうのかと、石動に注目し、息を潜めたまま。
水を打ったような武道館の中。
見学席のどこかで、誰かが拍手を始めた。
熱烈なというよりは、静かで、勝者と敗者を分け隔てなく讃え、励ますような、優しい拍手。
一人がすれば、皆が続く。
さざ波のように広がっていき、広い館内を埋め尽くす。
穏やかで。
温かくて。
でも鳴りやむまで、随分と時間がかかった。

かくしてサツキの挑戦試合は幕を閉じた。
春鹿と親しい女子たちがもう、アリーナに雪崩れ込んでいる。
他の者たちも大興奮の様子で入場し、彼女らを囲む。
あの石動迅に続く史上三人目の、学生でありながらランクAに到達する偉業を成した、小さな勇者を褒め称える。
かつて諸葉は「ソフィー先輩より、モモ先輩の方が先にランクAに届くと思っている」と、マヤに漏らしていたらしい。

その見立ては正しかった。
ずっと一緒にがんばってきた彼女の、努力が報われてよかった。
春鹿への万歳がやまないアリーナから、サツキは背を向け後にする。
まだ痺れた体で、歩くこともままならず、通路を目指して這って進む。
悔しくないと言えば大嘘だ。
涙を堪えきれず、顔を上げることもできず、這って、這って、這って。
不意に、誰かが近づく気配がした。
春鹿を祝いに行く者がいるのと同様に、自分を慰めに来てくれる者もいたのだろう。
「……ごめん。今は一人にしておいて」
顔をうつむけたまま懇願する。
「いやだ」
返事は明快だった。
サツキはいきなり抱え上げられ、ごろんとひっくり返され、お姫様抱っこされる。
諸葉の胸の中へすっぽり収まる。
驚き半分、納得半分。迂闊だった。頭が回ってなかった。この「兄」が真っ先に自分のところへ、来てくれないわけがないのに。
「痛いだろ？　すぐ外に運れてってやるからな」
「う、うん。ありがと」
「あとな、俺は慰めはしないぜ？　ミスらしいミスは一回しかなかったし、致命的になる前に挽回できてた。要するにこの結果は実力通り、当初の予想通りってことだ」
「……うん。わかってる」
誰より痛感している。
だから、慰めて欲しくなんかない気分だったのだ。
諸葉はちゃんとわかってくれてる。
「だけど、それと悔しいって気持ちは別だよな」

諸葉がさらに、ぎゅっと抱きしめてくれる。
サツキの顔が彼の胸に押し当てられて、周りから見えなくなる。
思いきり泣けと、言ってくれているのだ。
「……っく……」
サツキはしゃくり上げた。
もう我慢できなかった。
あんなに頑張ったのに。
諸葉や静乃たちもずっと協力してくれたのに。
「……ふっ……ふぐっ……うっ……うぅっ、うっ……うぁぁ……うぁぁあ、あああああああああああああああああああああああああ」
諸葉の胸に顔を埋め、大声で泣く。
武道館の外に運んでもらって、ケガが嘘のように消えても、ずっと泣き続ける。
でも、諸葉が思いきり泣かせてくれたおかげで――
放課後には、春鹿に「おめでとう」と心から言えた。

SECTION 7

第七章　石動迅の求めるもの -Challenge 2-

実戦部隊の皆による、春鹿の昇格お祝い会が終わったのは、夜の九時だった。
ディナーを食べてカラオケに繰り出したのだが、サツキがマイクと春鹿を離さず、延々とデュエットを歌い続けた。
これではどっちが主役かわからないが、サツキもがんばったことには違いないので、マイクの独占を誰も咎めることなく、声と手拍子でにぎやかした。
解散となって、皆が寮へ引き上げる一方、静乃は家に電話をする。
執事の立村に車で迎えに来てもらい、後部座席で揺られる。
スマホを使って諸葉や、ごく親しい者たちとメールのやりとり。
週末に改めて静乃の家に集まって、お流れになったリーグ優勝祝いと合わせたパーティーを開こうと、段取りをつける。
静乃の――というか理事長である兄の家は、学校から遠い。
小さな山の中腹にある。
夜の暗さのせいで、余計に景色が代わり映えしない山道を、立村の安全運転で走っていると、眠気を覚えてしまう。
全身に軽い疲労と倦怠感。
（カラオケではしゃぐ趣味はないのだけれど）
自覚なくテンションが上がっていたのだろうと、あくびを噛み殺しながらぼんやり考える。
と――

ゆっくり運転をしていた立村が、乱暴に急ブレーキを踏んだ。
「ど、どうしたの？」
さすがの静乃も驚きを禁じ得ない。
「それが……人が……」
穏やかな老執事が肝を潰したような顔で、片言になって答える。
見れば確かに、真っ暗な山道の先、ヘッドライトに浮かび上がった青年の姿が。
車の行く手を遮るように仁王立ちする、危険な男。
石動迅、であった。
（どうしたのよ……いったい……）
らしくない石動の所業に、まだ驚きつつ静乃は後部ドアを開ける。
「お嬢様っ？」
「知り合いよ。あなたは先に帰っていて」
「し、しかし……」
「お願い」
車を降りながら重ねて命じると、立村は渋々といった様子で走り去る。
そのテールライトが完全に消えるのを確認して、
「こんなところで女の子を待ち伏せだなんて、趣味が悪いのではなくて？」
静乃は皮肉をぶつける。
敢えて余裕ぶった態度をとっているが、頭の中は嫌な予感でいっぱいだ。
闇の中に溶けるような、真っ黒なスーツを着た石動を見ていると、胸がざわつく。
反射的に、懐の認識票を確かめてしまう。
彼我の距離は十五メートルほど。絶対に近づかない。
石動がにこりともせず答えた。
「言い訳はしないよ。君に用があってね」
「だったら、電話なりメールなりで、呼び出してくれればいいでしょう？」

「僕が呼んで来てくれるほど、君は義理人情に厚くないだろう？」
「……そうね。さっきのは失言だわ。忘れて？」
他人に言われて自分の性格のことが腑に落ちる、ばつの悪い思いをしながら、
「で？　用件って何かしら？」
「もう少し待ってくれたまえ。あと一人来る」
（……いったい誰よ）
その答えはすぐにわかった。
通力を纏った輝きで、夜闇を切り裂くようにして、レーシャが走ってやってきたのだ。
既に魔剣レプラザンを顕現させ、抜き身で駆けつけるものものしさ。
およそただごとではない。
「大丈夫か、静乃！」
あちらもこちらの存在に気づくと、滅多に聞けない大声を出す。
その逼迫した声音に、静乃はますます嫌な予感を覚えた。
「私は大丈夫だけれど……どういうこと？」
「それは私が聞きたい。静乃がここで窮地に陥っていると、石動迅にメールをもらったのだ」
《神足通》で傍まで来たレーシャが、ケイタイの画面を見せてくれる。
静乃の胸騒ぎが強くなった。
これはもう予感なんてものではない。はっきり、嫌な状況だ。
「説明してもらえるかしら、校長先生？」
何を企んでいるのかと、毅然として詰問する。
今度は、石動は即答した。
「日本支部において――灰村君を除けばだが――最も強い《救世主》といえば、ここにいる二人の誰かだと思わないかね？」
ただしその内容はもったいぶったものであり、静乃を苛立たせる。
「だとしたら何か？」

「僕は誰が一番かはっきりさせておきたいんだ」
その台詞を聞いた瞬間、静乃はもう認識票を抜いて、竜杖ナーグラヴィッツを顕現させた。
戦闘服を着ていないのが、ひどく頼りない。
その不安を押し殺し、杖を地面に突き立てるように構えると、
「私はそんなつまらないことには、興味はないわ？」
呆れを声のトーンへ滲ませて返答する。
レーシャは言うまでもないとばかりに、鋭い眼差しで石動を睨むだけ。
二人で臨戦態勢をとる。
石動がいつ実力行使に出るかもしれない。
緊張で静乃は、背筋が凍るような思いだった。
果たして、石動は瞑目すると、
「そうか……それはすまなかった」
あっさりと踵を返した。
何の未練もなさげに、泰然とした足取りで去っていく。
でも、静乃は安堵できない。
「ならば仕方ないね。僕は己の証明のため、灰村君と刃を交えに行くよ」
その台詞を看過できない。
「ないですって？」
自然と声音が変わっていた。
冷え冷えとして、聴く者を凍てつかせるように。
石動も足を止める。
その背中へ向かって、静乃はなじりつける。
「自分が何を言っているのか、わかっているのかしら？　諸葉を裏切り、あまつさえ害そうと？　冗談でも許されることではないわ？」
「僕はしっかりと理解した上で言っているし、冗談のつもりはない」

「不遜！」

静乃は石動の妄言を一語で切って捨てるように、声を荒げた。

愛する王の絶対不可侵を、土足で踏みにじろうとする咎人を前にし、静かにキレていた。

「ならばどうするね？」

石動も半身だけ、悠々とこちらを振り返る。

「どれだけ身の程を知らぬことを言っているのか、じっくりと教えてあげるわ？　諸葉がわざわざあなたと戦ってあげる栄誉を、恵んであげる必要なんてない。あの人の手を煩わせるまでもない。あなたはここで、地を這いずればいい！」

静乃は声も高らかに詠唱とスペリングを開始する。

もう待ったを聞く気はない。

守りはレーシャとナーグラヴィッツに任せた。

「緩る――」

氷の閨よ　雪霊よ　そなたの息吹を貸しておくれ　死よりも静けく凍えさせておくれ

盛者必滅は世の摂理　神の定め給うた不可避の宿命

水が低きへと流るるが如く　全ての命を奪っておくれ

氷の第三階梯、《凍てつく影（フリーシング ノエイト）》。

静乃が最も得意とする術で、威力と完成までの速度がバランスよい。

闇術は使用に際して制限が多く、また時間がかかる。

その分、威力は光技と比べてケタ違いだ。

第三階梯ともなれば、当たりどころ次第でランクAの白鉄を、一発轟沈させる威力がある。

石動はランクAでもトップのトップとはいえ、タフネス自体はそうでない。

一方、静乃の魔力はランクAの中でトップもトップだ。

ただではすませないと、静乃は怒りとともに荒れ狂う冷気を撃ち放った。

石動はその場に突っ立ったまま、なぜか動こうとしない。

静乃からすればお構いなし。知るもんか、だ。

諸葉、雷帝、ルイーズといった常識の埒外たちを除けば、世界最大級の威力を持った《凍てつく影（フリーシング ノエイト）》が直撃する。

何を考えているのかさっぱりわからないが、石動はひとたまりもないはずだ。

はずなのだ。

「さすがは漆原君だね。期待通りの威力だよ」

石動の声が、立ち込める冷気と夜闇のヴェールの中、朗々と響く。

平然というわけではなかったが、虫の息にはほど遠い。

せいぜい子どものケンカで「いいの一発もらっちまったぜ」という程度のトーン。

真白き冷気が風で晴れた後、石動はなおその場に立っていた。

膝を折るでもなく。

スーツのあちこちを覆う霜を、厄介そうに手で払いながら。

なぜその程度ですんでいるのか？

驚愕する静乃の目に、まざまざと映る。

石動が纏う、まるで黒い雷の如き不気味なオーラが。

「あれは……何……？」

静乃は震え声で、隣の少女に問いかけた。

「私にもわからない。少なくとも、石動惑の通力はあんな色をしていなかった」

その通りだ。

彼の通力は烈しい雷光色。

あんな禍々しいモノではない。

二人の少女が同時に独白する。

「あれは通力というより――」
「まるで呪力」
自分たちが口にした言葉に、ハっとさせられる。
「いかにも」
石動が言葉短かに肯定する。
そして、左手をこちらに突きつけて、黒い稲妻を撃ち放ってきた。
「下がって！」
身を盾にするように前へ出るレーシャ。
恐らくはレプラザンのスイッチを「オン」にしたのだろう。自動的に氷の竜へ変身し、主を守るナーグラヴィッツがなんの反応も示さない。
周囲の通力と魔力を全て喰らう、レーシャの魔剣が低い唸り声を上げる。
石動の《獄惑》がどんなに強力であろうと例外はない。
でも、この黒雷は喰らえなかった。
「危ない！」
レーシャが翻身し、押し倒すように静乃を庇ってくれたのと。
黒雷が急に、弧を描くように軌道を変えて、上空へと飛び去ったのは同時だった。
石動には最初から当てる気はなかったということだ。
（仮にしてくれたわね……っ）
静乃は仰向けに倒れたまま、背中の冷たく硬いアスファルトの感触と、覆いかぶさるレーシャの温かく柔らかい感触に挟まれながら、戦慄と屈辱で息を荒くしていた。
折り重なった二人の胸が、大きく上下する。
「なぜ……人間が……呪力を扱えるのだ！」
呼吸を乱したまま、詰問するレーシャ。
反射的に使ってしまったが、呪力で産んだ雷ならば、レプラザンの能力で喰らえないのは道理。つまり石動の言葉は嘘ではなかったのだ。

「僕たちが呪力と呼んでいるものは、人の魂の奥底に眠る力だったからだ。いま思うに通力も魔力も、呪力の一側面なのかもしれない」
石動の言葉にレーシャは愕然となると、
「通力も……魔力も……呪力の一側面……」
己の剣に見入りながら反復した。
にわかに固まってしまった彼女の下で、静乃は身をよじり、這い出しながら、
「そんなまともじゃない力を使って、平気でいられるとでも思うの？」
「わからない。でも僕は躊躇う気はないよ」
石動はいつも通りの飄びた声で、沈鬱な口調で答えた。
「長生きをしたいわけじゃない。強くなりたいんだ」
静乃はますますゾっとさせられる。
彼が冷静に、平静に、異常で歪つなことを言っているのだとわかったからだ。
いっそ、おかしくなってくれていた方がマシだった。
「怖い思いをさせて、君たちには申し訳なかったね。この力を試したくて、全力を出してもらいたくて、いろいろと小賢しいことをした」
石動が粛然と謝罪する。
そして、一瞬で姿を消した。
《神足通》を使ったのか、もっとおぞましい何かを使ったのかは、静乃にはわからない。
歯噛みしながらスマホを取り出す。
次はきっと石動は、諸葉を襲うはず。
（諸葉に限って相手が誰だろうが、万一なんてあるはずもないけれど……）
連絡だけは急ぎ入れなければ。
そう思って電話アプリを開けど、住所録から諸葉の番号を辿ろうとする指が、誤入力ばかりしてしまう。何度もしくじり、うまくいかない。いつもはこんな、タッチパネルとフリック入力特有のもどかしさなど、静乃は無縁のはずなのに。

「……エレーナさんは学校に報せてもらえるかしら？」
悪戦苦闘しながら、レーシャにも指示を出す。
その時だった。
「待ってくれないか」
山道の脇に広がる、林の奥から声が聞こえたのだ。
いったいいつからそこに潜み、様子を窺っていたのだろうか？
ぎょっと注視した、静乃とレーシャの視線の先。
二人もよく知る青年が、闇の中から浮かび上がるように現れた。

亜輝学園から南の方角にある、漆原家所有の山を立ち去った石動は、とって返すと、今度は北にある山々へ向かう。
（忙しいことだ）
と自分でも苦笑しながら。
静乃にはああ言ったが、石動とて呪力を濫用する気はない。
並程度のスピードしか出せない《神足通》では、移動にけっこう時間がかかる。
腕時計を見て、時間十分前には間に合いそうだと確認し、北へ一路。
亜輝学園が山岳戦シミュレーションの特訓に使う林の中へと、石動は辿り着いた。
以前ならば軽く息が乱れているところだが、呼吸することを捨てた今の彼には、そんな生理現象は起こらない。
無言で待つことしばし。
辺りを囲む暗い山林の一点に、気配が生まれた。
「こんばんは、石動様。今宵も時間十分前でございますね。感服いたしました」

テーブレコーダーのように毎夜、同じ挨拶をしながら、ヂーシンが姿を見せる。
「申し訳ありませぬが、ワタシも暇ではございません。早速、一手ご指南つかまつりましょう」
一字一句、少しも変えようとしない、杜撰な台詞。
口調こそ慇懃だが、まるで心のこもっていない言葉。
石動としてもそれでよかった。
この男と、心の交流を育むつもりはないのだから。
石動もまた「お願いする」と毎度、同じ台詞を返せばいいだけだから楽だった。
でも今夜は――いつもとは違う言葉を口にする。
「結構だ。指南は必要ない」
「なんと」
ヂーシンが意外そうに、眉を跳ね上げた。
「お疲れでいらっしゃるとか？」
「いいや、むしろ気力は充実しているよ。とてもよい一日だったのでね」
瞼を閉じずとも脳裏に浮かぶ。
分の悪い戦いに臆さず挑む、少女たちの眩さが。
倒れ伏してなお、こちらを射抜いた、サツキの燃えるような瞳が。
あんなものを見せられたら、触発されずにはいられない。
そう、石動の心に火が点いてしまったのだ。
「君とは今日限りのつき合いにさせてもらおう」
石動は認識票に通力を注ぎ、広刃の剣を顕現させた。
黙って、切っ先を突きつける。
抜き身の戦意を態度で示す。
「あいや、何故でございますかっ？」
ヂーシンは道化のような大仰さで、目を剝いてのけ反った。
石動は沈殺に答えるのみ。

「無論、僕は天をつかみたいんだ。君とて、そこの住人の一人だろう？」
「だからワタシをお斬りになると？　そんな御無体な！」
自分の体を抱いて、被害者ぶるジェスチャーをするヂーシン。
「ハハ。人をモルモットにするのは無体ではないのかね？」
でもこの男を相手に、石動はチラとも罪悪感を抱かない。
「僕は最初から、君を斬ると決めていたんだよ。ただし、もっと確実な力を身につけてから挑戦しようと思っていたがね……。そんな、いつまでかかるともしれないものに思考を委ねて。停止させて。いったい何が挑戦だろうか？　それがどれだけ頭の固い、つまらない考えだったかを、きょう彼女らに教わったんだ」
「お待ちくだされ、石動様。打倒・灰村様の宿願はどうするおつもりですか？」
「それも無論、正々堂々と挑むつもりだ。でも、物事には順序というものがあるだろう？」
「お甘い……。認識も覚悟も何もかもお甘い。そんなことで、あの竜を討てるものですか！　どうぞ御一考くだされ、石動様。今こそ申し上げましょう――白騎士機関など抜けて、六翼会議と手を結ぶのです。さすればワタシどもが、貴方様の悲願成就のために、あらゆる支援を約束いたしましょう」
「断る」
ヂーシンの言葉を、石動は一笑に付した。
あちらも負けずと嘲笑を浮かべ、
「やれやれ、まったく貴方様ときたら偽善者だ。敵であるこのワタシと通じ、尸解の邪法に手を染めておきながら、何を今さら正義漢ぶるおつもりですか？」
「確かに僕は、強くなるための手段を選ぶ気はない。でも、その強さの使い道は選ぶ」
以前、石動は弟に手を焼かされた時、諸葉に向かってこう言ったことがある。
弱い者いじめをする人間の気持ちがわからない、と。
本当に共感できない。
だって――

「――強くて悪い奴を叩き伏せる方が、絶対に気持ちいいだろう！」

と、石動は昂然と言い放った。
たちまちヂーシンが大げさに頭を抱える。
「理解不能でございます！」
「いいさ、君とわかり合う気なんてこれっぽっちもないんだ。でもまあ、君への義理でこう言おうか。今までありがとう、師父」
石動は真心のこもっていない、慇懃無礼な口調で吐き捨てる。
もう剣を八相に構えて突撃する。
全身と刀身を満たすは、黒い稲妻の如きオーラ。
「あいや、これはお株を奪われましたなあ！」
ヂーシンも白々しく嘆いてみせると、飄然と拳を構えた。
全身から立ち昇るは、翡翠色の通力。
黒雷と翡翠の鬩ぎ合が衝突する。
上段から剛剣を叩きつける石動。
刀身が、夜闇よりなお黒き、軌跡を曳く。
ヂーシンは躊躇なく左手を伸ばし、剣の腹を撫でるようにして軌道を逸らす。
徒手空拳で剣撃をいなす、化勁の極意。
本当に目が見えないのかと、誰もが疑問に思うだろう妙技。
（見事だけれど、見飽きもしたね）
幾度となく指南で手合わせしたのだ、そう簡単にこの男を斬れないことは、石動もわかっている。
（でも、これはどうかな？）
ゆえに石動は、手合わせではわざと見せなかった攻撃法を用いる。
いなされ、空を斬った剣を振り下ろした体勢から、強引に腰を突き上げるようにして、右足を蹴り上げる。
「ほ！　このワタシを相手に拳法ごっこでございますか？」
ヂーシンは余裕で右膝を上げ、膕でブロックする。

受け止めたその腿が、衝撃で「く」の字に曲がった。
「ほう……っ」
石動の驚りが、これほどの威力を持っているとは思ってもいなかったのだろう。
軽い感嘆の声を漏らしながら、ヂーシンが後方に吹き飛んでいく。
石動は手加減せず、また隠し玉を用いる。
突き出した左掌から、一条の黒い雷を撃ち放つ。
吹っ飛ばされて宙にいるヂーシンでは、これをかわすのは楽ではないはず。
「便利な《蠱惑》をお持ちで……！」
悪態をつきながら、背泳ぎのような手の動きで、両手から《太歳》を放つヂーシン。
コツがあるのか、発生させた暴風をジェット機の如く推進力に使い、空中機動を行う。
諸葉が得意とする、《引き裂く突風》を使ったそれと似た発想。
右に飛んで、黒雷をかわそうとするヂーシン。
石動は突き出したままの左手を、払うように右手へ振った。
それで、宙を走る一条の稲妻が急カーブを描く。
まるで黒い蛇の如く、獲物を追いかけ、魔雷の牙を突き立てる。
「なんと、自在でございますか！」
ヂーシンは詠嘆しつつも、宙で両手両足を畳むようにし、《耐魔通》に集中する。
黒い閃光ともいうべき、摂理から外れた現象が炸裂してヂーシンを焼く。

かなり後に、その存在を知った馬迭戈が、利かん坊を目の前にしたような苦笑を浮かべて、裏光技と名付け、分類したその《蠱惑》である。

さすが一発で倒せるような可愛い相手ではなかったし、軽い火傷程度のダメージしか負わせられなかったが、それでもヂーシンに――あのルー・ヂーシンに、石動は一撃喰らわせることに成功した。
突き出していた左手で、ぐっと握り拳を作る。

「いやはや、石動様もお人が悪い。ワタシに内緒で、そこまで呪力を扱えるようになっていらっしゃったとは」
ヂーシンが演技丸見えで、もうダメだとばかりに膝をついて、荒い呼吸をする。
石動は油断せず、距離をとったまま八相に構え直し、
「自主的なよき弟子だろう、我が師父？」
「打を教えても歩は教えない』『歩を教えれば、師が打たれる』と申します。ワタシ、赤ん坊に歩き方を教えて差し上げるような、殊勝な真似をした覚えはないのですが」
「ご謙遜だな。君は我が校に欲しいほどの教師だよ。何しろ他人を持ち上げるのが上手い。ほら、『褒めて伸ばす』というやつさ」
「石動様こそ御冗談が上手でいらっしゃる』
ヂーシンは軽薄に笑ったが、
「冗談ばかりじゃないさ。僕は忘れていない」
石動はゆっくりとかぶりを振った。

呼吸を止め続けてしばらくして――
石動は肉体の内部感覚に、違和感を覚えるようになった。
自分の体が、己のものではないような感覚というか。
丈弦に皮肉られたように、己の全身が死体になってしまったような感覚というか。
とにかく、一時は運動失調にも陥りかけた。
しかし、肉体に違和感を覚える一方で、本来は影も形もなく、認識すらできないはずの、己の魂というものを、確かに内側に存在する力として、感じとれるようになった。
最初は錯覚かと思うほど漠然としていたが、日に日にはっきりと意識できた。
それからはヂーシンに受けた説明通り、己の魂へ意識的にアクセスし、呪力を汲み出す訓練を始めた。
それは、全身にある七つの概念上の門から、通力を汲み出す感覚とは、似て非なるものだとヂーシンは言っていた。
でも、石動は同じ要領で、するりとできた。

「どうやら、石動様には異才がおありだったようで」
とその時のデーシンの、心底驚いた顔が忘れられない。
この男からどれだけ盗み出せるかと、常に注視していた石動は、百の軽口の中にあった一の真実を見分けることができた。
この男をしてここまで言わせる「異才」とやらを信じ、呪力を扱う特訓にのめり込んだ。
「まあ、君は憶えてないだろうがね」
他人と誠実に向き合うことを知らない男だから、善いも悪いも自分が誰にどんな影響を与えたか、頓着できないのだろう。
「ええ、ええ、さっぱりですとも」
デーシンはどうでもよさそうに、へらへら笑った。
石動もそんな彼を侮蔑するように、頬を吊り上げる。
しばし剣ではなく言葉を交えているのは、石動に余裕があるからでは無論ない。
へたり込んでいるデーシンから、まるで打ち込む隙が見い出せないのだ。
この男は、ありていに言って小物である。
しかし、その強さは本物。
いや、化物なのだ。
「大変に遺憾でございますが、しんどい戦いをせねばならぬようですなあ」
飄然と立ち上がるデーシン。
おどけるような仕種で、再び拳法の構えをとる。
それを見ただけで、石動の体中の汗腺が開いた。
まるで挨拶でもするかのように、軽く挙げられた左掌。落ち着きなさいと宥めるように、下を向く右掌。両脚はゆったりと、おどけるように軽く前後へ開く。
たいして強そうに見えない、道化が戦う演技をするようなその構え。
それが、この世に十人と持ち得ない、神がかり的な強さを体現している。

かつて石動はデーシンとの戦いに挑み、一瞬、一発で木端微塵にされた。
しばらくは悪夢にうなされるほど、構えたその姿が脳裏に焼き付いた。
思い返すたび、あたかも目の前にデーシンがいるかのように、びっしょりと汗をかいた。
今――
あの時の恐怖が再び蘇る。
否、あの時以上の畏怖が込み上げ、石動の肝を震わせる。
幾度と指南を受け、手合わせしたところで、慣れたりできるものではなかった。
なぜなら〝牢獄の魔女〟の館で戦ったあの時も、指南の時も、つい先程までも、デーシンはろくに本気ではなかったと、わかったからだ。
今、この、デーシンの構えこそが、本気で本物の構えだった。
ランクS《背教者》のランクSたる所以だった。
見た目に全く違いがないのに、今の石動にはわかる。感じとれる。
だから、
（僕はついに、この怪物を本気にさせることができた……！）
恐怖で震えると同時に、心奮えた。
天上の化物が、石動を決して路傍の石ではないと認めたのだ。
これが奮えずにいられるか。
歓喜せずにいられるか。
（でも、まだだ。まだ満足してはダメだ。僕が目指すは、まだこの先だろう！）
石動はもう一度、己の八相構えをディティールまで見直すようにした。
全身と刀身に走らせる黒雷の輝きを、一層強くした。
いま自分にできる最大だと確認して――
挑戦者として突き進み、問合いを詰めにかかった。
まず牽制で、遠間のうちから裏の《太歳》を斬り放つ。
剣を横薙ぎにすると、呪力の乗った太刀風が自然現象に反して収束し、薄く横に長い、魔風の大鎌と化してデー

シンへと飛んでいく。
「面白いものですなあ！」
ヂーシンは《金烏》の業で左掌に通力を集めると、その大鎌へ自ら手を伸ばし、ひょい、と横へいなしてしまう。
魔風の鎌は軌道を大きく変えて飛んでいき、何本もの木を切り倒すのみ。
しかし、そのくらいの芸当はしてのけると石動だってわかっている。
間髪入れずに接近し、袈裟斬りを見舞う。
その直進スピードは諸葉や春鹿に匹敵するとまでは言わずも、本来ならば出せない領域。
呪力を扱う愚童はいろいろあるが、まず単純にパワーとタフネス、スピードが増加した。殊にスピードが補われたのは、石動の攻めのスタイルに大きな幅をもたらしてくれた。率制からすかさず斬りかかる、このコンビネーションアタックはまさにそう。
だがさすがはヂーシン、流れるような左腕の動作で、それもいなしてくる。
石動もいなされる覚悟で剛剣ではなく、撫でるような斬り方――柔剣を用いていた。
威力を犠牲に隙を減らし、流れるように絶え間なく、斬り続けることを可能とする剣術だ。
太刀筋を逸らされても、すぐに修正し、次の斬撃に繋げる。
ヂーシンがまた左手の《金烏》で捌いてくる。
石動が柔剣でまたすぐ次の斬撃に繋げる。
互いに滔々と、石動は斬り続け、ヂーシンはいなし続けるループ。
傍から見れば美しい演武に見えるかもしれない。

（堅い……！）

攻めの手を休めず、石動は唸った。
どれだけ巧みに斬りつけたつもりでも、ヂーシンの左手の守りはまるで崩せない。
《金烏》は体の一点にほとんど全ての通力を集中させ、そこだけ絶大な防御力を得る業だ。
つまり、ヂーシンの左手以外に剣を触れさせることができれば、豆腐のように両断できる。
それは彼も承知のはずだが、怖くないのか？

左手一本でいなす、己の防御技術に自信があるのだろうが、それにしても豪胆な。
あるいは飄々と言うべきか？
正真の拳士とはこういうものなのだろう、ただ剣を捌くだけのシンプルな行為にすら、その練度や人間性の奥深さを悟らせる。
なんと挑戦し甲斐のある男か！

「石動様は本当に器用なお方ですなあ。その気になれば、なんでもおできになる」
ヂーシンの方もまた、柔剣という特殊な斬法を会得した石動を、呆れ半分に讃えた。
「灰村君の影響でね。もっともあちらは、僕なんかの及ぶところではない〝なんでも〟だが」
石動は逆袈裟を放つとともに、真面目腐って答える。
諸葉に会う前、ランクAという位に満足していたころの自分は、ひたすら《太白》や《太歳》、《蜃惑》の威力を上げることばかりに腐心していた。仲間たちとともに《異端者》を狩るだけなら、それで事足りた。
それこそ、味方を指揮する技術、戦術の向上の方が、面白みを覚えていただろう。
でも諸葉のおかげで、自分の殻を破りたいと思った時に、それまで軽視していた様々な光技を見直す必要に迫られた。
いや、そんな義務的な話ではない。
いざ《神足通》を磨いてみれば、その玄妙な世界に挑戦心をかき立てられたし、剣技と《蜃惑》を織り合わせたコンビネーションの研究は、面白くて止まらなかった。
性格同様、不器用だと思い込んでいた石動迅という白鉄が、その実、いろんな可能性を秘めていて、努力すればするほど、自分の〝枠〟が広がっていくような感覚は、快感以外の何物でもなかった。
諸葉に巡り合わなければ、決して知ることのなかった境地だった。
そんな石動ならではのコンビネーションを見せつける。
柔剣で滅多斬りにし、ヂーシンに左掌でのいなしへ意識を集中させてからの、突如、全方位に放つ裏の《蜃惑》。
白鉄同士の戦いとしては通常ありえない、回避至難の範囲攻撃。
しかも《金烏》に専念しているヂーシンは、全身の守りを放棄しているのだから。

（どうだ!?）

強い意志の力とともに三百六十度、解き放った黒い稲妻は、確実にヂーシンを捉えた。

が、

ヂーシンは左掌に集めていたはずの通力を、難なく全身に走らせ、《耐魔通》で防ぎ、そよ風でも浴びているかの如く平然としていた。

通力を操る基礎技術が、愚ろしく高い証拠だ。

閃光のように速く、水の流れのように淀みない。

加えて、左掌でのいなしへ意識を釘付けにさせていたと思ったのに、反応が鋭い。

これも中国拳法でいうところの、聴勁の極意であろうか？

放電を浴びながら、柳のように体をゆらゆらとさせるヂーシンのこの動き。まさか、放った石動でもわからない電力のムラを感じとり、より高い場所を避けて、より低い場所へ己が身を置いているのであろうか？

この化物め！

それでこそ、命懸けで首を狙うに足る敵め！

恐怖と歓喜がないまぜになった、この世で最も甘美な興奮に打たれ、石動は叫びそうになる。

その時にはもう、ヂーシンの右拳が戯れの如き気軽さで、石動の腹に叩き込まれている。

こつん――と軽妙な打感。

それが石動の長身を遥か後方へ叩き飛ばす。

そこにあった木の幹へ激突し、薙ぎ倒し、まだ止まらず、もう一本ぶつかって幹をへし折って、ようやく慣性が消えて石動は地面に墜落した。

打たれたのは腹なのに、衝撃で全身が痺れたようになっている。

歯を食いしばって両腕で上体を少し持ち上げ、うずくまるのが精の一杯。

石動が吹き飛ばされて、だいぶ遠くなったヂーシンが、

「……おや？」

と首を傾げるのを、うずくまったまま見上げた。

ヂーシンの《崩拳》は、迭支直伝の絶招だ。

力任せに殴りつける他の白鉄のそれとは、次元が違う。

軽く当てたようにしか見えないのに、その威力は絶大。

打ち砕けぬものはなし。

〝牢獄の魔女〟の館で戦った時も――あの時の彼は本気でさえなかったのに――石動は一発で轟沈させられた。

しかし今は、咄嗟に呪力を腹部に集める裏の《金剛通》で、どうにかこうにか生き延びることができた。腹部に重く鈍い痛みがあり、臓器を損傷した可能性があるが、とりあえず目の前の戦いに支障がなければ問題なし。

「六頭領の皆々様や《異端者》どもでもなければ、ワタシが本気で打ってまだ生命が残っておられるのは、貴方様が初めてですなあ」

ヂーシンも謞子を確かめるように、盛んに右手を握ったり開いたりする。

「これはいよいよ石動様も、ランクSの領域へ片足を突っ込んだ御証拠なのでは？」

「やめてくれたまえ。君たちの世界は、決してそんな安っぽいものではないだろう？」

「ははは。そういうところまで、レナード様と似ておられますなあ」

「あの剣士とならば、不本意ではないね」

おどけて笑うヂーシンと、距離を挟んだまま石動は言葉をかわす。

なぜかとどめを刺しに来ない。

石動を見下し、遊び半分の時ならともかく、本気になっているはずのこの男が。

おかげで痺れが抜けていく時間を確保できる。

《内活通》の要領で、呪力を使って体を回復させるのは不可能なのかどうか、石動は未だコツがつかめていなかったから、助かる。

一方、ヂーシンの不審な躊躇の意図も、すぐにわかった。

もちろん、手心の類ではなかったことは、この男の性格からして疑っていなかったが。

「どうも……このままでは足元をすくわれる予感がしてなりません。ワタシとしてはわずかでも危険がある橋を渡るのは、切に御勘弁願いたいのですよねえ」

なにやら懐をまさぐりながら、慎重論を口にする。

「……まさか逃げると言い出さないだろうね？」
ようやく痺れがとれてきて、剣を杖に立ち上がる石動。
「残念ながら、貴方様の口を封じて帰らねば、それはそれで危ない話なのでございます。と申しますのも実は、六翼会議の皆々様には内緒で貴方様を殺えてしまいましたので」
さも遺憾そうにぬけぬけとぼやいて、ヂーシンが懐から何か取り出した。
石動は目を瞠る。
認識票だったのだ。白騎士機関の《救世主》が使う。
四月の東京本局襲撃事件の時に、どさくさで大量に盗まれたものの一つだったが、日本支部の上層部によって緘口令が敷かれているため、石動は知らなかった。
ヂーシンが、翡翠の通力を認識票へ注入する。
いったい何を顕現させるのかと、石動はますます瞠目させられる。
認識票は赤熱した鉄のような色合いに変わり、飴のように形を変えていく。
上下に伸びる。
どこまでも伸びる。
そして、ヂーシンの掌中に現れたのは、長さ二メートルほどの槍であった。
ただの槍ではなく、どこか神々しさを湛えた純白の霊槍と、石動の目には映った。
大理石のような金属とでも言おうか、不思議な材質で穂先から石突まで一体化している。
「……強そうな武器だね」
石動の背筋を緊張の汗が滑り落ち、自覚なく軽口を叩いてしまう。
「なあに、ただの傘でございますよ」
ヂーシンもまた軽口を返し、さも恥じ入るような殊勝さで、構えてみせた。
一厘の隙も無く、美しい構えだ。
おふざけにしか見えなかった、拳法の構えとは真逆。
石動の、全身の毛が逆立つ。
喉が干上がる。

遠く距離を挟んでなお、ヂーシンがにわかに放ったプレッシャーに、神経が焼かれる。
石動は知らなかったが、中国拳の伝統派のほとんどは、槍の扱いにも長けている。
基本にして奥義にもなる中段突きは、拳でも槍でも、その要訣に通じるものがあるのだ。
また中国では、槍は百兵の王といわれる。
最も優れた武器。
という意味である。
必ず先の先をとれる圧倒的リーチ。
最速最短の攻撃動作である、突きに特化した形状。
相手も長柄の武器を持っていなければ、何もさせず圧殺することも容易。
それらの道理や背景を知らずとも、「ルー・ヂーシンが構える槍」の恐ろしさを、石動は肌で、全身全霊で感じとっていた。
攻め入る隙を見いだせない。
勇気とか根性とか気迫とか懸命とか――実は決して軽視できない精神論を――真正面から捻じ伏せるような凄味がある。
（ままよ……っ）
遠間のまま、石動は裏の《蠱惑》を放った。
ヂーシンが《耐魔通》に集中すると、大きなダメージは与えられないのが判明していたが、あれに自分から近づくよりはマシだ。
裏の《太歳》も《蠱惑》も呪力の消耗が激しい。
浪費するのはまだ恐い。
だからここぞという時に、効果的に使える場合に使用を限定したかったのだが、そんなことを言ってられる場合ではなかった。有効な遠距離攻撃法を持たないヂーシンが、焦ってリアクションを見せるまで、打ち続けようと肚を決める。

「無駄にございますよ」

だがヂーシンは、余裕面でほくそ笑む。

事実、石動が放った黒雷は、彼に命中する遥か手前で、いきなり、その軌道を捻じ曲げる。

ちょうど構えた槍の穂先がある辺り。

まるでそこに見えない壁が存在するかのように、稲妻が逸れていったのだ。

壁というよりは、そこで空間が歪み、捻じれているのだろうか？

二発目の《蛍惑》もまた、そこに達するや否や、ぐにゃりと軌道をメチャクチャにされて、あらぬ方へ飛んでいった。ある程度、軌道を自在に操れる裏の《蛍惑》だが、ブーメランのように百八十度回頭をさせることはできない。

「拿と、申し上げたはずでございますが？」

ヂーシンに改めて言われるまでもない。

悟らされる。

あの神秘の槍がある限り、ヂーシンに遠間から《蛍惑》を当てることはできない。

石動は完全に攻め手を失った。

ヂーシンも攻めてこないので、完全に膠着した。

（――いや。違うっ）

あちらには膠着させる気などない。

何か打破する糸口がないか、懸命にヂーシンを観察していた石動は、彼の微かな動作に気づき、企みを見破る。

すぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ――

はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――

あまりに深すぎ、あまりに長い、調息の仙技。

ただの深呼吸とはかけ離れすぎていて、風の音に紛れるほどで、だから今まで見落としていたが、恐らくはヂーシンが本気になってからずっと、続けていたに違いない。

練氣の極意で磨きをかけられた通力が、いよいよ加速度的に純度と明度を増していく。

その果てにヂーシンがどれほどの奥義を放ってくるか、もはや石動には想像もつかない。

攻めるも必死。

待つも必死。

八方、手詰まり。

石動の脳裏を絶望が侵食しようとした。

（どうせ死ぬなら、攻めて死ね！）

その絶望を蹴り払い、脳裏から叩き出した。

「おおおおッ！」

剣を八相に構え、がむしゃらに突撃する。

もうただの意地だ。破れかぶれだ。

でも、ここで意地の一つも振り絞れない腑抜けに、「次のリーグ戦で挑戦してくる日を待っているよ」などと、大口を叩いていい資格などない。

二度と後輩たちに顔向けできなくなる。サツキとの約束が守れなくなる。

「その度胸たるや御見事！　我が槍を受けるに相応しいと讃えましょう！」

ヂーシンが口元に湛える笑みの質を、満悦なものへ変えた。

同時に、その通力の彩も。

最初、翡翠にも似た暗緑色だったそれが、この世で最も碧き煌めきへとついに昇華する。

「イイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッッヤ！」

ヂーシンの気勢が森を震き、突進が大気を穿った。

走り、石動の元まで迎え撃ち、槍をしごいて、先に貫く――そこに至るまでの全ての動作が洗練され、完璧に連動し、「突く」という単純な攻撃法を、馬鹿げたほど複雑に細部まで徹底し、極限まで突き詰めた、ヂーシンの神槍。

しかも下支えとなるのは、この世で最も碧き神通力。

ゆえに、その突進速度は縮地の歩法に匹敵し、間合いという概念を無視する。

ゆえに、その貫通威力は絶対の二文字に近似し、あらゆる防御を無視する。

これこそがランクS《背教者》の、なんの外連もない一撃必殺。
石動は避けることもできなかった。
呪力を集めて裏の《金剛通》にすがるが、防ぎきれる気がしなかった。
意地だけでどうにかできるものではなかった。
愕然と。呆然自失と。
自分の胸へ、吸い込まれるように迫る穂先を見つめるだけ。
他人事めいたあやふやな感覚で、己の死をはっきり確信する。

まさにその時、総てが真っ二つに切断された。

総てとは何か？
その斬線上にある総てだ。
森羅万象だ。
無論、チーシンの槍とて例外ではない！
横合いから真っ二つになって、穂先を失って、貫くことができなくなった。
チーシンの神槍の極意は、完璧な刺突動作だったからこそ、穂先のその部分で威力が最大発揮され、貫き通すことに洗練されていた。柄の半ば失った部分で石動を突き飛ばしたところで、ただの腰の入っていない体当たりにすぎなかった。
神は凡と堕したのだ。
神通力の下支えがあろうと、守りの呪力を胸部に集めていた石動なら、ぎりぎり耐えきることができた。
再び後方へ弾き飛ばされながら、木の幹に背中を叩きつけられながら、石動は激痛に苛まれる。それは「生きた心地」の味であり、また「破れかぶれはダメですよ」と、叱りつけられているようでもあった。
（そう……だね……）
長生きするつもりはないが、道半ばで果てたいわけではないのだ。
まだこの手に何もつかんでいないのだ。

そのことを思い起こさせてくれた「彼」に、深い感謝の念が湧く。
墜落し、地面を舐める苦い味すら、今の石動には愛おしい。
一方、
「こ、これは何事ですか!?」
チーシンのヒステリックな叫びが聞こえる。
己の神槍に自信があればこそ、何が起きたか理解できないのかもしれない。
それが石動には不思議だ。
だからこそ、神槍に横槍入れられる人間など、一人しかいないと気づけないのか？
「また助けられてしまったね……灰村君」
石動は地に伏したまま、目の動きだけで夜天を見上げた。
《天眼通》でなければ見通せぬ、遥か遠くその先に。
聳える巨木の頂に立つ、剣を携えた少年の姿を。
今々、おっとり刀で駆けつけてくれた様子ではない。
気づかなかったが、チーシンへの挑戦をずっとそこで見守ってくれていたのだろう。
なぜ、彼がいるのか？
どこから自分の決意が露見したのか？
それら当たり前の疑問より先に、石動の心は二つの感情で埋め尽くされる。
（ああ……君はまだ遠いな……。本当に遠いな……）
憧憬。
そして、胸が空くような気持ち。
同じ渾身の一撃でも、チーシンの一突きは死の臭いしかしなかったが、諸葉の一太刀はどこまでも痛快な趣きがあった。
どんなに取り繕っても、両者とも暴力にすぎないはずなのに。
諸葉のそれには内心、喝采せずにいられない。
あれほどの距離からなお、ルー・チーシンの神槍を断つとは――

灰村諸葉の《誘惑》、正しく絶妙也。

SECTION 8

第八章

刹那、埒の外へ -Challenge 3-

時はしばし遡る。

諸葉は静乃に応援を頼まれ、戦闘服に着替えて駆けつけた。

そこにはレーシャがいて――丈弦もいた。

彼の口から事情を全て聞いた。

とある偶然から、この町でヂーシンの動向を探っていたこと。

そうしたら驚くべきことに、石動と密会していたのが発覚したこと。

二人は夜な夜な、怪しげな特訓に打ち込んでいたこと。

丈弦と石動は親友同士だ。

そして、丈弦は優しすぎるほど情に厚い男だ。

密会のことを告発することもできず、石動本人に真意を問い質しに行ったが答えてくれず、丈弦は誰にも相談できずに思い悩みながら、ずるずると監視だけを続けていた。

変化が起きたのは今夜。

石動は真っ直ぐヂーシンには会いに行かず、静乃を待ち伏せするような真似をし、挑発し、静乃に全力攻撃をさせて、それに耐える実験を行った。

どういう原理かは不明だが、呪力を発生させ、操る訓練をしていたらしい石動は、その効果のほどに満足すると、いずこかへと消え去った。

一部始終を監視していた丈弦は、静乃たちの前に姿を現し、諸葉を呼び出したという経緯だ。

「――あいつはきっと今夜、ルー・ダーシンに戦いを挑む」
丈弦は深刻な顔で言った。
「今夜、ルー・ダーシンと手を取り合って、六翼会議へ駆け込む……の間違いではなくて？」
嫌な思いをさせられた静乃が皮肉るが、
「そんなわけないだろ！　石動はそんな奴じゃねえよ！」
丈弦は憤ってかぶりを振る。
「敵とコソコソ内通してる人のことなんて、信じられるのかしら？」
「あいつはただ、強くなりたかっただけだよ。オレにはわかる。三年、テメエらの命を預け合ってきたんだぞ？」
目に力を込めて反論する。
それ以上、石動を悪く言うのは許さないとばかりの気迫。
静乃も皮肉っぽく肩を竦めるだけで、もう黙った。
丈弦も語調を弱め、
「笑える話だろ？　あんなに石頭だったあいつが、敵から強さ盗んで、呪力なんてもんまで使えるようになって……どんだけ発想が柔軟なんだよって、まったくこっちがついてけねえよ」
無理矢理に、乾いた笑いを浮かべる。
諸葉も同感だ。
あの石動が皆を裏切るわけがないし、もっと強くなりたいと、他人に後ろ指差されるのも気にせずがむしゃらになっているのも、批判を恐れず学校の急改革を進めるその意志と一緒だ。
とまれ事情はわかった。
一同を見回して告げる。
「皆でダーシンをとっつかまえる、チャンスですね」
石動を助けに行こうとは言わない。
諸葉にとって石動迅という男は今でも、タフな隊長なのだから。
「私も今度こそ、ルー・ダーシンに一矢報いる」
レーシャのやる気も満々だった。

ところが、それを、丈弦が制するように、
「すまん。頼みを聞いて欲しい」
いきなり頭を下げて、
「石動が負けそうになるギリギリまで、あいつ一人に挑戦させてやって欲しい」
皆を驚かせた。
呑んでくれないなら現場まで案内できないと、言い出しかねないほどの覚悟を感じさせる。
「ギリギリまでは遠くから見守るんですか？　難しいこと言いますねぇ」
石動はタフな男だが、ダーシンだって常識の埒外なのだ。
どっちが勝つとしても、均衡が崩れたその刹那に、生死が決まってしまわないだろうか？
石動がもう危ないと見えた時に、そう都合よく割って入れるだろうか？
「難しいとかいうレベルの話じゃないってのはわかってる。こんなの、おまえさんじゃなきゃ無理だ。だから、諸葉に頼んでるんだよ。……諸葉じゃなきゃ、頼めねえんだよ！」
敬愛する先輩にこうも頭を下げられたら、諸葉も無下にできなかった。
それに気持ちもわかる。
要するに丈弦はこう言っているのだ。
石動の男を立ててやって欲しい、と。
リアリストの静乃やレーシャは「理解できない」と言いたげだが、
「了解っす。俺も、石動先輩のこと好きですしね」
諸葉はさっぱりと笑って請け合った。
丈弦は安堵しつつ他に目を向け、
「漆原たちにも頼む。もし助けに入ることになっても、それは諸葉だけだ」
「待って、先輩。諸葉がそれでいいと言うのなら、百歩譲って私は納得するわ？　でも、エレーナさんだってルー・ダーシンには、二度も煮え湯を飲まされているの」
「そこを、頼む」
「承服できかねるわ？　エレーナさんが雪辱を果たすために、どれだけ真剣に特訓を続けているのか、それを――」

レーシャのために食い下がろうとする静乃。
ところが、レーシャ自身が肩をつかんで止めた。
「静乃。あなたがそう言ってくれて、私は本当にうれしい」
「……エレーナさん」
「でも、私が悔しかったのは、私が大切にしているものを、あの男から守れなかったことなのだ。私が手を下さずとも、誰かがあの男を懲らしめてくれるのなら、私は歓迎する」
「……もう。仕方ない人ね、あなたはもっとワガママを覚えるべきよ」
静乃は拝げに嘆息した。
レーシャは丈弦へ向き直り、
「その要求を私たちは呑もう。ただし、我々も遠くから眺めるくらいはさせてもらう。あなたがそれほどまでに買う、石動迅の戦いぶりに興味がある。それくらいのワガママは私とて言わせてもらおう」
「ああ、もちろんだ」
丈弦は皆へ礼を言い、石動の元へと先導した。

そして今、諸葉は巨木の頂点に立ち、遥かギーシンを睥睨する。
右手にあるは、紛うことなき聖剣サラティガ。
昼間のサツキの試合前に認識票を交換し、うっかりそのままだったのが幸いした。
諸葉は宙に身を躍らせると、流星の如く夜空を翔け、一足飛びに距離を詰めてギーシンの眼前十歩、音もなく地へ降り立つ。
チラリと石動に目を向ければ、かなり遠くへ吹き飛ばされたまま、うずくまっている。
あそこなら安全そうだと確認し、またギーシンへ視線を戻すと、
「よお、こんばんは。いい夜だな」
挨拶代わりに斬りかかった。
風情もへったくれもないが、この性根のふざけた野郎相手に、茶番を演じる気になれない。

「凶日にもほどがありましょう。よりにもよって灰村様と出くわすとは」
ギーシンが道化めいた大仰さで、悲嘆に暮れる。
体は口とは裏腹に、半ばから切断された槍をポイと捨て、飄々と受けて立つ。
拳法の構え。左掌への《金烏》。それで諸葉の袈裟斬りをいなす。
諸葉は二太刀、三太刀、とリズムよく攻め立て、ギーシンも泰然自若と受け流す。
「ワタシ、灰村様と戦って生き延びる自信などございません。大人しく引きあげますので、どうかお見逃しいただけませんかねえ？」
いなしながらギーシンが投げやりに言った。
斬りつけながら諸葉は答える。
「勝手に逃げりゃいいじゃん？」
「剣呑な談を。ワタシが背中を見せた途端、バッサリといくおつもりでしょう？」
「俺がそんな卑怯な真似をするとでも？」
軽口を交えながら、剣と拳を応酬する。
さも友達同士がじゃれ合うような雰囲気で、威力と技巧が凝らされた剣を見舞い、化勁でいなしながら反撃の隙を窺う、命のやり取り。
「だって、ワタシのこと、絶対に許さないと仰ったでしょう？」
恐るべきカウンターの右拳を、ギーシンがまるで戯れかかるように打ち込んでくる。
「そんな昔のことよく覚えてんなあ」
気前よく残像を打たせてやり、真後ろに回り込む諸葉。
実は、ギーシンとは〝牢獄の魔女〟の館で会った以来だ。
あれから約九か月ぶりの再会になる。
無論、旧交を温める気分など丸きりなし。
背後をとって虚を衝き、横薙ぎに斬り伏せようとするが、
「ワタシとしては、お互い昔のことは忘れて、仲良くいたしたいものですなあ！」
ギーシンは後敏に転身して、旋回裏拳で迎撃してくる。

諸葉の剣と、ヂーシンの拳が正面衝突する瞬間、

「それマジ無理。あんたは生理的に無理」

諸葉は刀身へさらに通力を注ぎ込んで威力を上げ、

「貴方様もなかなかよい性格をしていらっしゃる」

ヂーシンはなんと拳を開き、横薙ぎに走るサラティガの腹に指を添え、突き放すような動作で逆に自分の体を後方へ、ふわりと、綿毛の如く軽やかに飛ばして逃げる。

「なんだよ、今のインチキ臭い動きっ？」

「おや、御存知ない？　如何なるものも足場と変える神仙歩法、《文曲》にございますれば」

「手ぇ使ってたじゃねえかっ」

「それも自明のこと、逆立ち歩きの要領でございますよ」

「胡散臭ぇぇぇ……」

諸葉の常識すら凌駕してみせる、ヂーシンの体捌きの妙に呆れながら、右手一本、練った通力を太刀風に乗せてぶっ放す。

ヂーシンも調息一吸、練った氣を右拳から放って迎撃する。

《太歳》と《太歳》の力比べは、諸葉が勝った。

通力の地力で劣り、しかも武器がないので威力を収束できないヂーシンのそれは、呆気なく諸葉のそれに吹き飛ばされる。

ただし、諸葉の《太歳》も威力の大部分をその衝突で使い果たし、ヂーシンに届くころには、彼の鍛えられた《耐魔通》で微風のように凌がれる。

（充分、充分）

諸葉はとっくに左手で、炎の第三階梯を綴り終えている。

さっきの《太歳》は、ヂーシンを《耐魔通》でかかりきりにするのが狙い。

得意の《火葬》を、叩きつけた。

中肉中背のヂーシンの体が、巨大な爆炎に包まれる。

威力の落ちる無詠唱とはいえ、第三階梯の闇術だ。《太歳》より遥かに勝る。

ヂーシンはパワー自慢、タフネス自慢ではなく、極限の技巧で戦うタイプ。

直撃さえさせれば、けっこうなダメージを与えられるはず。

（……ちぇ）

しかし、その目論見をあっさり破られ、諸葉は内心舌打ちした。

陽炎揺らめく火柱の中から、ゆっくりと影が染み出るように、ヂーシンが姿を現した。

火傷を負った様子など全くない。

ただその全身から、瘴気めいたドス黒いオーラを立ち昇らせる。

諸葉の「眼」なら見間違えようのない、呪力の影だった。

「なぜ君までそれを!?」

石動は驚愕のままに叫んだ。

神狼の当たり損ないを喰らったダメージはまるで抜けきっていない。

肋骨など何本折れているかわからない。

そんな体で無我夢中、剣を支えに立ち上がる。

「それはもちろん、ワタシも修行を始めたからでございますよ。一月前ほどですかなあ。もう少し観察させていただくつもりだったのですが、石動様に悪影響が出る様子も一向にないことですし、ワタシも痺れを切らしてしまったというわけでございます」

ヂーシンは諸葉と対峙したまま、こちらのことなど一顧だにせず、慇懃無礼に返答した。

石動は歯軋りさせられる。

修行をするのはヂーシンの勝手。

痺れを切らしたという気持ちもわかる。
だが、既に呪力の扱いを習得しているにもかかわらず、石動の裏の《蠱惑》や《太歳》を見てはいちいち驚いていた、あれはなんだったのか。
「よくもぬけぬけと……」
虚仮にされていたのかと思うと、歯軋りが止まらない。
「誤解でございますよ」ヂーシンが体は諸業へ向けたまま、右腕だけをこちらへ向け、「石動様の、呪力を通力の如く用いるやり方は特殊なのでございます。ゆえに異才と申し上げたわけで。それこそが普通だと思われていらしたのならば、生兵法もいいところ。本来の用い方はこうでございますよ？」
中指で何かを弾くジェスチャーをした。
ただそれだけで、飄、と風が吹き荒ぶ。
ヂーシンの方から真っ直ぐに、凝縮されて塊めいた突風が飛んできて、石動の胸を強打する。
折れた肋に痛恨の追撃。
普通に呼吸を必要としていたころの石動だったら、肺を押し潰されて、息ができなくなっていただろう。
突風の塊は一つきりではなく、五つ、六つと飛んできて、石動は滅多打ちにされる。
二発目以降は裏の《耐魔通》に集中し、どうにか凌ぐが凄まじい威力だ。
（……《太歳》……ではない、これは……っ）
そうであれば、通力なり呪力なりを孕んでいる様が目視できるはず。
第一、《太歳》は連打が難しい業である。
これはもっと……そう、闇術のように、直接的に自然現象を歪めて、起こした風だ。
ただし闇術と違い、詠唱やスペリングという煩雑な準備を必要としないようで。
（僕にはあんな真似はできない……。僕はまだ、全く使いこなせていないということか……）
石動は驚嘆と恐怖を禁じ得なかった。
ところが、
「要するに《異端者》と同じってこったろ」
諸葉は剣を両手に構え直し、吐き捨てるように指摘するだけ。

「《異端者》ってのはなんでもアリだ。石化のブレスを吐く奴がいれば、水の上を巨体で歩く奴もいる。あんたはそのモノマネしてるってわけだ」

まるで大した手品じゃないと言わんばかりに、臆することなくヂーシンへ突っ込む。

「言ってくれますねえ！」

ヂーシンは右手を諸葉へ向けて、中指で虚空を弾いた。

砲弾めいた風塊が、七つ、八つと発射されるが、

「すらああ！」

諸葉は気勢とともに、《太歳》で迎撃。

互いに相殺して、強いだけの無害な突風が拡散する。

諸葉はその中を突っ切って、前髪を後ろへはためかせながら、斬りかかる。

「これならどうです？」

ヂーシンは左腕を外側へ、水平に払う。

たちまち左側方で大気が揺らぎ、渦を巻き、まるで掃除機のように、周囲のものを吸い込む暴風を起こす。

諸葉も例外なく引っ張られる。予想しない手段で、予想外のベクトルから妨害を受け、さしもの彼も体軸と太刀筋をブレさせる。

「イイイヤ！」

その隙を見逃さず、ヂーシンが拳打を突き入れた。

完璧な交差法が決まったに見えた。

「いよっと」

でも諸葉は、その腕を踏み台に跳んで躱して逃げる。

「あいや、なんと……！」

「おや、知らない？　如何なるものも足場と変える神仙歩法、《文曲》ですよっ」

ちょうど石動に背を向けるような体勢で、ヂーシンとの中間地点に着地した。

「灰村様こそモノマネはやめていただきたいですなあ！」

ヂーシンが中指を弾いて、諸葉へ風塊を飛ばし、

「他に面白い芸はできないのかっ？」

諸葉は先程と同様、あっさりと《太歳》をぶつけて相殺する。

また気負いなく突撃する。

その背中を視線だけで追いかけ、石動は思わずにいられなかった。

呪力を操り、風を自在にするヂーシンは真実、畏ろしい。

その怪物と、自然体でやり合う諸葉は真実、素晴らしい。

石動の眼前で、石動が及ばぬ次元違いの戦いを、軽口交じりにやってのける二人が、真実、羨ましい。

（動け……っ）

石動は念じる。

（前へ出ろ……っ）

手負いでまともに動こうとしない、己の体へ意志の鞭を打つ。

（あそこに、あの目の前に、僕が求めた天上があるだろうが……っ）

あらん限りの呪力を燃やす。

体が動かぬなら、無理矢理にでも動かす。呪力で動かす。

これは人の魂の力。

森羅万象さえも捻じ曲げ得る力なのだから。

（追いかけるんだ……あの背中を！）

心の中で吼える。

ただの意地を超えた、その意思が。想いが。願いが。混じりっけなしの欲が。

さらなる呪力を魂の奥底から汲み上げ、石動の体を衝き動かした。

「おおおお……ッ」

もう声に出して咆哮し、突撃する。

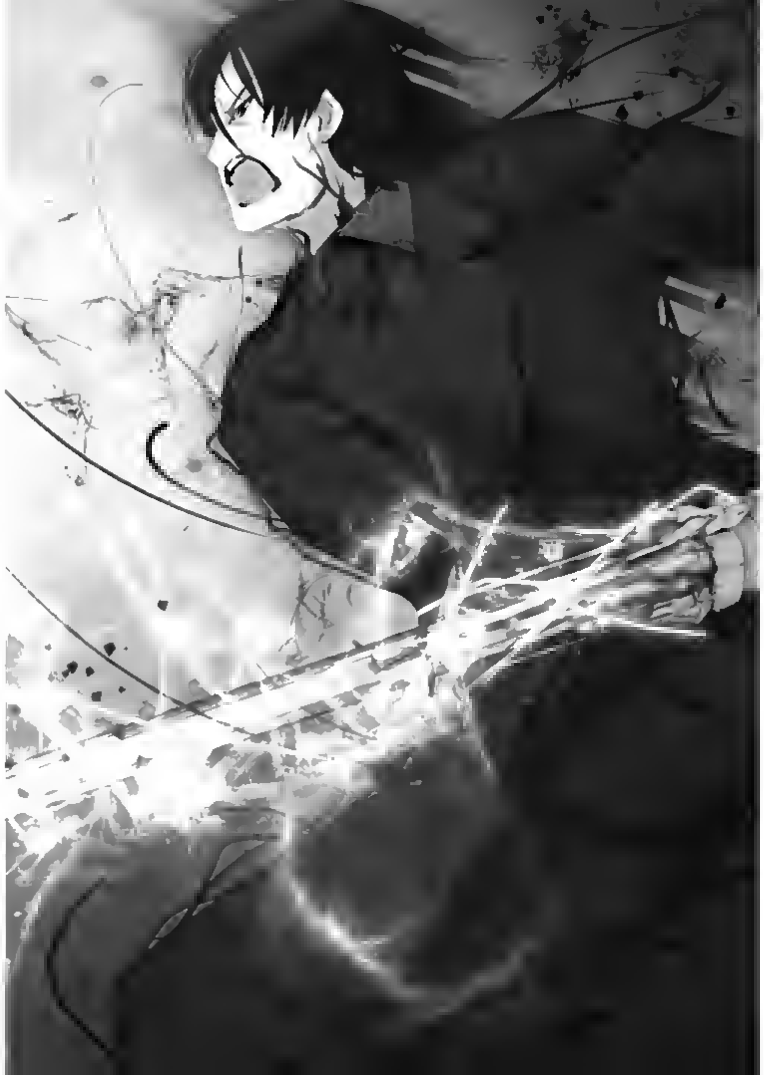
もうひたすらに諸葉の背中を追いかける。

ヂーシンがまた、吸引の暴風を発生させた。

一度見た諸葉は抵抗し、体をグラつかせることなく、幹竹割りを浴びせる。

それをいなすためにヂーシンの左手が上がる。
おかげで一瞬、左脇腹がガラ空きになる。
「お……おおおッ」
すかさず石動は抜き胴を叩きつけた。
呪力の効果か、人体とは思えぬ硬い感触が、柄を通じて伝わる。
与えたダメージは軽微。
でも、ヂーシンにたたらを踏ませた。
すかさず諸葉が斬りかかる隙を作ることができた。
「二人がかりは卑怯ですよ！」
しっかり構えができていなければ、化勁の極意など使えない。
ヂーシンは堪らず跳び退って逃げる。
「ああ、ゴメンゴメン」
諸葉は容赦も斟酌もなく追撃にかかる。
石動はその背中を追う。
ヂーシンがまず二対一の状況を潰そうと、石動に集中して風塊を飛ばしてくる。
（退いて――）
「――堪るかあぁぁっ」
石動は牙を剝き出すように吼えて、風塊の弾幕の、一番密度の薄い場所へ体をねじ込んだ。
呪力を燃やし、守りに回して、激痛に堪えて、強引に弾幕を突破する。
諸葉の背中を追いかけ続ける。
野獣じみたその気迫に打たれ、ヂーシンの頬が引きつった。
無論、挑戦試合の時だって、石動はちゃんと全力を尽くしていた。
決して手加減して、春鹿に勝たせてやったわけではなかった。
でも、今の石動は死力を尽くして戦っていた。
それがヂーシンをして、心理的にたじろがせたのだ。

「おお……ソ！」
お返しとばかり、裏の《太歳》を撃ち放つ。
魔風でできた、縦一文字の大鎌が、諸葉を追い抜き、ヂーシンを襲う。
ヂーシンは両掌を前にして、風圧の壁を作って食い止める。
そこへ諸葉が、剣を大上段に振りかぶって躍りかかった。
刀身に宿るはこの世界で最も眩き煌めき。
ヂーシンとの戦いを始めてからこっち、ずっと練り上げ、サラティガに注ぎ込み、濾過した通力がようやく神通力へと至った。
《霊惑》を以ってし、風圧の壁ごとヂーシンをぶった切る。
諸葉の魂の象は、切断の概念そのもの。
たとえ化勁の極意だろうが、人の世の技で到底いなせるものではなし。
防御のために伸ばされたヂーシンの左腕を、煌々たる軌跡を曳いて走ったサラティガの刀身が、半ばから斬って落とした。
斬り飛ばされるヂーシンの左腕を、石動は目で追い、悟った。
今こそ最大の好機。
この卑劣凶悪にして、強大無比の拳士にとどめを刺さんと、石動は己の秘奥義を尽くす。
一拍ずれて、斬り込む。
縮地の歩法――《破軍》。
刹那のうちに諸葉を追い越し、ヂーシンに肉薄し、斬撃を繰り出す。
しかし、
「こんなところで、死んで堪るものですか!!」
剣でヂーシンを断つ寸前、その姿がかき消えた。
まるで映画のコマを途中で切って、繋いで再生したが如く、わずか一瞬で後方へ大きく退避している。



ヂーシンもまた、逃げるために縮地の歩法を用いたのだ。
「焦りましたねえ石動様！」
その頬に嘲弄の笑みが浮かぶ。
かつて〝牢獄の魔女〟の館で対決した時も、石動は《破軍》で勝負を着けようとし、より卓越した《破軍》の使い手だったヂーシンへの問合いを詰めきれず、敗れた。
その愚を繰り返すのかと、嘲笑われたのだ。
しかし、石動は愚直ではあるが、愚昧ではない。
（今はまだ、この一瞬だけでいい……！）
ヂーシンの嘲弄など聞こえてもいない。大事なのは己が何を成すか。
その目に映るのは、ただひたすらに〝前〟のみ。
今より先へ。
もっと先へ。
だから。
そこに。

「届けえええええええええええええええええええええっ」

喉も裂けよとばかりの石動の咆哮。
全身に纏った黒雷のオーラが烈しくスパークする。
強い願いが、祈りが、想いが。
呪力によってもう一度、世界の摂理を捻じ曲げる。
石動の体を一瞬だけ作り変える。
重量という、万物が持つ逃れられぬ運命を捨て、置き去りにする。

それは《破軍》という無茶を犯した清算のために、本来、両脚へかかるはずだった反動をも軽減させた。
その得た寸毫の猶予で、石動はさらに駆ける。
もう一度、縮地の歩法でヂーシンを追う。

それは、かつて馬迭戈しか成し得なかった、《破軍》のダブル。
後に石動自ら《雷影》と名づける、秘奥を超えた秘奥の歩法。

瞬間的な常識からの逸脱は、相手が如何なヂーシンとて、予想も反応もさせなかった。
今度こそ完璧に間合いを制し、殺し、詰める。
ヂーシンに追いつき、追い越し、そのすれ違い様に斬る。
それで、終。
「あいやっ……生兵法は、ワタシの方でございましたか……っ」
ヂーシンの右腿に朱線が走った。
そこからずれて、斬り落とされた。
左腕に続いて右足をも失ったヂーシンは、その場でもんどり打つしかなかった。

「降参しろよ、ヂーシン」
諸葉はサラティガを肩に担ぎ、倒れ伏すヂーシンの傍に立つ。
「あんたは何より長生きしたいんだろう？　降参するなら命は保証するし、手当もしてやる」
マヤがまだ新たな水晶を育て中で、《夢石の面晶体》は用意できなかった。
ここでゴネられたり「さあ、殺せ」とか言われると、諸葉としても大変面倒なことになるのだが、相手はヂーシンだし、交渉の余地もあるはずだった。
「なんと、ワタシを見逃してくださると？」
「誰もそこまで言ってねえよ」

この期に及んでまだ減らず口を叩くヂーシンに、「こいつ、痛みとかないのかよ……？」と諸葉は顔を顰めつつ、
「エドワードにも命だけは助けてやれって説得するし、大人しく捕まっとけ。な？」
この脚では逃げることもままならないし、諸葉だって絶対逃がす気はない。
殺す気まではそりゃ起きないが、絶対に許せない男なのだ。こいつは。
死力を振り絞った石動も、声も出せないほど疲れ果てていたが、退路を断つような位置取りで、ヂーシンの挙動に目を光らせている。
「悪くない取引だろ？　そこまで譲歩してやるんだ、むしろ感謝してくれていいんだぜ？」
「……イギリス本部ではなく、日本支部送りにしてくださるなら、ワタシも考えますが」
「俺、そっちは交渉できる自信ないぜ？　命の保証をとりつけてやれんぞ？」
「けっこうでございます。サー・エドワードはあれで腹の黒い男ですので、信用できません。その点、駿河様は〝極東の聖者〟とまで呼ばれるお方」
「あいつがそんなタマかなあ……」
春休みに会った日本支部長の、諸葉の印象は真逆だった。
「駿河様はかつて、機場様の反乱も御赦しになった慈悲深き御方でございますゆえ」
「まあ、あんたがそう言うんなら、俺に否やはない」
「取引成立でございますな」
ヂーシンが緊張を解き、くたっと全身の力を抜いた。
「さあ、治療してくださいませ。ワタシ、失血死など真っ平御免にございます」
「あんたの辞書に恥の欄はないわけ？」
当然の権利だとばかりに急き立ててくる、ヂーシンの言い様に諸葉は閉口させられる。
まあでも、約束は約束だ。
「《万の眠り》でオネムしてくれんなら、腕も脚も闇術で繋いだいてやるけど、どうする？」
「是非ともそのコースで」
「マッサージ屋みたいに言うなよ……」
諸葉は渋面になるが、ただ、昏倒させられるのは恐いだろうに、平然と要求できるヂーシンの豪胆さには感心を

覚えた。

「斬られる前よりよく動くようにしといてやるよ」

「やや、これは感謝感激ですなあ。厌村様の関術の腕前は鳴り響いておりますからなあ」

「わかったから黙ってろ。ムカっとしてミスる」

「やや、これは失敬にございますなあ」

どこまでも人を食った、ヂーシンの慇懃無礼な態度。

諸葉は額に青筋を浮かべ、内心「早まったかなあ」と、こんな約束したことを後悔した。

ともあれ《万の眠り》で昏倒させる。魔力を思いきり込めたし、ヂーシンも抵抗しなかったしで、数日は目が醒めまい。

にわかに緊張の糸が切れたような、雰囲気が訪れる。

だからであろうか。

「ごふっ……がっ……がふっ、かふっ……かふっ……っ」

石動が急に激しく咳き込みだして、諸葉はぎょっとした。

しかも、喀血までしており、咳をするたびに石動の口から、異様にドス黒い血が溢れる。

地面についた両腕は、血管がミミズのように浮かび上がって、そこからも失血する。

「先輩っ？」

「心配……ないよ……」

「とてもそうは見えないんすけどっ？」

「ちょっと……呪力を……使い、すぎた……だけさ……。すぐ、収ま……る」

そう言いつつまだ咳と喀血が止まらない。

諸葉は何も言えなくなった。

無茶をするな、と注意するのは簡単だが、人間、無茶をしてでも成さねばならぬ時はあるものだ。だから諸葉は、石動の覚悟のほどに感服するのみだった。

また同時に思う。

石動の様子を見ていると、関術の反魂を使った後に似ているように感じる。あれは魔力を暴走させることで強力

な力を得て、しかしそのツケであとあと肉体が苛まれるのだ。

諸葉も、そして静乃の特訓中も、そこまで連続的に反魂を使ったことはないのだが、もし使い続けたら、今の石動くらい苦しむことになるかもしれない。

と——そこまで考えて、脳裏に誰かの姿が一瞬、浮かんだような気がしたが、すぐに記憶は壁の向こうへと去り、印象はぼやけていった。

こだわる気にもなれず、忘れることとし、

「今、《傷跡の治療》しますね。先輩」

「……いや、僕は自分の《内活通》で充分だ」

「了解でっす。でも痩せ我慢はしないでくださいよ？」

石動にはそういうところがあるので、釘を刺す。

そうして、ヂーシンの治療にとりかかる。

丈弦や静乃、レーシャたちはもう帰ったであろう。せっかく石動の男を立てようという話だったのに、ここで静乃らが「お疲れ様」とぞろぞろ出てきたら台無しも台無しだ。

石動の咳と吐血はもう収まり、痩せた体を投げ出すように、木の幹へ寄りかかっていた。

目を閉じ、《内活通》に集中するその顔は、どこか誇らしげで。

きっと、丈弦も満足してくれていることに違いない。

約束通り、ヂーシンの傷は完璧に治療してやった。

それから日本支部の指示を仰ぎ、マヤの《移ろいの門》を使って東京本局へ護送した。

後のことは彼らに任せ——そして週末。

予定通り昼間から理事長宅に集まり、サツキと春鹿のリーグ戦優勝（兼、春鹿のランクA昇格）を祝う、ささやかなパーティーを開いた。

メンツは主賓のサツキと春鹿、主催の静乃、加えてレーシャにマヤ、諸葉の六人だ。

暑くなってきたことだし、屋敷の広い庭を利用して、流しそうめんをやるらしい。
「実は……俺、あれ、苦手だったり……。心理的敷居で」
静乃の先導で、屋敷横手の庭へぞろぞろ移動しながら、諸葉はぼやく。
「え、楽しくない？」
「アタシも好きかきらいかで言えば、好きだけど……」
サツキと春鹿が意外そうにし、
「まーやはそもそもやったことがないのです。楽しみにしてきたのです」
マヤのその言葉に、レーシャが無言でうなずく。
皆の気持ちに水を差すつもりはないので、諸葉は黙ろうとしたが、
「どういうところが苦手なのかしら？」
静乃に訊かれ、正直に答えることに。
「なんか食いもんを粗末にしてるっつーか、オモチャにしてる感があってなあ……。普通に食えばいいじゃんかって思っちゃうんだよ。あと、ときどき誰も箸を伸ばさずに、麺が下まで行って落ちちゃうことあるだろ？　桶で受けてるっていうけど、結局あれを誰かが食ってるとこ見たことないし。もったいなくね？」
「なるほど、一理あるわね。でも、今日の流しそうめんは大丈夫だから、安心して」
「そうなん？」
どんな流しそうめんなら大丈夫なのかと疑問だが、静乃はやけに自信たっぷりだった。
横手の庭に着いて、既に準備されているのを皆で見て、びっくり仰天。
「あー！　まーやはこれ、テレビで見たことあるのですー！」
と、納得顔はマヤだけだった。
庭に正方形のテーブルが一個、設置されている。
その上には、そうめんと氷の乗った大皿や、めんつゆの入ったプラスチックポット、様々な薬味の入った小鉢などが並べられている。
しかし何より目を惹くのは、それらの中央に鎮座する謎の装置。
材質は透明なプラスチックで、ドーナツ型の水槽とでも形容すべき外観。

綺麗な冷水がなみなみと満たされている。
「流しそうめん器よ」
「こんなもんが世の中あったんだなあ……」
「ええ。諸葉と使いなさいって、御祖父様が送ってくれたの」
「おまえのジイサンってけっこうお茶目なのな……」
諸葉はしげしげとドーナツ型の水槽……もとい、流しそうめん器を眺める。
とても食べ物を扱う器具には見えない。
デパートのオモチャコーナーに、幼児用の鉄道模型とかと一緒に並べてあっても違和感ない。
サツキ、マヤ、レーシャと物怖じしないメンツが揃っているが、やはり春鹿なんかは不安半分、興味半分の顔になっている。
ともあれ皆の注目が集まっている中、静乃がスイッチを入れた。
すると、ぎょっとするほどの勢いで水流が発生し、中の水が予想を超えた高速回転を始める。
「準備はいいかしら？」
「ちょい待て」
皆であわあわとめんつゆ用の器を回し、つゆを注ぎ、箸を構える。
「じゃあ、投入するわね」
静乃が菜箸を使って、きれいに大皿に盛られたそうめんの塊を一つ、放り込む。
「さあ、どうぞ。誰からでも召し上がれ」
「――って、静乃サン、これ速ぇよっ」
「マジ回転速すぎィ」
「こんなのどうやって箸でつまめっていうワケ!?」
「『天眼通』を使うのはどうだろうか？」
ドーナツ状の容れ物の中を目にも留まらない速さで、一塊になって回転するそうめんを見て、諸葉たちは尻込みする。
例外はテレビで知ってるらしいマヤで、

「こうすればいいのです。一番乗りなのですー」
箸をごく普通に容れ物の中へ突っ込み、そのままじっと待った。
するとどうだ、まるでわた飴を作るように、そうめんが勝手に箸に引っかかって、上手くまとわりつく。簡単にすくい上げることができる。
「冷たくて美味しいのですー」
早速頬張ったマヤが、天使ちゃんみたいな極上の笑顔になった。
諸葉たちは思わず喉を鳴らす。
「じゃあ、また投入するわね」
次弾が装填され、誰が行くか、目配せし合った。食べ盛りのお子様なら率制の火花が散っただろうが、そこはオトナの集団だ。
自然と序列が決まり、まずは先輩の春鹿、お祝いされるサツキ、レディーファーストでレーシャ、静乃は主催者なので最後、その前に諸葉という順番で食べることに。
自分の番が来て、諸葉はワクワクしながら箸を突っ込む。
どんどん引っかかっていくそうめんを目で楽しんでから、すくい上げる。
まるで風になびく旗のように、そうめんの束がきれいに真っ直ぐ、箸から垂れ下がる。
それをめんつゆに浸して、一気に啜る。
(これは……!)
内心、唸った。
諸葉が知るそうめんの味とは段違いに、食感がよかったのだ。
非常にツルツルしていて、喉を降りていくその時まで、艶やかな感触を楽しませてくれる。
静乃が用意してくれたそうめん自体もいいものなのだろうが、この食感の主要因は、箸を突っ込むだけで整然と、真っ直ぐに伸びた形ですくえる、この流しそうめん器の手柄!
ご家庭でそうめんを作ると往々にして、皿に盛った時に麺はちぢれ、ダマになってくっつく。
食べる時も雑然と箸に引っかけて、そのまま啜る。
グニャグニャした食感になる。

それを避けるため、料理人は茹でる前の乾麺の状態で、紐で端を括って束がばらけないようにし、皿に盛る前にその部分を切り落とすことで、整然と美しく盛るのだと聞いたことがある。
この流しそうめん器は、そこまで手間暇かけなくても美味しいそうめんが食べられる、まさに画期的発明だと諸葉は思った。
これなら流しそうめんをやる意味はある。
遊びじゃない。オモチャじゃない(見た目のクセに)。
しかも、ドーナツ状の容れ物の中を回遊するだけなので、ボチャっと落ちる問題も解決。
静乃の言う通り、大丈夫!
「これって思ったのですけど、その都度そうめんを投入しなくても、一度にたくさん入れておけば各自、自由に箸を突っ込んで、好きな時に食べられると思うのです」
流しそうめんの固定観念を覆すマヤの発見によって、諸葉たちはターン制から、静乃は投入役から解放される。
すごい!
これ、男子寮にも欲しい!

流しそうめんパーティーは嫁の外に盛り上がり、諸葉たちは初夏の風流に舌鼓を打った。
薬味の種類もたくさん用意してくれており、味が変わっていつまでも食べ飽きない。
一番人気はいくらの醤油漬け(薬味か?)だった。
諸葉的には贅沢がすぎる気がして、ちょっと食べたらもう充分だったが、サツキと春鹿とマヤで取り合いになる。
「今日はあたしたちのお祝いのはずでしょ!」
「だ、だったらアタシなんか、昇格祝いも兼ねてるじゃん」
「子どもに優しくする余裕のないオトナなんて、滅びるべきだとまーやは思うのです」
という具合である。
「浅ましい人たちね?」
「ハハハ……まあ、みんな食べ盛りだし……な」
静乃が呆れ、諸葉が擁護する。

それも束の間、

「だったら、そうめんゲームで勝負するしかないです！」

「まーやがまた胡散臭いこと言い出したよ……」

諸葉も呆れチームに参加した。

「いーわよ！　あたしはどんな勝負でも受けて立つわ！」

煽られ耐性が低いサツキがすぐに乗って、なんだかわからない展開になる。

「で？　どうやんのよ、そのゲーム？」

「まずはサツキお姉さんが、そうめんの端っこをくわえるのです。はい、あーん」

「あーん」

「まだ食べちゃダメなのです」

マヤはそんな説明をしながら、そうめんの反対端をくわえる。

「はにほれ？　ほっひーげーむの真似？」

そうめんをくわえたままサツキが言い、マヤが首肯。

（そんなんだろうと思ってたよ……）

両端から啜っていって、先に口を離した方が負けとか言うのだろう。

「な、なんか、それって……」

「すごい絵面ね？」

傍で見ていた春鹿がもじもじとし、静乃が断言する。

棒状チョコの両端を二人でくわえるのと違い、そうめんだと真ん中部分が垂れ下がるのだが、その構図がアレを彷彿させる。

激しいキスをした後、唾液が糸を引く、みたいな……。

「誰がやるか！」

憤まきながらサツキとマヤも気づいて、戦意喪失。

そうめんを半分のところで引きちぎって、それぞれ責任をとって食べた。

「あら？　やめてしまうの？　面白そうなのに」

「どこがよ！」

「じゃあ私と百地先輩でやってみましょう？」

「うぇっ、アタシ!?」

「静乃サンがまた胡散臭いこと言い出したよ……」

「はい、あーん」

「あーん」

押しに弱い春鹿が、静乃に箸で突きつけられて、そうめんの端っこをくわえる。

「じゃあ、反対側は諸葉が、あーん」

静乃に無理矢理、反対端を突っ込まれる。

一本のそうめんの端と端をくわえて、諸葉と春鹿が「え？」と見つめ合う。

「できるか！」

たちまち春鹿が頬を朱に染め、そうめんを噴き出した。

（もったいない！）

諸葉は反対側から一気に啜り上げて、事なきを得た。

「どう、諸葉？　百地先輩の味がした？」

「するかっっっ」

「てか、なに考えてんだよ、静乃！」

諸葉と春鹿で、左右から糾弾する。

「ランクA昇格のお祝いに、気を遣ってあげただけじゃないの」

「要らんわっ」

静乃がしれっと春鹿に答え、春鹿は頭から湯気を昇らせた。

「強さの方はマシになってきたのに、そんなんじゃまだまだ周回遅れね？　セ・ン・パ・イ？」

「このヤロー……」

静乃が頬に小さなえくぼを浮かべ、春鹿がジト目になる。

一方、黙ってられないのがサツキで、

「じゃあ、あたしが諸葉とそうめんゲームやる！」
「ダメでーす。ランクAになれなかった人には、ご褒美はありませーん」
「き、傷口に塩を塗らなくてもいいじゃないのよ、漆原！」
「私だってがっかりしたわ？　あなたは私と一緒に諸葉を支えてくれるんじゃなかったの？」
「い、いいもんっ。二学期こそは絶対ランクAになるもんっ。モモ先輩もわかったわね？　あたしのパートナーなんだから、この夏休みはないと思ってよね！」
涙目で気炎を吐くサツキ。
場が、しーんと静まった。
サツキはきょとんとして、皆の顔を見回す。
「気づいてないみたいなのです……」
「あのな、サツキ……」
「百地先輩はランクAになったから、もうリーグ戦に出場できないわよ？」
「どぇえええ、そうだったあああああ！」
サツキは今度こそ半泣きになって、頭を抱えた。
「……アタシの代わり。……がんばって探せ」
「無茶言わないでよ！　あたしがぼっちなの知ってるでしょっ？」
「どうして嵐城さんが威張るのかしら……」
「だ、誰かいないワケ!?　漆原……はランクAだし、まーや……もランクAだし、諸葉とレーシャは以ての外だし……！」
「万年堂先輩はどうかしら？」
「一人で石動先輩に挑んだ方がマシよ!!」
静乃の冗談に、サツキが天を仰いで悲鳴を上げた。
その様子が面白くて、諸葉たちはつい笑ってしまう。
（いや、笑っちゃいけないよな）
諸葉は口を閉じ、まだ忍び笑いになってしまうのを抑えようとする。

マヤも春鹿も同じだ。
それで、気づいた。
静乃ですらえくぼを浮かべているのに、レーシャはにこりともしていない。
思えば今日、彼女はずっと大人しかった。
もちろん普段からもそうで、レーシャは口数も少ないし、誰かと一緒にいても、楚々と遠端に咲く花のように、控えめにしていることが多い。
でもそれにしたって、今日は極端に思えた。
「……レーシャ？　なんか、元気ないのか？」
諸葉が声をかけると、ハっと我に返る。
この様子では、サツキの絶叫も聞いていなかったようだ。
「調子が悪いなら、横になってるか？　それとも女子寮に送ってこうか？」
「い、いや、それには及ばない。私は少し考え事をしていただけだ。私は元気だ」
「考え事？」
「い、いや、他愛もないことだ」
皆で心配して覗き込むようにするが、レーシャはぶんぶんと首を左右にした。
「それならいいんだが……」
諸葉は歯切れ悪く答え、レーシャがぎこちない笑顔を浮かべる。

レーシャはここ数日、ずっと考え込んでいた。
石動迅とルー・ヂーシンの戦いが、ずっと脳裏から離れなかった。
あの夜、二人は黒いオーラを、呪力を纏っていた。
それはレーシャの天敵ともいうべき力。
レプラザンで吸収することはできず、ゆえに自分は対《異端者》戦では大して役に立たない。
なんとも忌々しく、思考からも遠ざけてきた邪悪の力。

（石動迅は、それをなんと言っていたか……）

あの夜、聞いた言葉をレーシャは何度も思い返す。

――僕たちが呪力と呼んでいたものは、人の魂の奥底に眠る力だったからだ。いま思うに通力も魔力も、呪力の一側面なのかもしれない。

頬に落ちる点があった。

レーシャは白鉄だ。

前世でも白鉄で、その世界に住む人々もまた全て、大なり小なり通力を操る白鉄だった。

レプラザンはその通力を喰らう、魔の剣として鍛造された。

しかして現在。

この地球には白鉄だけでなく黒魔が存在し、レプラザンが魔力を喰らうことも知った。

道理にそぐわぬのではないかと、思ったことは一度ではない。

だがそこへ、石動の言葉を当てはめればどうだ？

通力も魔力も根っこを同じとする、別系統の力でしかないというのなら、通力を喰らうことができるレプラザンが、魔力を喰らうことができてもおかしいことはないだろう。

（そう、根を同じくするのだから……）

（その根とて……）

レーシャはまた上の空になって、ここにはない己の魔剣を見つめ続ける。

EPILOG

エピローグ

ぎーシンに折られた肋骨が癒え、内臓の痛みが消えるまで、三日とかからなかった。

自分の体のことながら、石動迅は軽い驚嘆を覚えたものだ。

呼吸を止めるために、常時《内活通》を走らせる生活をしているせいか、以前より遥かに肉体が強靭になった感がある。

諸葉とともにぎーシンの始末をつけた後、石動はただの亜輝学園校長に戻り、職務に邁進していた。

週明けには、メイジリーグを創した実戦部隊・正隊員コンビによる、漆原静乃への挑戦試合が行われ、開始わずか二分で静乃が圧勝した。

そこからは期末テスト期間に入り、それが明けるともう、夏休みを待つばかりだ。

そして、一学期終業式の朝。登校時間。

石動は諸葉に連絡し、第三武道館まで来てもらった。

あくびをしながらやってきた彼に、率直に頼む。

「一つ、手合わせを願えないかな？」

彼の前で広刃の剣を顕現させ、黒雷の呪力を纏う。

諸葉はあくびを噛み殺すと、

「いっすよ」

ごく自然な微笑を湛えて快諾してくれた。

去年一年、この武道館でともに、来る日も来る日も特訓に明け暮れた、先輩後輩の気安さがそこにあった。

また今年、石動が校長としてこの学園に残った甲斐も。

「ルールはどうします？」
諸葉が愛剣を顕現させ、純白の通力を纏う。
「試合時間、五分。なんでもあり。で、どうかな？」
「了解です」
それを合図に、お互い構える。
石動は呪力を漲らせ、剣を八相に。
諸葉は通力を煌めかせ、剣を右手一本に。
彼我の距離は十メートル弱。
石動の《破軍》がぎりぎり届くところ。
チーシン戦で開眼し、今日まで練習を重ね、ようやくコツもつかむことができた《雷影》の、おさらいと気構えを脳裏で行う。
（……よし）
頭の中で感触はつかめた。
石動は挑戦者。
攻めるならば自分から。
チラリと壁にかかった大時計を確認し、秒針が「12」へ来たら、行こうと決めた。
今、「9」を指している秒針が、刻々と進んでいく。
石動もまた刻々と、静かな闘志を昂揚させていく。
針がついに「12」を差した。
動く石動。
縮地の歩法を用い、彼我の距離などなかったかのように、諸葉との間合いを詰める。
無論、ただの《破軍》ではない。
諸葉に勝ちたいという強い気持ちを呪力に託し、天地自然の摂理を歪め、己の身を軽くしている。軽減できる量は、《破軍》後の両脚にかかる反動を抑え、もう一動作できる程度のマージンを作るのがぎりぎりなのだが、それでも恩恵は十二分。

瞬間肉薄と同時に、諸葉目がけて一気呵成に剣を上段から振り下ろしつつ、たとえこれがかわされても、石動にはもう一度だけ《破軍》へ繋げたり、あるいは《貪狼》に変化させる余地が残っている。
これが石動迅の、《雷影》の歩法。
《神足通》の秘奥義を超えたその先を以って、諸葉へ挑みかかる。
果たして――
石動の初太刀は、諸葉の肩口から逆の脇まで、袈裟を懸けるように斬り裂いた。
余地など残さずとも、一刀目で勝負が決まった。
（まさか……!?）
石動は目を剝く。
諸葉にあっさり勝ってしまったことにではない。
勝ったと見せかけられたことにだ。
石動が断ったのは、諸葉の残像。
見抜けなかった。
いっぱい食わされた。
石動はすかさず《破軍》のダブルへ繋げようとする。
あるいは《貪狼》へ変化させようとする。
しかし、諸葉の居場所を見失ってしまっている。
目標も定まらないのに、《破軍》も《貪狼》も意味がない。
迷っていたら、せっかく残した猶予を無為にしてしまう。
縮地の歩法などと無茶をやらかした反動が、じわじわと、鎖のように両足へからみついてくる感触が既にある。
（やむなし……！）
これ以上、迷っている暇などなかった。
石動が下した決断は、《破軍》のダブルでも《貪狼》への変化でもない。
ただその場で身を翻し、真後ろに向かって回し斬りを放つ。
残像で相手の目を眩ましたら、背後をとるのが定石だからだ。

そこに諸葉がいると賭けて剣を振り――
石動が斬ったのは空だった。

本物の諸葉は頭上へ跳躍している。

見事に裏をかかれた。
背後へ音もなく着地した諸葉に、首筋へ剣を当てられる。
「俺、《破軍》ってきらいなんスよね。リスクの割になーんか効果が見合わないってゆうか」
「……参った」
石動は破顔させられる。
大時計を確認すると、秒針はやっと「1」を差したところだ。
「勉強になったよ、灰村君」
《破軍》のダブルを習得できて、石動はごく単純に強力なフィニッシュブローになると思っていたが、その陥穽を諸葉は、《巨門》というかなり初歩の技で指摘してみせた。
悔しいと思う半面、胸が空くような想いもする敗北だった。
だから、後から笑いが込み上げてくる。
「もう一回やります？」
「いや。そう気軽に君へ挑戦してしまったら、気持ちが慣れてしまいそうで恐い」
「俺はそんな御大層なもんじゃありませんてば」
「昔、言っただろう？　人の価値の評価はね、自分ではなくて他人がするものなんだよ」
「悲しいっすね」
諸葉は憶えていてくれたのか、石動の言葉の続きを口にしながら、頭をかいた。
「また鍛えて、何か手応えをつかめたら、その時は挑戦させてもらうよ」
「待ってます」
諸葉は遠慮なく請け合ってくれた。

どこまでも自然体。
でもだからこそ、揺るぎないものを感じさせるその立ち姿。
天よりも高いハードルとして、いつまでも聳え立ってくれると信じさせる。
その意気に打たれずにはいられない。
だから石動は、その意気に応えたくて、ずっと秘めていた言葉を口にした。

「いつか君に勝ちたいんだよ。どんなに難しくてもね」

「いいっすね。じゃあその時は、今度は俺が挑戦させてもらいますからね？」

諸葉は笑った。
そうなったらきっと楽しいだろうなと、夢想する無邪気な少年のように。
いやはや全く敵わない。
（だから君は強く、そして君の強さはどこか快いのだろうね）
石動は深く納得する。
「あ、そろそろホームルームの時間なんで」
諸葉が壁の大時計を見て言い、一礼して去っていく。
その背中を、石動も追って武道館を後にする。
外の日差しは強く、太陽は早や高く、もう夏本番は目の前だった。

白騎士機関・ロシア支部、その本局のお膝元であるエカテリンブルク。
街の真ん中を流れるイセチ川の畔は、緑と歩道が整備され、住人や観光客の散策、または憩いの場として使われている。
和気藹々と道行く彼らに交じって、とある日本人男女の姿があった。
対岸にある観光名所「血の上の教会」を眺めながら、ぶらりと歩く。
「ロシアってもっと寒いとこだと思ってた。意外」
「夏場はそうでもないと、教えてもらったはずだ……よ」
「だったら避暑地みたいに、すごしやすいと思ってた。意外」
「湿気がすごいとも聞いていたはずだ……ね」
「蒸陽しい。早く帰りたい」
「用事がすめば……ね」
そんな益体もない会話をしながら、男の方が小さく肩を竦める。
「聞き分けるんだ。私たちは観光で来たわけではないのだから……ね」
「亮こそ聞き分けて。具体的には、用事がすむまでわたしに構って。もっと」
女の方が惚けた顔で、ワガママを言い出した。
「仕方がない……ね。腕くらいなら貸すよ」
男が言うと、女がいそいそと腕に腕をからめてくる。
まるで恋人同士のような振る舞い。
通りすがりの人々の、注目を浴びることがしばしば起きる。
しかし二人は、決して愛し合っているような仲ではない。
男の名は城場亮。
女の名は白井千佐子。
《移ろいの門》を使って、密かにこの街へやってきた二人の目的は一つだった。
この時間、この場所で会いたいと指定してきた人物が、対面から一人でやってくる。
道行く人々のロシア語や英語が飛び交う中——

彼女は日本語を使って声をかけてきた。
「もうかりまっか！」

あとがき

皆様、お久しぶりです！　あわむら赤光でございます。

このあとがきを書いております現在まだ十二月（二〇一五年）なのですが、「落第騎士の英雄譚」のアニメが凄すぎて毎週、大興奮で視聴しております。

そして、この本が刊行される二月には「最弱無敗の神装機竜」のアニメがもう放送されている予定で、どんな素晴らしいアニメになるのかと今からもうワクワクが止まらない毎日です。

「落第騎士」の作者の海空さんと、「神装機竜」の作者の明月さんには、アニメ前のお祝いで作者が皆に奢るという素晴らしい会を開いていただきました。海空さんの時にはワニの手とか、明月さんの時にはマタギ料理とか、珍しいものを食べさせていただきました。

そのうち当「禁呪詠唱」と「落第騎士」と「神装機竜」でワニや雉や熊を食べるネタが被るようなことがあったとしても、読者の皆様には生温かい目で見守っていただけると幸いです。

ちなみに「禁呪詠唱」のアニメ放映前に、誰かにご飯奢ったっけなー。

記憶にないなー。おかしいなー。

記憶に残しておくべく、慎んで謝辞のコーナーに参りたいと思います！

まずはサツキ&春鹿の「進級したぜウェイウェーイ」表紙と、裏テーマともいうべき石動の中見開きを完璧に描いてくださいました、イラストレーターのraemz様。入学して一年経ったサツキさんに、こんなに仲のいい友達ができるなんてホロリ的な感慨を、一目でバシーンと叩き込んでくれるような、最高のイラストに感激しております！

担当編集のまいぞーさんには、アニメもあった二〇一五年も終わったことですし、お互いゆっくりできますね……なんて言ってた舌の根も乾かないうちに、二〇一六年も軽く地獄を見るスケジュールになりそうですが、今後ともおつき合い願いますです。

北村編集長、Tさん、もなさん、編集部と営業部の皆さん、いつまで経ってもヒマにならないあわむらをこれからも支えてくださいませ。

そして、勿論、この本を手にとってくださった、読者の皆様、一人一人に。

広島から最大級の愛を込めて。

ありがとうございます！

十六巻は六月に刊行できるよう現在、鋭意執筆中です。

電帝を失い、白騎士機関の六組織である意味、最も弱体化激しいロシア支部で、いったい何が起きているのか、起きるのか――乞うご期待であります！

著者

あわむら赤光（あわむら　あかみつ）

第一回ＧＡ文庫大賞奨励賞受賞。広島人。

『超人高校生たちは異世界でも余裕で生き抜くようです！』（ＧＡ文庫刊）を読みながら、葵ちゃんに「俺たちでアダムとイヴになろう（キリッ」とプロポーズした後、「ここ無人島じゃなくて、異世界でござる」とツッコまれたい。愛のあるツッコミを受けたい。だって他三人の女性陣が全員（略

イラスト

refeia（レフェイア）

本作は女性キャラががみんな根性あるというか、要所要所でめっちゃ男前（？）なので、読んでいるとつられて元気が出てきますね。今回もモモ先輩とサツキがスゴいです。

Ｗｅｂサイト URL:http://q-orbit.jp/

twitterURL:http://twitter.com/refeia

ＧＡ文庫
聖剣使いの禁呪詠唱（ワールドブレイク）１５

あわむら赤光

発行人　小川　淳

発行所　SBクリエイティブ株式会社
〒１０６－００３２
東京都港区六本木２－４－５

装　丁　　AFTERGLOW（山崎　剛／西野英樹）
印刷・製本　中央精版印刷株式会社

２０１６年２月２９日　初版第一刷発行
２０１６年３月１５日　電子第一版発行

©Akamatsu Awamura　ISBN 978-4-7973-8619-6

ファンレター、作品の感想をお待ちしています

＜Webページはこちら＞
http://www.sbcr.jp/products/4797386196.html

（このページのスクリーンショットを撮って、ＱＲコードリーダーアプリで読み取れば紹介ページにアクセスできます。問合せのリンクよりお寄せ下さい。）

〈あて先〉
〒１０６－００３２
東京都港区六本木２－４－５
SBクリエイティブ（株）
ＧＡ文庫編集部 気付

「あわむら赤光先生」係
「refeia先生」係

http://ga.sbcr.jp/

聖剣使いの禁呪詠唱

15

聖剣使いの禁呪詠唱（ルーラー・ディクト）

あわむら赤光
ill.:refeia

The Swordbringer comes back.

GA文庫

聖剣使いの禁呪詠唱

15

The Swordbringer comes back.

気遣いは無用だわ？
諸葉に付きあってもらえるこの時間を無為にはできないもの
静乃だからこそ成る諸葉との特訓……
冥府の魔女はさらに強くなっていく。

気遣いは無用だわ？
諸葉に付きあってもらえるこの時間を無為にはできないもの

静乃だからこそ成る諸葉との特訓……
冥府の魔女はさらに強くなっていく。

特に何をするでもない。
芝生の日陰に寝転んで、
下草を靡かせる
風を受けて、
試合の時間が来るのを
静かに待つ。
ランクAへの挑戦当日――。
諸葉の教えが勇気をくれる。

ランクAへの挑戦当日――。
諸葉の教えが勇気をくれる。

特に何をするでもない。
芝生の日陰に寝転んで、
下草を靡かせる
風を受けて、
試合の時間が来るのを
静かに待つ。

で？要件って
何かしら？
僕はこのまま
灰村君と刃を交えに行くよ
黒雷を纏う不審な行動。
静乃たちに立ちふさがる目的とは？

で？要件って
何かしら？

僕はこのまま
灰村君と刃を交えに行くよ
黒雷を纏う不審な石動。
静乃たちに立ちふさがる目的とは?

CHARACTERS

キャラクター紹介

2つの前世をもつ少年

灰村諸葉

はいむらもろは

イラスト／refeia

サツキの前世
聖剣の巫女
善なる心の妹姫
嵐城サツキ
らんじょうサツキ
才能を隠す優等生
漆原静乃
うるしばらしずの
静乃の前世
王佐の魔女

聖剣使いの
禁呪詠唱
ワールドブレイク